

# 宗像・沖ノ島と神から見える日本の古代

## —宗像神信仰の研究（5）—

矢田 浩

### 概要

宗像と沖ノ島の古代史の謎を解くため、歴史史料や考古学的知見に加え、神と神信仰を含めた検討を行った。三女神五男神誕生の誓約神話は、宇陀の朱資源を握ったヤマトの勢力が、沖ノ島—瀬戸内ルートにより朝鮮半島の鉄の流入を図るため、鏡と朱でルート上の諸豪族を手なずけたのち、交易に携わる諸氏族を集めて沖ノ島で誓約と祭祀を行ったことを反映する。「海北道中」は、鉄の道だったのである。ヤマト勢力は鉄の対価となる交易品を握ることにより、それまでほぼ独占的に鉄を輸入していた博多湾を中心とする勢力から貿易の主導権を奪回し、ヤマト王権の下での日本統一への礎を築いた。その後5世紀末から7世紀に亘るヤマト王権の朝鮮半島出兵に際し、ムナカタが騎馬軍団の出航地となり大いに繁栄する。将兵が経由地の沖ノ島で航海安全と武運を祈り帰還時に感謝の祭りを行ったため、沖ノ島におびただしい奉獻品が遺された。663年白村江の敗戦以降沖ノ島祭祀はローカルなものとなり、やがて顕著な祭祀は終焉を迎える。

# 目次

- 1. はじめに
- 2. 神々から見たウケイ神話
  - 2.1 ウケイ神話の意図するもの
  - 2.2 ウケイ神話を構成する神々
    - 2.2.1 アマテラス
    - 2.2.2 スサノオ
    - 2.2.3 三女神
    - 2.2.4 五男神
  - 2.3 神々から見えてくるもの
- 3. 沖ノ島祭祀の見直し
  - 3.1 祭祀遺跡以前の沖ノ島
  - 3.2 従来の見方による沖ノ島祭祀遺跡
  - 3.3 沖ノ島祭祀の実像
    - 3.3.1 沖ノ島祭祀遺跡の特徴
    - 3.3.2 沖ノ島祭祀の謎
    - 3.3.3 古代祭祀の新しい見方
    - 3.3.4 沖ノ島出土青銅鏡の新知見
    - 3.3.5 石製品からわかる年代
    - 3.3.6 遺物からわかる祭祀の年代とその回数
    - 3.3.7 祭祀回数と歴代天皇
- 4. 総合考察
  - 4.1 古代ムナカタの浮き沈み
    - 4.1.1 ムナカタ古代史の不連続性
    - 4.1.2 海水準変動によるムナカタの地位の変化
  - 4.2 沖ノ島祭祀の始まり
    - 4.2.1 「祭祀遺跡」の年代
    - 4.2.2 朝鮮半島との交易路の変遷とムナカタ
    - 4.2.3 鉄の道と玉
    - 4.2.4 宇陀の朱
    - 4.2.5 朱の産地から分かるヤマト勢力の急成長
    - 4.2.6 ヤマト主導の沖ノ島祭祀の動機
    - 4.2.7 鉄の対価となる新しい資源
    - 4.2.8 沖ノ島祭祀開始と覇権交代
  - 4.3 古墳時代後半のムナカタ大爆発
    - 4.3.1 宗像市域の2千基の古墳
    - 4.3.2 大爆発の謎を解く牧神社
    - 4.3.3 半島への騎馬軍団派遣
    - 4.3.4 軍馬渡海基地ムナカタと沖ノ島祭祀
    - 4.3.5 百基の須恵窯
    - 4.3.6 造船業を示す14本の鋸
    - 4.3.7 田熊石畑の倉庫群と「胃形の箭」
    - 4.3.8 「宗像型」石室が示すムナカタ勢力の広がり
    - 4.3.9 軍港以降のムナカタと関連地域
- 結び
- [附編1] ムナカタ・ストーリー
- [附編2] 神々に関する文字資料の評価および古代神  
信仰検討の方向
- あとがき

## 1.はじめに

エジプト考古学で有名な吉村作治氏は、沖ノ島の神宝を「考えると夜も眠れなくなるほどエキサイティングだ。」と書いている[1]。氏はこの島を知って世界遺産への登録を熱心に提唱した。これがきっかけとなって地域での活動が始まり、ついに2017年世界遺産登録が実現した。

宗像沖ノ島で発掘調査された8万点以上の古代祭祀遺物は学術的に高い評価を受け、全点が国宝に指定されている。しかしこの祭祀の具体的目的と起源は、謎に包まれている。朝鮮半島への「海の道」の航海安全祈願のためと想像されてはいるが、これを裏付ける歴史史料は見当たらない。

一方古代から沖ノ島を神体島として護ってきた宗像大社が祭る三女神は、地方神でありながら記紀神話の中で皇室の祖先神天照大神の御子神という高い位置づけを与えられている。しかしこの神話は超自然的な内容であり、三女神信仰の実像ははっきりしない。本研究ではこれまで殆ど研究が行われてこなかった三女神の信仰分布の解析を、主として神社本庁の『全国神社祭祀祭礼総合調査（平成七年）』（以下『平成データ』）[2]所収の約8万社のデータを基本として実施し、その結果を考古学的な物証や歴史史料と対比させることにより、三女神信仰の起源を明らかにしてきた[3]-[6]（以下これらを「第1報」から「第4報」などとして引用する）。その結果は次のように要約される。

- ① 現在宗像三女神の一神以上を祭る全国の神社は約3,500社であるが（注1）、これは祇園信仰から派生した八王子信仰社を含む（注2）。これを除くと約2,900社となり、他神を祭る神社と比較すると11番目に当たる。古代史料の「延喜式神名帳」に載る式内社のうち社名から確認できる宗像系社は13社で、社名から推定される系統社中の順位は6番目である（注3）。宗像神の分布は全国に亘り、社数では広島県、山口県、愛媛県の順で多く、全神社数に対する比では山口県、和歌山県、三重県の順となる。ムナカタ（ムナガタを含む）の名を持つ神社は全国69社で、千葉県の13社を筆頭に青森県、長崎県の順となる。胸肩などの古名を持つ神社は、青森県の6社が多い。古代以降宗像神の信仰普及イベントが知られていないので（注4）、ほとんどの宗像神は上古から祭られてきたと考えられる。

- ② 三女神の各神は、それぞれ歴史的に異なる信仰基盤を持つと見られる。

最も古い信仰基盤を持つのは市杵島姫（以下イチキシマ）信仰であり、縄文時代前期に生まれた九州海人族が根拠地に使っていた遠賀川河口から旧宗像郡にかけての地域（以下これを大ムナカタと呼び、旧宗像郡をムナカタと呼ぶ）で形成されたと考えられる。

田心姫（以下タゴリ）は出雲族の祖神大己貴神（おおあなむちのかみ）（大国主と同神、以下オオアナムチ）

との繋がりが強く、宗像を含む複数地で共に祭られている。この繋がりは弥生時代初めに朝鮮半島南部の阿那（阿羅・阿邪とも）地方からの渡来人がムナカタに上陸し、ここを拠点に各地に勢力を広げた縁によると考えられる。

湍津姫（以下タギツ）は、瀬織津姫（以下セオリツ）が『日本書紀』成立以降一部改名したものと推定される。セオリツは、宇佐神宮が当初から祭っていた女神比咩神とおそらく同一神で、現在ヒメと読まれている比咩はもとその字音通りヒミと発音されていたと思われ、弥生の女王卑弥呼への信仰に基づくと推測される。この信仰は上記二神に遅れてムナカタに入ったと考えられる。

③ このように異なる起源を持つ三女神が<sup>うけい</sup>誓約（以下ウケイ）で同時化生した神話が創られた背景には、古墳時代前期までに形成された北東部九州とヤマトとの間の経済的・政治的同盟関係があると考えられる。

邪馬台国時代を含む弥生時代後期には、鉄素材を中心とする朝鮮半島（および中国大陆）の文物がもっぱら対馬一壱岐経由で伊都国（現糸島市）および博多湾岸に流入していた。しかし一方で出雲などの山陰地方は、これらを経由せず鉄素材等を直接入手していた。これは、宗像海人族が関与する対馬一沖ノ島経由響灘への「ムナカタルート1」が機能していたためと考えられる。

鉄が欠乏していた畿内の諸豪族は、そのころ機能していなかった瀬戸内海ルートを開拓し、ムナカタルート1と結合することにより鉄などのスムーズな流入を図ったと考えられる。この長距離交易ルート確立のため関連諸氏族が会盟し誓約を行ったことが、記紀の<sup>うけい</sup>誓約神話（以下ウケイ神話）に反映されたものと思われる。その誓約が新ルートのキーポイント沖ノ島で実施され、その後もここで祭祀が継続して行われたと推定される。

本報ではまずウケイ神話を構成する神々について史料検討と祭神解析などにより誓約に参加した諸氏族の実像を推定し、次いで最近の研究で見直されてきた沖ノ島祭祀の実像の解析を行い、総合考察で上記仮説の精度向上を行うとともに、この祭祀が500年以上も続いた理由の解明を行う。

そして巻末の〔附編1〕に、前報までの内容も含めて、本研究結果にも基づくムナカタの通史を、統一日本形成に対する寄与に力点を置いて「ムナカタ・ストーリー」として提示する。そのなかで、これまで触れなかった知見も補足する。

さらに〔附編2〕に、祭神解析とその結果の史料との照合に当たり参考とした代表的な史料について、本研究の立場からの評価を示した。本研究では、史料等のある程度意図的に選択して参考にしてきたが、偏りを指摘されるおそれがあるので、その選択の理由を明らかにした。そしてこれら史料と祭神解析からの古代神信仰復元の方角と、今後の検討課題を示した。

## 2. 神々から見たウケイ神話

### 2.1 ウケイ神話の意図するもの

第3報で見たようにウケイ神話の構成はきわめて複雑であり、このような説話が伝承として長く伝えられてきたとは到底思われない。なんらかの意図を持って緻密に構成された説話ではないか、との感を深くせざるを得ない。

その意図とは、地上に降臨した「天孫」天津彦彦火瓊瓊杵尊<sup>あまつひこひこほのにぎのみこと</sup>（以下ニニギ）を女神である天照大神<sup>あまてらすおみかみ</sup>（以下アマテラス）の正当な後継者とし天皇家の祖先と位置づけることであったことは、『日本書紀』（以下『書紀』、または「神代紀上」など各巻の通称で引用）名の神代紀下を見れば明らかである（以下日本書紀の本文と訓は岩波文庫版[8]による）。ただしウケイで生まれた天皇家の祖先神は、正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊<sup>まさかあかつかはやひあまのおしほみのみこと</sup>または正哉吾勝勝速日天忍骨尊<sup>まさかあかつかはやひあまのおしほねのみこと</sup>であった（これらの名に含まれるミミもネも尊称であり、両神は同神と考えられるので以下両者をオシホと呼ぶ）（表1）。

表1 記紀の誓約（うけい）神話の諸伝比較

書	日本書紀神代紀					古事記 (参考)
	第六段 本文	同 第一の一書	同 第二の一書	同 第三の一書	第七段 第三の一書	
親女神の名前	天照大神	日神	天照大神	日神	日神	天照大御神
清心証明の 条件と提案者	スサノオが男を生む (スサノオ)	スサノオが男を生む (日神)	スサノオが男を生む (スサノオ)	スサノオが男を生む (日神)	スサノオが男を生む (スサノオ)	事前提示なし
親女神の囁んだ物	スサノオの剣	自分の剣(3本)	スサノオの曲玉	自分の剣(3本)	剣(自分の?)	スサノオの剣
生まれた女神と順序 (鎮座地)	田心姫	瀛津嶋姫	市杵嶋姫命…遠瀛	瀛津嶋姫命 (市杵嶋姫命)	省略	多紀理毘賣 (奥津島比賣) …胸形奥津宮
	湍津姫	湍津姫	田心姫命…中瀛	湍津姫命		市寸島比賣 (狭依毘賣) …胸形中津宮
	市杵嶋姫	田心姫	湍津姫命…海浜	田霧姫命		多岐都比賣 …胸形辺津宮
その帰属	スサノオ	日神	省略	日神?(葦原中国へ)	記載なし	スサノオ
その理由	スサノオの者根	記載なし	省略	なし	スサノオの事前の言葉	スサノオの物實
スサノオの囁んだ物	天照の御統	自分の統の瓊	天照の剣	自分の統の瓊など	自分の統の瓊など	天照の御統
生まれた男神と順序	正哉吾勝勝速日 天忍穗耳尊	正哉吾勝勝速日 天忍骨尊	天穗日命	勝速日 天忍穗耳尊	正哉吾勝勝速日 天忍穗根尊	正哉吾勝勝速日 天之忍穗根命
	天穗日命	天津彦根命	正哉吾勝勝速日 天忍骨尊	天穗日命	天穗日命	天之菩牟能命
	天津彦根命	活津彦根命	天津彦根命	天津彦根命	天津彦根命	天津日子根命
	活津彦根命	天穗日命	活津彦根命	活津彦根命	活津彦根命	活津日子根命
	熊野櫛樟日命	熊野忍蹈命	熊野櫛樟日命	燭之速日命	燭速日命	熊野久須能命
				熊野忍蹈命	熊野大角命	
その帰属	天照大神	後では日神	記載なし	日神	日神	天照大御神
その理由	天照の御統	なし	記載なし	日神が事前に宣告	スサノオが奉る	天照の物實
勝ちの条件(事後)	――	――	――	――	――	手弱女を得る
うけいの判定 (スサノオから)	記載なし	勝つ験を得る	省略	「正哉吾勝ちぬ」と云い長 子の名につける	清心で満足	自らわれ勝ちぬと云う
三女神の降りた所	記載なし	筑紫の洲	記載なし(上記三宮?)	葦原中国の宇佐嶋	省略	記載なし(上記三宮?)
三女神を祭る氏族	筑紫の胸肩君等	記載なし	省略	筑紫の水沼君等	記載なし	胸形君等
その他		日神の神勅(道中)		海北道中(道主貴)		

しかし天孫として降臨したのは、生まれたばかりのその子のニニギである。なぜまだ幼いニニギが「真床追衾」(今も天皇即位儀礼に残る)にくるまれて地上に降りなければならなかったのか。これは天武天皇の皇后<sup>うののさららのひめみこ</sup>鵜野讃良皇女が、皇太子に立てられていた天武との間の子<sup>くさかべのみこ</sup>草壁皇子が天武の死後早世したため、持統天皇として即位し草壁の幼子<sup>かるのみこ</sup>軽皇子(後に文武天皇)へ継承した史実とよく似ており、多くの歴史家が孫への皇統継承を正当化するために創作された神話と見ている。

神代紀第五段(以下各段の本文のみ採用)では、アマテラスは伊弉諾尊<sup>いざなぎのみこと</sup>(以下イザナギ)と伊弉冉尊<sup>いざなみのみこと</sup>(以下イザナミ)との間の子である。それ以前の三代も夫婦神であり、当然神統を父系で継承してきたと考えられる。そしてイザナギ・イザナミは、日本国土や、様々な自然物をも、夫婦で生むのである。最後に人格神の三貴子を生むと、アマテラスを「光華明彩しくして、六合の内に照り徹る」という理由で日の神とする。そして続く第六段のウケイ神話では女神アマテラス(注5)が主役となり、ニニギ以下の皇統に繋がる。

祖父から孫への皇位継承には、前例がある。第33代推古天皇が亡くなったあと皇位についたのは、敏達天皇の孫田村皇子(舒明天皇)だった。この場合は間に用明・崇峻・推古と三代も挟んでいた(推古は用命の皇后であり、両者の間の皇子が聖徳太子)が、正当性はあくまで祖父からの継承にあった。天武に当たる祖父からの継承であれば、奇妙で複雑なウケイによる子神誕生神話は全く不要となる。なぜ独身の女神アマテラス(注5)から孫への継承神話が考えられたのか。

その理由については、持統の実子の子孫への皇位継承への固執が考えられる。天武には、10人の皇子があった。最年長の皇子は、壬申の乱で天武軍の総大将として大功のあった高市皇子<sup>たけちのみこ</sup>である。高市は、胸形君德善<sup>むなかたのきみとくぜん</sup>の娘<sup>あまこのいらつめ</sup>尼子娘が生んだ子である。母が身分の低い采女<sup>うねめ</sup>であったため、序列は第8位に過ぎなかった。持統の皇子は、序列第1位の草壁皇子一人である。序列第2位の持統の姉の子<sup>おおつのみこ</sup>大津皇子は人望が高かったが、持統即位の年に謀反の疑いで自死させられた。皇太子草壁は持統の称制3年に早世したが、持統はなんとしても天武の他の皇子に皇統を譲る気がなかったらしい。草壁の死の翌年持統が即位するが、太政大臣となった高市は持統の10年に死んだ(注6)。しかしまだ天武の皇子が7人もいたに拘わらず、その次の年に持統は草壁の子軽皇子を皇太子とし、間もなく軽に譲位したのである。それを正当化するために考えられたのが、天武に当たる夫神が登場しないウケイ神話であるということができよう。

以上のイザナギ・イザナミに始まり神武天皇以下の皇統に繋がる一連の神話は、この時点ですべてが創作されたものではなく、その原型があってそれを改変したものと思われる。



もちろんこのような複雑なストーリーの神話を、持統や『書紀』撰上時の元正天皇が直接発案したはずはない。ましてや、実際に執筆に当たった下級官僚が、自らの裁量で創作できたはずはない。知謀に長けた『書紀』の最終的な編纂者が、皇室の内意あるいは示唆を受けてこのような筋書きを描き、執筆者たちに命じたとしか考えられない。その実力者とは、当時の最高権力者右大臣藤原不比等と考えられる。不比等は、『書紀』編纂の最終段階において、人臣の中では編纂者の筆頭であった（以下森博達[10][11]に基づく）。

不比等は、『書紀』の撰上を見届けてまもなく死去した。『書紀』、特に神代紀には、多くの異説が併記されている。だれもが、編纂途上にあったと思わざるを得ない。『書紀』がそのような未完成の段階で撰上されたのは、不比等存命中に間に合わせるためとして始めて理解できる。『書紀』の他の部分でも、最終段階での加筆が（聖徳太子関連の部分の他に）不比等の父藤原鎌足とその主天智天皇に関する部分に集中している[11]ことも、『書紀』が天智の皇統とそれを支える藤原氏の権威付けのために修飾されたことを明示している。

このようにウケイ神話は、不自然に見える皇位継承を合理化するため画かれたストーリーであったと思われる。しかしそこに登場する多くのメンバー（神々）には、なんらかの歴史的背景があったに相違ない。そうでなければ、ウケイの相手素戔鳴尊（以下スサノオ）や、ウケイで生まれた8神のうち皇室の祖先オシホ以外の7神が登場する理由が分からない。

この説明として、8神については起源の異なるいくつかの氏族が同盟してある事業を実行するために、いわば「義兄弟」の誓いを立てて、その後の運営に当たったことを表象しているのではないかという仮説を、第3報で提出した。「ウケイ」には、誓約という字が当てられている。関係者が集まって誓約を行ったのである。そしてその事業とは、国際交易の大動脈確立とその運営であったと考えられた。

そうするとウケイ神話は、三女神と五男神のそれぞれを祭る8氏族が、かれらの親神とされているアマテラスとスサノオの前で事業遂行の誓約を行ったことを意味する。以下これらのメンバーについて考察する。

## 2.2 ウケイ神話を構成する神々

### 2.2.1 アマテラス

『書紀』ではアマテラスと呼ばれる以前の神名は「日神」で、太陽神であることは間違いない。農業民は、太陽暦によって農作業を行う時期を決める。特に水田稲作民にとっては、それが最も重要な情報であった。したがって弥生時代には、多くの人々が太陽

を神として祭っていたことは間違いないであろう。その太陽の運行を知って人々に伝える人は、「日知り」(<sup>ひじ</sup>のちの「聖」)と呼ばれた。そのような予言者が、指導者になって神として祭られる。

アマテラスは、現在全国で八幡神に次ぐ 11,000 社以上に祭られているが(第 1 報)、古代には一般の人々が祭る神ではなかった。『延喜式神名帳』(注 3)にも、はっきりアマテラスを祭っていたと思われる神社は見当たらない(伊勢神宮は別格で同神名帳には載らない)。天照が社名にある神社は 6 社あり、うち 2 社に後世の訓注でアマテラスと読み仮名が附いているが、播磨国揖保郡の<sup>いはいぼにいますあまてらす</sup>粒座天照神社および筑後国三井郡の<sup>いせあまてらすみおや</sup>伊勢天照御祖神社の祭神は、いずれも古くから物部系の天照国照彦火明命(以下ホアカリ)とされていて、天照は本来アマテルと読まれていたと思われる。

天照がアマテルと訓注されている式内社は<sup>おさだにますあまてるみたま</sup>大和に他田坐天照御魂神社と<sup>かがみつくりにます</sup>鏡作坐天照御魂神社、山城に<sup>このしまにます</sup>木嶋坐天照御魂神社、摂津に<sup>にいやにます</sup>新屋坐天照御魂神社と 4 社あり、いずれも式内大社で、木嶋坐と新屋坐は名神大社(注 3)である。これらの社の祭神は、後に加わったと思われる祭神を除くと、鏡作坐と新屋坐が上記ホアカリで、他田座が天照御魂神、木嶋坐が大国魂である。これら 4 社が太陽信仰の社であることについては、大和岩雄氏の有力な考証がある[12]。天照御魂は、『海部氏勘注系図』(附編 2 参照)中の「部直等氏之本記」にホアカリの亦の名と書かれているので、4 社中 3 社がホアカリを祭る。

ホアカリは、神代紀第九段本文には単に<sup>ほのあかりのみこと</sup>火明命と書かれ、火中で出生した天孫ニニギの三人の子の末子で<sup>おわりのむらじ</sup>尾張連等の祖であり、隼人の祖の<sup>ほのすせりのみこと</sup>火闌降命(ホスセリ)と皇統の祖の彦火火出見尊(<sup>ひこほほでみのみこと</sup>ホホデミ)に次いで生まれたとされる。この段には 8 種の異説がありその兄弟の数と出生順もまちまちで、ホアカリのない一書もある。前記編纂時の混乱が、まざまざと感じられる。中でも第六の一書では、天忍穗根尊の長子が天火明命であり、次子がニニギで他の子神は書かれていない。また第八の一書では、やはりオシホの子をホアカリとニニギとし、ニニギの子がホスセリとホホデミであるとする。

『<sup>せんだいいくじほんぎ</sup>先代舊事本紀』(附編 2 参照)も、物部氏の始祖を天照国照天<sup>あまてるくにてるあまのほあかりのくしたまのにぎしはやひのみこと</sup>火明櫛玉饒速日命(以下ニギハヤヒ)と書きニニギの兄とする。同書には他に火明の名はないので、ホアカリとニギハヤヒは同一神であり、天皇家と物部氏は同祖ということになる。上記『海部氏勘注系図』にもホアカリとニギハヤヒは同神と書かれていて、この伝承の信頼性はかなり高いと思われる。『舊事本紀』天孫本紀ではニギハヤヒの子<sup>あまのかごやまのみこと</sup>天香語山命(以下カゴヤマ)の系譜の四世の孫<sup>おきつせそのみこと</sup>瀛津世襲命が尾張連の祖とあり上記神代紀の諸書と一致する(注 7)。このように多くの史料がニギハヤヒ=ホアカリとニニギがいずれもオシホの子と伝えており、これが本来の伝承であろう。『書紀』本文でニギハヤヒが「消された」のは、ニニギの「天孫降臨」をクローズアップするためと思われる。



そして『舊事本紀』は、ニギハヤヒが王権のしるしとして天照大神あまてるおおかみから天璽瑞宝十種を授けられ天降りしたと伝える。上記の天照御魂4社は本来この物部族の共通祖神ホアカリ＝ニギハヤヒを祭った神社と考えられる。このホアカリ＝ニギハヤヒの祖神天照大神あまてるまたは天照御魂が、アマテラスの原型なのではないか。

『書紀』がまず単に「日神」と書くのは、祭っていた物部族がこれを男神としていたためであろう。アマテラスは太日靈貴おおひるめのみちという別名が示すように、もともと太陽神を祭る巫女を表していた。アマテラスは、その巫女を太陽神と同一視して神格化したことになる。しかしこれは上記の男神の姿とは相容れない。

伊勢神宮境内には、アマテラスのものと姿と考えられる女神が祭られている。それは、「正宮に準じる」（伊勢神宮ホームページによる）第一別宮との取り扱いを受け荒祭宮あらまつりのみやの祭神で、天照座皇大御神荒御魂あまてらしすめのおみかみのあらみたま、すなわちアマテラスの荒御魂（神の荒々しい側面）である。この宮は正宮の左手小高い丘の上にあり、伊勢で古くから祭られてきた神と思われる。この荒祭宮の神がそれより先鎮座したとされるのが、宮川上流域の度会郡大紀町に鎮座する瀧原宮たきはらのみやと瀧原竝宮たきはらならびのみやで、いずれも内宮の境外別宮である。神宮の由緒を見ても、この両社はアマテラスが祭られる前にこの地で祭られたことは間違いない。

ところでこの神は、『神道五部書』（附編2参照）内の『天照座伊勢二所皇大神宮御鎮座次第記』と『倭姫命世記』などいくつかの中世の神道関係文書で、瀬織津姫（以下セオリツ）と同一神とされている。上記『海部氏勘注系図』にも境内社天照皇大神宮の祭神として「天照大神荒魂瀬織津姫命」と記されているので、広く信じられてきた伝承であることが分かる。

そして伊勢でセオリツを祭っていたのは、やはり物部系の氏族らしい。『舊事本紀』ニギハヤヒ天降りの段で、供をする32随神のうちに天牟良雲命あまのむらくものみことがあり、度會神主等祖わたらいのかんぬしたちのおやとある。天牟良雲（以下ムラクモ）は天村雲と書かれることが多く、カゴヤマの子でニギハヤヒ直系の孫に当たる。セオリツすなわちアマテラスの荒御魂を祭っていたのは、ニギハヤヒの子孫であるらしい。実際にムラクモを祭る神社が、伊勢市内に4社ある。ムラクモを祭る神社は全国的に少ないが、その多くは水銀に関連する地域に祭られている。伊勢神宮の神郡であった多気郡と度会郡に亘って広く辰砂が産出したらしく、金属資源を追って全国に広がった物部族がここに勢力を持っていたことは頷ける。物部族は後述のように九州で辰砂を採取していたが、資源の枯渇により新しい鉱脈を求め中央構造線に沿って東進し伊勢に到ったのであろう。

物部族は始祖神天照国照天火明櫛玉饒速日命（ニギハヤヒ）の名から知られるように太陽信仰を持つので、九州から招来したセオリツを太陽神祭祀の巫女の元祖として祭っ

ていたと考えられ、この時点ですでに『書紀』の大日靈貴<sup>おおひるめのむち</sup>（以下オオヒルメ）のイメージに近づいていたであろう。

ところが第3報に述べたように、崇神天皇の大殿内で天照大神（この時点では天孫族と物部族とに共通する太陽神であったと考えられる）が地元の大国魂<sup>おおくにたま</sup>の神とともに祭られたことで問題が生じた。この神は、神代紀等で出雲族の祖神大己貴命<sup>おおあなむちのみこと</sup>（大国主命と同神とされる、以下オオアナムチ）の別名とされている。そこで出雲神信仰の強かったヤマトの民衆をなだめるため、大物主という名の神（これもオオアナムチと同神とされる）をその子と名乗る出雲族の大田田根子に祭らせることにした。そして朝廷のみが祭る祖神としての太陽神祭祀にふさわしい場所をさがし求め、結局は海上の日の出を望む伊勢に落ち着いた。しかしアマテラスの斎宮倭姫命<sup>やまとひめのみこと</sup>の遍歴から見えるように、伊勢でセオリツを祭っていた物部系の人々はそれほど素直には受け入れなかったらしい。

その祭祀を定着させたのは天武天皇であったが（注8）、その時点では自らになぞらえた男神として祭らせていたのではないか。ところが前述のように、持統および後継の元正までの各帝と政治の実権を握る藤原不比等とが、編纂中の『書紀』にウケイ神話とそれに続く「天孫降臨」のストーリーを強引に割り込ませたため、伊勢の主祭神が持統になぞらえた女神になった。これはセオリツを祭っていた地元の物部族にとって受け入れに抵抗が少なかったのではないかと思われる。

## 2.2.2 スサノオ

三女神の父となっているスサノオは、第1報で見たように全国で八幡神とアマテラスに次ぐ9,000社以上に祭られているポピュラーな神であるが、その信仰の本来の姿はきわめてわかりにくい。記紀神話では神代の準主役で、悪役として舞台回しの役を勤めているが、地上に降りてからは全くの善神に変貌する。そして出雲の祖神オオアナムチとはスサノオの子（『書紀』神代紀八段本文、『舊事本紀』）または五世孫（同第一の一書）・六世孫（第二の一書、『古事記』）としてつながるが、このような多様な伝承には作為の存在が感じられる。

『書紀』とは独立に編纂された『出雲国風土記』（附編2参照）を見ると、出雲で最も重要視されていた神は、オオアナムチと同一神と考えられる大穴持命である。大穴持命の名は、諸神の中で最も多く26回も現れる（うちその子の親として4回）。そのうち20回は「天下所造<sup>あめのしたつくらし</sup>」という最高の称号を伴う（称号だけで大穴持命の名がないこともある）。これに対し、スサノオは11回で、うち7回はその子の親として載っているに過ぎない。本人の伝承の4回は、いずれも地名の由緒談である。しかし称号としては神が附くことが4回あるので、恐れられていた存在らしい。オオアナムチとの接点は全くなく、

オオアナムチをスサノオの子や五世あるいは六世孫というのは、『書紀』などの作り話のようである。

『出雲国風土記』の記述では、もともとスサノオは出雲の国作りに携わった神ではなく、神代紀の新羅との往復説話で分かるように、比較的新しい渡来人であるらしい。このようなスサノオをアマテラスの弟として持ち出したのは、アマテラスの有り難さを強調する目的でヒール(悪役)が必要であったからではないか。『古事記』の大国主説話(『書紀』にない内容が多い)にも見えるように、オオアナムチには本来特に悪行などの問題点はなかったので、その祖先を悪役スサノオとすることで出雲の大和への屈服を正当化したのではないか。

このスサノオが、古代以前にどのくらい祭られていたかが明らかではない。奈良時代初期に成立したと考えられている備後国風土記(逸文)の蘇民将來說話の中に早くも姿を現し、武搭むとうの神が実は速須佐能男はやすさのおと名乗る。この時点ですでに日本古来の神信仰から離れた流行神となっている。荒々しい外来神としてのスサノオのイメージが、すでに一般的に広まっていたと考えられる。『書紀』のウケイ説話は、このイメージを利用し、全国に勢力を広げていた出雲神を祭る人々に対し、天皇家統治の正当性を示すのに利用したのであろう。

蘇民将來說話は平安京遷都後すぐ創始された八坂神社(祇園社)の由緒談となり、武搭神は佛教系説話の牛頭天王ごずてんのうとされ全国に広まった。この牛頭天王が明治維新後の神仏分離令によって皆スサノオに変えられて、スサノオを祭る神社のかなり多くの部分を占めている。

『延喜式神名帳』で社名からスサノオ神を祭ると思われる社は、出雲に2社、備後と紀伊に各1社あるが、12社以上のオオアナムチに比べると少なく、『出雲国風土記』に呼応している。そのうちで飯石郡須佐郷の須佐神社は、『出雲国風土記』の鎮座説話と対応するので、地名からもスサノオ神話発祥の地であることは間違いないであろう。もう一つの出雲郡の社は、オオアナムチの子のアジスキを祭る社の境内社扱いで、出雲国内でもスサノオは有力神と認められていなかったことが分かる。上記式内4社の中で紀伊在田郡の須佐神社のみが大社(明神大)であり、スサノオ信仰がすでに紀伊半島にまで広まっていたことが分かる。しかしそのルーツが出雲かどうかは、不明である。紀伊半島の熊野信仰では、スサノオが本宮の主神家津美御子けつみみこと同一神とされるようになったが、この系統のスサノオはそれほど多くない。『平成データ』では、名に「熊野」を持つ神社2590社のうちスサノオの名が祭神にあるのは約10%の261社である。

### 2.2.3 三女神

三女神については前報までに詳細に検討したので、ここでは要約して述べる。

**タゴリ**：出雲との繋がりが強い女神である。『古事記』と『舊事本紀』にオオアナムチの後神とされていて、<sup>あじすきたかひこねのみこと</sup>味耜高彦根命（『古事記』に<sup>あじしきたかひこね</sup>阿治志貴高日子根、以下アジスキ）を生んだとされている。『播磨国風土記』にも、宗形大神奥津嶋姫命（タゴリと考えられている）が伊和大神（オオアナムチと思われている）の子を孕んだという地名伝説が記されている。出雲大社瑞垣内の筑紫社の神として単独で祭られている。全国では 151 社に単独で（他の 2 女神を伴わず）祭られているが、ムナカタでは宗像氏の祖神として古墳上の大都加神社に大国主と共に、弥生時代の田熊石畑遺跡や東郷高塚前方後円墳に近接した矢房神社にもオオアナムチと共に祭られている。栃木県では 61 社が単独で祭り、その多くにはオオアナムチとアジスキとが伴う。

**タギツ**：単独で祭られることが 69 社と少なく、性格がはっきりしない。三女神のタギツが瀬織津姫（以下セオリツ）に置き換わった神社があるので、セオリツと同神の可能性が示唆される。両神はいずれも水神として滝や急流近くに祭られることが多いのも共通する。セオリツにはヒメの位置に比咩が附く例が多い。比咩を含む名の女神を祭る社は 900 社以上あり、その 38% は単なる「比咩」として祭る。「比咩」の名への強い信仰の存在が窺われる。比咩という字はもともとヒミとしか読めない。この名に敬称の「呼」を附ければヒミコとなるので、卑弥呼への敬仰の名残をとどめる神ではないかとの仮説を第 3 報で提出した。

『書紀』以前の成立と推定される<sup>おおはらえのことば</sup>『大祓詞』（附編 2 参照）にも瀬織津比咩と書かれ、また朝廷に強い影響力を及ぼした宇佐神宮で当初から祭られていた神が比咩である。上述のように伊勢神宮でアマテラスの荒魂として祭られる神を瀬織津比咩とする伝承があり、天皇家にもゆかりの神であったと考えられる。

**イチキシマ**：三女神のうち最も多く祭られる神で、単独でも 1700 社以上に祭られる。宗像神全体と同様広島県が最も多く、118 社を数える。密集域が島根県西部から広島県中央部へと連続しており、江の川を經由して瀬戸内へ出る水運に関係していると見られる。同様に内陸水運に沿って分布する例は多く、鳥取県日野川、京都府由良川を出発点とする山陽側への水路など各地に見られる。九州内を旧郡単位で見ると、旧宗像郡で宗像神を祭るのは 14 社であるが、イチキシマを単独で祭るのは 3 社のみである。これに対してとなりの旧遠賀郡では宗像神を祭る 18 社のうち 14 社がイチキシマのみを祭るので、大ムナカタ内の信仰の中心は遠賀川河口よりにあったと見られる。イチキシマのみを祭る

神社は、九州では大野川流域の大野郡の 18 社が最も多く、豊前沿海から内陸水運に続く活躍の名残を示す。この分布域は、海を越えて伊予へ、さらに四万十川流域経由で土佐へと続く。

縄文前期から晩期まで続いた遠賀川河口の山鹿貝塚から、巫女でかつリーダーと見られる多数の貝輪などを着けた女性人骨（複数）が出土した。同様の女性人骨は宗像市など他の九州の貝塚からも出土する。女性による海岸祭祀は東アジア古来の伝統であり、これがイチキシマ信仰の母体となったと考えられよう。

#### 2.2.4 五男神

オシホ：オシホは、もちろん天皇家の祖神であるから、五男神のリーダー格として挙げられるのは当然である。アマテラスの項で考察したように、ニギハヤヒ＝ホアカリとニニギとがいずれもオシホの子というのが本来の伝承と思われるので、オシホは天皇家と物部氏の共通祖神ということになる。

『平成データ』にはオシホを祭る神社約 1100 社が載るが（『古事記』風の表記なども含む。以下の 4 神も同じ）、八王子系の社を除くと約 450 社になる。このうち約 290 社はニニギやその子の彦火火出見尊（以下ホホデミ）などと共に祭られていて記紀神話が普及してのち比較的新しく祭られた神と思われるのでこれも除外すると、古代から祭られていた可能性のある神社は約 160 社となる。福井県の 14 社が目立つが、その多くは異なる信仰系統の白山神社が主祭神として祭っている。次いで福岡県の 12 社が多く、北部九州と近畿地方に多い。注目されるのは、豊前では宇佐神宮以外の唯一の式内社香春神社が「忍骨命神社」として祭っていることである（「忍骨」の表記は八王子系を除くと北部九州の 5 社しかない）。山岳信仰の中心地英彦山神宮の祭神もオシホミミである。英彦山神宮の主祭神は現在忍穂耳と書かれるが、江戸時代末期の『豊前国志』[13]には押穂根命と書かれている。大牟田市の彦山神社は忍穂根尊を、佐賀県伊万里市の彦山神社は天忍骨命をそれぞれ祭神として記している。これらの神社が英彦山神宮から祭神を勧請したときにはオシホネであったことが明らかで、オシホミミとオシホネが同一神であることは疑いない。

ムナカタの近くでは宮若市にオシホミミを主神とし『書紀』などがその後神とする栲幡千千姫（以下タクハタ）をも祭る初子神社がある（以下図 1 参照）。

		社名	主祭神	他主祭神
五男神を祭る神社	①	伊久志神社	イクツヒコネ	豊受大神
	②	生子神社	イクツヒコネ	
	③	四宮神社	ホヒ	
	④	男田神社	アマツヒコネ	
	⑤	初子神社	オシホミミ	タクハタ
	⑥	乙子神社	クスビ	
ニギハヤヒを祭る神社	①	天照神社	ニギハヤヒ	
	②	笠城権現神社	ニギハヤヒ	
	③	笠城神社	ニギハヤヒ	
	④	穂掛神社	ニギハヤヒ	

宗像神社	■	現在宗像神あり(三女神)
境外七五社	□	現在宗像神なし
現在宗像神を祭る神社	▲	イチキシマのみ
	▼	三女神



図1 宮若市の五男神を祭る神社と関連神社 (google map を利用)

ホヒあまのほひのみこと：天穗日命（以下ホヒ）は、神代紀第九段本文では出雲の国譲り説得のためタカミムスビにより出雲に派遣されたが、オオナムチにおもねって帰らなかった神とする。しかしホヒの子孫である出雲国造が 8 世紀以降代々の天皇に奏上する『出雲国造神賀詞』(附編 2 参照) は、同神が立派に役目を果たしたとする。いずれにせよこの神は、天皇家と出雲族を繋ぐ役割を担っている。第六段本文も出雲臣いづものおみと土師連はじのむらじの祖とする。第二の一書ではこの神がオシホに代わって五男神の筆頭となっている。出雲とのつながりを保証するため入ったものであろう。

『平成データ』にはホヒを祭る神社が約 930 社載るが、八王子系の社を除くと約 400 社である。うち国譲りの記紀神話に基づくと見られるオオナムチと共祭される社と、「鷲神社」などの名で祭られる歴史時代の出雲から関東への集団移住伝承に対応すると見られる社を除くと、固有の信仰に基づく可能性のあるのは約 280 社となる。しかしその分

布には、はっきりした中心がない。祭る神社が最多の県は岡山県で、福岡県では 14 社が祭る。ムナカタの近くでは上記初子神社のごく近くに四宮神社がある。単独でホヒのみを祭るので、ホヒを祖と仰ぐ氏族が居住していたことを示唆する。

アマツヒコネとイクツヒコネ：あまつひこねのみこと天津彦根 命（以下アマツヒコネ）は、神代紀におおしかうちのみこと凡川内 直・やましろのみこと山代 直の祖とあり、『新撰姓氏録』（附編 2 参照）ではその他にも 10 氏族の祖となっている。凡川内氏は摂津・河内両国を統括する豪族であり、この地域には渡来人が非常に多い。山代（山城）も同様に渡来人の多いところなので、この神は渡来人に対する重しの意味があるのかも知れない。これに対していくつひこねのみこと活津彦根 命（以下イクツヒコネ）には氏族の祖の記述は全く見えない。アマツヒコネとイクツヒコネを祭る社は、八王子信仰の社を除くとそれぞれ 102 社と 21 社あり、少ないながらそれぞれ祭る人々が存在したようである。

両神の分布はきわめて偏っており、両神とも高知県でそれぞれ 26 社および 8 社と最も多く祭られ、後者は全て前者を祭る神社に共に祭られている。

福岡県に 1 社のみのアマツヒコネを祭る男田神社が、やはり宮若市内の前述 2 神社の近くにある（図 1）。イクツヒコネを祭る社は福岡県に 3 社あるが、そのうち 2 社が宮若市にある。そのうち 1 社は上記初子神社にごく近いいくし生子神社で、『筑前国続風土記付録』[14]（以下『付録』）には元亨三年（1311）鎮座とある。祭神も当時から変わらない。現在の社地は南方に豊かな水田地帯を挟んで遠賀川の支流犬鳴川を見下ろす高台の上にある。江戸時代には宮若市内の犬鳴川は二本に分かれていて、その北流は現在の高台の下を流れていたらしい。そしてその高台の並びに、三女神を祭る三所神社もある。両社は 500 m も離れていない。『宗像神社史』によると、この社は宗像神社境外七五末社の一つ宮田若宮に比定されるという[15]。宗像族が古くからこのルートに浸透し、生子神を祭る人々と協力関係にあったことが窺われる。

宮若市の他の 1 社伊久志神社は、生子神社の西方直線距離で約 6.5 km の犬鳴川から分かれる山口川の河原にある（注 9）。ここは舟運の終点の船着き場であったと思われる。ここから陸路で海拔 170 m の見坂峠を超えて現在の福津市本木へ出て古賀から博多に到る道は、『書紀』の記す神功皇后の西征路であり、古代から利用されてきたルートである。地形上筑前の東西を結ぶ要路であり、現在もここを九州道が通る。弥生時代後半ムナカタに沿う海路が利用しにくくなっていた頃（4 章参照）、この交易路の重要性が高くなっていたのであろう。この地域に汐井掛遺跡（第 4 報参照）ができた理由が納得できる。なお『付録』は、このほかに山口の南方のかつての宮永村に伊久志社を、小伏村に伊久志森を記す。森として祭られていたことは、非常に古くから信仰されてきた神であるこ



とを示す。『鞍手郡誌』[17]にも、生子神社の項に「生子はまた伊久子とも訓む。伊久子社郡中諸処にあれどもこの社を第一の大社とせり。」とある。イクツヒコネを祭る人々（以下イクツヒコネ族と呼ぶ。他神を祭る人々についてもこの呼び方を用いる）が、このあたりに多く住んでいたことが分かる。

同図中に示すように、上記両イクシ神社の周辺に 5 社の宗像神社の境外末社が展開する。七五社のうち旧宗像郡以外では、この旧鞍手郡の 5 社が最も多い。宗像海人族は、この交易路において内陸水運と接続する陸路を担当するイクツヒコネ族と連携していたのではないかと考えられる。このようなつながりによって、古代以降も宗像氏がこの地域とのつながりを保ってきたのであろう。

『宗像大菩薩御縁起』（附編 2 参照）に記す宗像大神宮末社の中にも伊久志明神が記されていて、その後も七五社中に数えられていることも、宗像氏とイクツヒコネ族のつながりを示す。『筑前国続風土記拾遺』（以下『拾遺』）[18]には、伊久志社が現在の宗像市東郷の「仲といふ所に在」とある。『宗像郡誌』[19]も矢房神社（第 3 報参照）の境内社として伊久志神社を記し、「昔シ仲ト云所ニ、廣大ノ社殿アリシガ、」と書く。実際に矢房神社には伊久志神社の鳥居がある（写真 1）。『平成データ』に登録されている「イクシ」という名を持つ神社は、全国で前記宮若市のイクツヒコネを祭る 2 社以外には見あたらないので、この伊久志神社もイクツヒコネを祭る神社であったと考えてよいであろう。



写真 1 宗像市日の里三丁目（もと東郷）の矢房神社に残る伊久志神社の鳥居

上記両イクシ神社の中間の宮若市宮田に、単独でアマツヒコネを祭る男田神社がある。神名からアマツヒコネとイクツヒコネは兄弟神と考えられているが、このように両神が近接して祭られていることから、それぞれを祭っていた人々もきわめて近い関係にあった兄弟氏族と推定される。

高知県のイクツヒコネを祭る 8 社がすべてアマツヒコネをともに祭ることも、この推定を裏付ける。両神を祭る高知県の社のほとんどは、四万十川の中・上流域のかつての窪川町（現在は四万十町）に祭られている。ここは四万十川が蛇行しながら南流から西流に向きを変えるところで、東北に山を越えれば容易に土佐湾に出ることができる。現在国道 361 号が通っているこのルートは、伊予から土佐に出る古代交通路の要衝だったと考えられる。ここにはアマツヒコネを単独で祭る社が 18 社もあるので、アマツヒコネ信仰が主体であることは間違いなく、ある時期にアマツヒコネ族が集中して移住してきたのではないか。

アマツヒコネを祭る社は、高知県に次いで岐阜県の 15 社と隣り合う愛知県の 10 社が多い。この中には、多度を名乗る社が目につく。これらの元社は三重県桑名市の式内社多度大社（明神大）で、アマツヒコネを主祭神として祭る。この古社は伊勢湾に注ぐ木曾・長良・揖斐三川の河口を見下ろす多度山の麓にあって、この山を神体山として祭っていたとされる。濃尾平野を一望の下に見下ろす位置にあるこの山が、聖山としてあがめられたのは当然と言える。多度を名乗る全国の神社 15 社のうち 13 社が愛知・岐阜・三重の三県に集中し、そのほとんどがアマツヒコネを主祭神とする。なかでも岐阜県に多いのは、上記三川の上・中流域であるためであろう。これら河川で運ばれる物資の交易の中心が、多度山麓にあったのではないか。濃尾平野は物部系の尾張氏の本拠地である。アマツヒコネ族も尾張氏と共にここに来て、河川水運に携わったのであろう。

アマツヒコネとイクツヒコネを祭る社が多い地域は、いずれも内陸水運とこれに接続する陸運の要地にある。上記の高知県のアマツヒコネを祭る神社の名に「河内神社」が 13 社もあるのも、内陸水運との関係を示す。滋賀県の琵琶湖西岸にもアマツヒコネを祭る 4 社とイクツヒコネを祭る 2 社がある。イクツヒコネを単独で祭る彦根市の彦根神社は、彦根という地名の元になった神社である。これも琵琶湖水運に携わった人々が祭った神社であろう。

以上の両神を祭る神社の分布を見ると、この両神を祭る兄弟氏族は、内陸水路を利用する水陸運の専門家集団ではないかと推定される。そして以上の各地域とそれに近い外海に面する地域に、宗像神、特にイチキシマの分布が多く見られる。たとえば多度大社の下の揖斐川河口に面してイチキシマを祭る二つの神社があり、また揖斐川を遡って岐阜県に入った安八郡から揖斐郡にかけては、多度系社とイチキシマを祭る数社が混在している。ムナカタに隣接する鞍手地方に上記両神を祭る社群と多くの宗像ゆかりの社が混在することから、この専門集団を各所に案内し移住させその能力を発揮させたのは、宗像海人族なのではないか。そしてその集団の原住民の地が、宮若市域であったらしい。

イクツヒコネを祭る神社は畿内にも 3 社あるが、京都府の京田辺市と宇治田原町の 2

社はそれぞれ木津川河岸と宇治川の支流にあり、大和盆地や宇陀からの水運に関わる神社と思われる。高市皇子を育てた高市<sup>たけちのあがためし</sup>県主が祭った橿原市の高市御県神社は、大和川に注ぐ曾我川とその支流の高取川との合流点近くにあり、高取川を遡ると飛鳥の中心に出られる重要な位置にある。高市皇子の母尼子<sup>あまこのいらつめ</sup>娘は、高市県主宅に身を寄せ采女として宮廷に出仕し大海人皇子（天武天皇）とおおあまの<sup>みこ</sup>と出会ったのであろう。

そしてこの周囲の旧高市郡にはイチキシマを単独で祭る神社が5社もあり、イクツヒコネとイチキシマ、そして高市県主と宗像氏とのつながりの強さが示唆される。いずれも大和川水系にあり歴史的に重要な位置に祭られている。うち寺川水系には3社あり、十市町の十市御縣坐神社には豊受大神にイチキシマが配祀されている。ここは高市皇子が慕ったという異母姉十市皇女<sup>とおちのひめみこ</sup>の生地と見られる。これを遡ると胸肩君徳善が祭ったという外山<sup>とび</sup>の宗像神社に通じる。飛鳥の中心に通じる飛鳥川にも1社ある。曾我川上流の丹生谷にも1社あり、宗像族が水銀朱を求めてきた人々を大和盆地に案内したことを想像させる。

**熊野神**：神代紀第六段本文は五男神の最後の神（注10）を熊野櫛樟日命（以下クスビ）<sup>くまのくすびのみこと</sup>と記すが、第一の一書は熊野忍踏命<sup>くまのおしほみのみこと</sup>（第三の一書には忍隈命<sup>おしくまのみこと</sup>）、第七段第三の一書は熊野大角命<sup>くまのおおくまのみこと</sup>と書く。これらはおそらく同一神格と考えられ、以下総称して「神話熊野神」とする。これを松江市八雲町の熊野大社の祭神（以下「出雲熊野神」とする）とする説が有力であるが、紀伊の熊野三社の祭神（以下「紀伊熊野神」とする）と考える人もある。しかし出雲熊野神と紀伊熊野神を祭る社の祭神名はいずれも『書紀』の上記神名とは異なるので、ここでは別神として考察する。

八王子社を除外すると神話熊野神は全国で66社と少ない。石川県の11社が最多で、他は5社以下である。福岡県には2社しかなく、いずれも遠賀川流域の八幡西区馬場山の熊野神社と宮若市宮田<sup>おとご</sup>の乙子神社がクスビを祭る。後者は上述の宮若市の四男神を祭る神社と同様、クスビを単独で祭る。社名も、生子・初子・乙子・男田と互いに類似点がある。

乙子神社は、山中を屈曲して流れてきた八木山川がやや開けた平地に出た地点にある。「クマ」の最も古い語義は曲（隈）であり、河川や道の曲がった所を云う。川の屈曲部の外側には土砂が堆積した平地ができる。クマノはその平地を云った語であろう。出雲の熊野大社も、紀伊半島の熊野本宮旧社地と熊野速玉大社も、いずれもそのような場所に立地している。乙子神社の祭神にクマノが附いているのも、納得できる。「クマノ」は古代日本人が使っていた普通名詞と考えられ、熊野神の本家探しは無意味であろう。

**五男神と物部神**：図1で見るように、五男神を祭る神社群の中核に、前述のニギハヤヒを祭る古社天照神社がある。この神社がオシホミミと后神のタクハタを祭る初子神社に400mと特に近いことは、ニギハヤヒがこの両神の子であるという『舊事本紀』と『海部氏勘注系図』の記述の真実性を示すと思われる。この神社はもと物部族の聖山笠置山頂にあった社が移って来たと伝えられている。笠置山の西・北麓を巻くように屈曲しながら流れる八木山川の上流に、同神を単独で祭る三つの神社が鎮座する。その一つ穂掛神社は、山頂の神社に参詣できない人が稲穂を掛けて祈ったという言い伝えがあり、天照神社の旧地でもある。他の2社の名も、山の名を冠した笠城神社と笠城権現神社である。この一帯が物部族の旧地であることを示している。

上記の五男神を祭る社と天照神社は、遠賀川中流から分かれる犬鳴川とその支流が作る低地にある。縄文の温暖化時代宮若市中心部を含む遠賀川中流域は古遠賀湾の入り江となっていて、そこに遠賀川上流や犬鳴川が直接流れ込んでいたと推定されている。後に見るように、弥生時代後半寒冷化が進み、宗像の入り海がほとんど消滅していたらしい。宮若市の中心部が陸地化したのも、そのころであろう。鉄器を持っていた物部系氏族は、干潟となったこの地域を美田に変えたであろう。上記五男神を祭る氏族も、そのころここに入ったと思われる。5面の後漢鏡や豊富な鉄器を副葬品として出した汐井掛の大墳墓群は、この美田を見下ろす丘陵上にある。弥生時代後期を中心とするこの遺跡は、このころの犬鳴川流域の繁栄を示していることは疑いない。

ところが古墳時代に入ろうとする頃また温暖化が始まり、遠賀川中流域は再び大きな氾濫原となったと考えられる。当時の水理技術では、氾濫を防ぐことは難しかったであろう。汐井掛の大墳墓群に対応する大きな集落址が発見できないことは、水害による埋没を示唆する。生活基盤を失った入植者たちは、大挙して移住を図らざるを得なかったのではないか。これが『舊事本紀』が詳しく伝える、32神と多くの部人を伴ったニギハヤヒの東遷に対応すると思われる。この東遷に従った多くの「部」の中には鞍手・遠賀両郡を中心とする北部九州の地名を持つものが多いのも、このことを裏付ける(注11)。

この32神を祭る神社は、後年の普及によるとと思われる春日系社の天児屋根命を除けば、この地方には全く残っていない。北部九州全体にも、ほとんど見られない。一方この32神には、上記五男神は含まれていない。これはこの五男神を祭る氏族が、北部九州残留組であったからであろう。水運に関わる諸氏族は、移動の必要がなかったのである。しかし上記各地の水運の要地に散在するアマツヒコネとイクツヒコネを祭る社が示すように、これら氏族の一部の者は要請に応じて各地に赴いたものと思われる。

宮若市に見られるニギハヤヒとオシホの繋がり、他地域でも見られるだろうか。上記ニギハヤヒ東遷の方向に沿って祭神分布から検証してみよう。

ニギハヤヒを祖神とする氏族（天神）は、『新撰姓氏録』（附編 2 参照）で祖神を明示する氏族中 118 氏と最多である[21]。さらに前述のように同一神の場合が多いと考えられるホアカリを祖神とする氏族（天孫）58 氏を加えると、「諸蕃」を除く全 405 氏の実に 43 %に達する。しかし全国のニギハヤヒを祭る神社は 135 社とそれほど多くない。これにホアカリを祭る神社のうちニギハヤヒと同一神の可能性の高い社（前述）を加えると、191 社になる。千葉県と愛媛県が最多の 19 社であるが、千葉県の事情については第 1 報で述べた。これに次ぐのが 16 社の愛知県、15 社が三重県・大阪府・福岡県の 15 社で、全体として東遷の方向に沿っている。そのルートに沿ったニギハヤヒ＝ホアカリとその親神と考えられるオシホ（タクハタを伴う場合も示す）の北部九州の分布を図 2 に示した。これに物部の氏族神の布都御魂（以下フツ）と布留御魂（以下フル）（フツ・フル神は剣霊であり、物部氏の象徴）、さらにその他歴史時代の人物を除く物部を名乗る神（神名を括弧で示す）をも加えて示した。

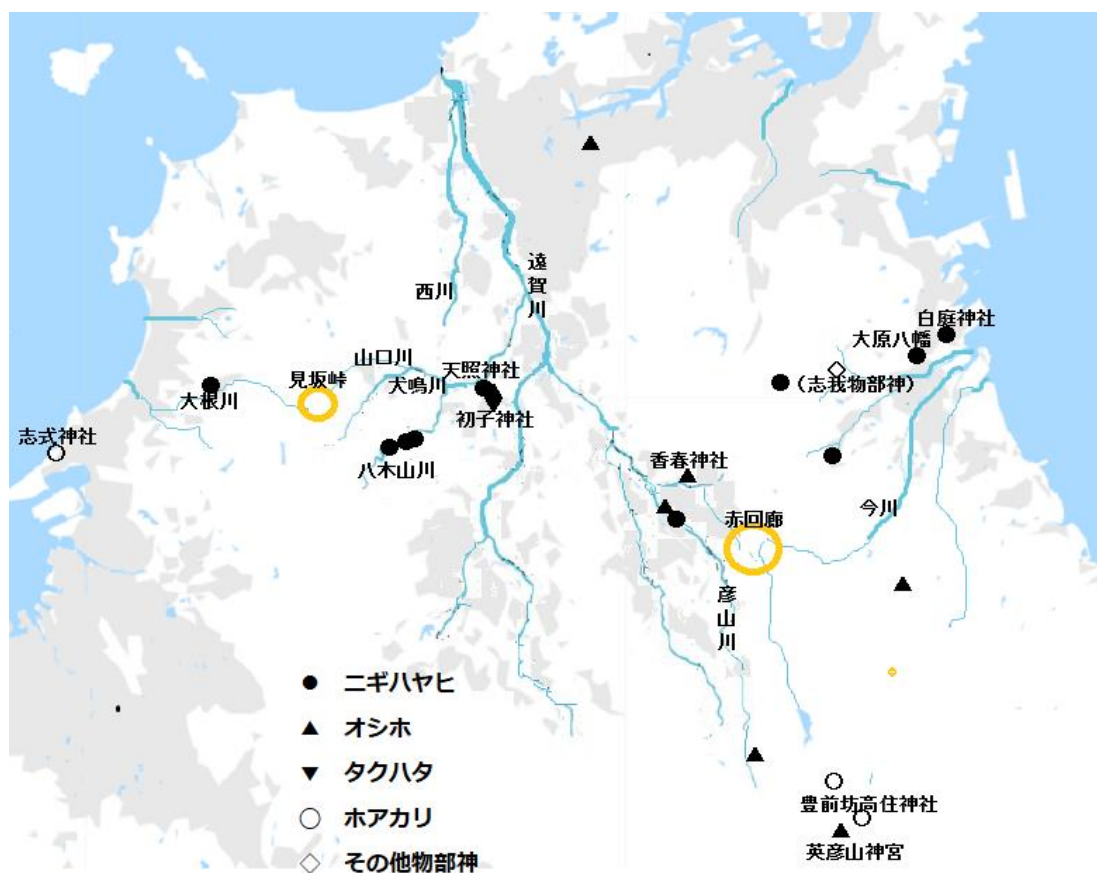


図 2 北部九州の物部系神を祭る神社の分布 (google map を利用)

ホアカリの最西端は福岡市東区の玄界灘に望む志式神社で、この辺りが物部族渡来時の上陸地であった可能性がある。それに古賀市のニギハヤヒを祭る熊野神社とフツを祭る齊宮が繋がり、前記見坂峠を越えて犬鳴川水系のニギハヤヒを祭る諸社に繋がる。



さらに遠賀川本流に出て彦山川を遡り香春神社と田川郡大任町のニギハヤヒとオシホをそれぞれ祭る2社に達する。ここからは殆ど峠らしい峠もなしに赤回廊を通して、行橋市に注ぐ今川流域に出ることができる。みやこ町のニギハヤヒを祭る2社は今川からやや離れるが、行橋市から海に注ぐ諸川の下流部がかつては大きい湾であったことを考えればその沿岸に祭られていたことで理解できる。そして荒津と呼ばれる荻田町の古代からの港にはニギハヤヒを祭る大原八幡神社があり、ニギハヤヒと共にその十世の孫大原<sup>すくね</sup>足尼<sup>とよのくにのみやつこ</sup>(『旧事本紀』に豊国造の祖とある)を祭る。ニギハヤヒ東遷以降もここに物部族が拠点を置いて交易等の中継地としていたことが窺える。そして1 km 東に全長 119 m の御所山前方後円墳(5 世紀前半と推定されている)があり、その上の白庭神社にニギハヤヒが祭られている。この古墳が物部氏一族の墓であることは間違いないと思われ、時期から見て被葬者が大原足尼であってもおかしくはない。その2 km 北に有名な豊前最古(3 世紀末-4 世紀初頭)の石塚山前方後円墳(推定全長 134 m)がある。この古墳も周囲の状況から物部系氏族の長の墓と考えて間違いないであろう。

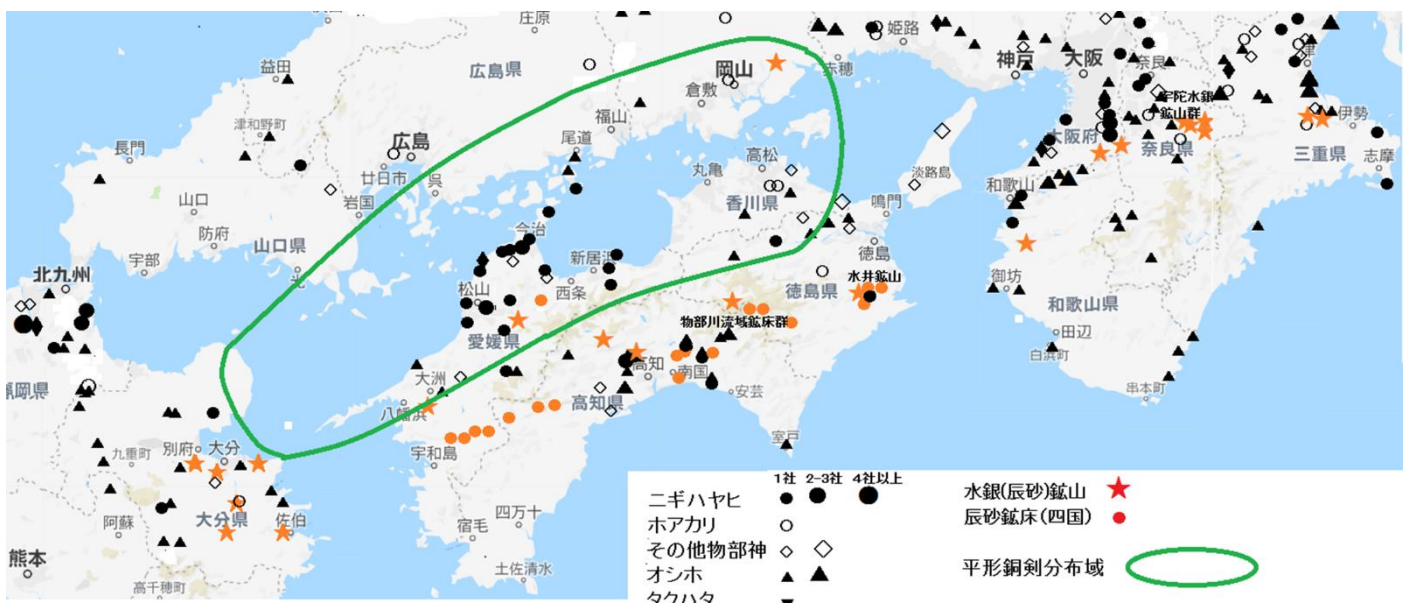


図3 西日本の物部系神社と水銀鉱床 (google map を利用)

さらに東方へのオシホを含む物部系諸神の分布状況を図3に示した。これら諸神を併せてみると、東遷ルートは英彦山付近から国東半島東部へ出て豊予海峡を渡ったように見える。そしてニギハヤヒが最も多く祭られる愛媛県では瀬戸内海の島々を含む沿海部に特に集中し、瀬戸内航海路の要衝を抑えている。なお松山市北部八反地の国津比古神社はニギハヤヒのみを主祭神とするが、その1.4 km 西にオシホとタクハタを祭る柳神社がある。宮若市の天照神社と初子神社の組み合わせとそっくりの位置関係である。この

ルートは緑線の範囲で示した弥生時代後期の平形銅剣埋納遺跡の分布域と一致している。その中心には松山市の弥生時代の大集落文京遺跡がある。この遺跡が平形銅剣普及の起点であったのではないかとされている。文京遺跡は弥生時代中期後葉に盛期を迎え、後期に入ると突如解体してしまう[22]。物部族は四国ではまずここに拠点を構え、さらに東方へ移動したらしい。

さらに香川県と淡路島のホアカリとフツ・フル神を介して、大阪湾岸のニギハヤヒを中心とした密集地帯に繋がる。なかでも弥生時代の大遺跡和泉市の池上曾根遺跡のすぐそばには、宮若市や松山市同様ニギハヤヒを祭る曾禰神社とオシホとタクハタの両親神を祭る泉穴師神社（泉大津市）が1 km 以内の距離にセットで存在し、この遺跡が物部氏直系の一族の拠点であったことを示唆する。池上曾根遺跡の盛期はやはり弥生時代中期であるが、その形成と終末は文京遺跡よりやや遅れるので、文京遺跡を拓いた同系統の氏族が東方に進出したと考えれば辻褄が合う。上記近接する両神社の祭神から見てそれが物部系氏族であることは間違いないであろう。ただしこれら遺跡の年代は、汐井掛遺跡の年代より古い。物部族の東への移動・入植は、最終的な本宗氏の移動に先駆けてかなり古くから始まっていたらしい。

一方オシホを含む物部系諸神は、上記ルートを離れた大分県南部や、瀬戸内沿海から離れた愛媛県内陸部、高知県中・東部から徳島県などにも広がっている。そしてさらに紀伊水道を越えて和歌山県から奈良・三重県まで続く。この方向は、まさに列島の中央構造線に沿っていて、鉱物資源との関係が推定される。日本でまだ銅や鉄の精錬が始まっていない上古代、利用され珍重された鉱物は、辰砂（硫化水銀）である。屍体への施朱が、縄文時代に始まり遠賀川河口の山鹿貝塚以降西日本に広まった日本独自の風習であることを、第2報で述べた。弥生時代から古墳時代にかけて、全国的に有力者の墓には施朱の跡が見られる。朱は権威の象徴として重要視されていたのである。同図中に、これらの地域で現代まで稼働していた水銀鉱山と、四国についてはその他の水銀鉱床をも示した[23][24]。

中央構造線に沿った地域で、上記諸神と水銀鉱山または鉱床との間にかなりよい相関が認められる。大分県ではオシホとフツとが水銀鉱山とよく対応している。また大野川上流のニギハヤヒとオシホを祭る神社は、景行紀や豊後風土記に見える「血田」説話と対応し、かつての辰砂産地と思われる。景行紀にある「直入物部神」は、今もニギハヤヒを祭る竹田市直入町長湯の靫山八幡社に主神として祭られている。また大分市東部から佐伯市にかけては丹生川、丹生神社、丹生島、古代の丹生郷の地名があり、丹と呼ばれた辰砂の産出が多かったところである。ここにはオシホを中心とする物部系諸神を祭る神社が多く、オシホも水銀資源に関係していたと思われる。



高知県でも上記両神と水銀朱との相関が強い。物部川流域は下流に弥生早期からの有名な田村遺跡があるが、上流山地に辰砂鉍床が多いため辰砂が流されてくる下流で早くから注目されていたと思われる。この地域ではニギハヤヒとオシホを併せ祭る神社が多いのが注目される。オシホが元来物部神であったことは間違いのないであろう。物部川は発音が異なるため物部族との繋がりが不明瞭であるが、地元では物部氏ゆかりの川と考えられている。中流域の香美市香我美町にあるオシホを祭る天忍穂別神社は、地元では物部氏が祭ったとされている。

物部川流域に隣接する徳島県的那賀川流域も辰砂鉍床が多く、水井鉍山は近世から近代にかけての国内有数の水銀鉍山であった。そのごく近くの若杉山遺跡では、まさに今問題としている弥生時代後期から古墳時代初めにかけての辰砂採掘跡（坑道）が確認されている。ここから約 3.5 km の那賀町和食郷<sup>わじきごう</sup>にニギハヤヒを祭る富留戸神社がある。ここには共同主神としてフツとフルが祭られている。古代物部族は、河床や露頭からの辰砂採取に止まらず坑道を掘って採鉍していたらしい。徳島県では、北部の吉野川流域とその支流域でも弥生時代の朱精製の跡が発見されていて、この地域の物部系諸神を祭る神社に対応している。

以上のように二つの経路で東方へ進出したと見られる物部神は、大阪・奈良・和歌山の 3 府県の境界のあたりで合流するように見える。ニギハヤヒを祭る神社が大阪府の南東部に集まり和歌山県橋本市高野口町の古社信太神社<sup>しのだ</sup>に続くが、その中心の金剛山地に水銀鉍山群がある。和歌浦湾に注ぐ紀ノ川はまさに中央構造線上にあり、その周辺の山地は水銀鉍脈の宝庫である。古代の丹（水銀朱）産出地には丹生津姫（ニウはニユウ・ニフ・ニブとも読まれる、以下ニウツ）が祭られていることが多いが、紀ノ川沿いを中心とする和歌山県では 32 社がニウツを祭っている。これに奈良県の宇陀・吉野地方の 10 社を加えるとニウツを祭る全国 72 社の過半数を超える（注 13）。紀ノ川下流の和歌山市にも 2 社の丹生神社がニウツを祭るが、その一つ栗栖<sup>くるす</sup>の丹生神社にはニギハヤヒの子宇摩志摩治命<sup>うましまじのみこと</sup>も祭られている。ニギハヤヒはすぐ近くの岩橋<sup>いわせ</sup>の高橋神社に祭られているが、この 2 社の背後の丘には国特別史跡の岩橋古墳群がある。

ニウツと物部神との関係は必ずしも明瞭ではないが、少なくとも中央構造線上では両者が共にあるいは近接して祭られていることが多く、神格化された丹（水銀朱）とその採鉍者の祭る神との関係が考えられる。

**宗像神と物部神および朱との繋がり：**上記の物部神と朱との相関に関して注目されるのは、これらと宗像神、特にイチキシマとの相関である。大阪府では宗像神を祭る神社は 30 社と少ないが、うち 28 社が三女神のうちイチキシマのみを祭る（第 1 報参照）。和歌

山県も同様で、宗像神を祭る神社 80 社のうち 73 社がイチキシマのみを祭る。このようにイチキシマ単神の比率が高い府県は、他地方には見られない。特に後者では 17 社がイチキシマとニウツを共に祭る。イチキシマは辰砂産出地域ではない沿海部にも多く祭られているので、宗像海人族は辰砂鉱床発見以前に進出していたと思われる。

同県南西部の御坊市では、弥生時代前期の渡来人文化である韓国の松菊里型住居や無文土器、さらに日本最古級の青銅のヤリガンナの鋳型が出土している[25]（以下附編 1 図 21 参照）。高知県の田村遺跡でもそのころの松菊里型住居が見られる[26]。このような朝鮮半島から遠隔の地に渡来人が到着するには、全国ネットワークを持つ海人族の協力なしには考えられない。国内の松菊里型住居はもちろん北部九州に多いが[27]、ムナカタの今川遺跡では最も古い前期初頭の層にみられる[28]。宗像海人族が渡来人の先導をしていたことを示唆する。上記御坊市では松菊里住居が堅田遺跡の他に小松原Ⅱ遺跡でも見付かっているが、同地の湯川神社にはイチキシマが合祀されている。

宗像海人族は山鹿貝塚の女性人骨に見られるように朱についての興味と知識を持っていたので（第 2 報参照）、その後の物部族らの辰砂資源の探査にも協力したのではないかと考えることができる。

### 2.3 神々から見えてくるもの

---

以上の検討から分かるのは、三女神五男神がいずれもムナカタとそれに隣接する宮若市の範囲に古くから祭られている神々であることである。三女神のうちイチキシマとタゴリは弥生時代以前からムナカタで祭られてきた古い神で、タギツはそれよりやや遅れてムナカタに落ち着いた神と見られる。

五男神は、宮若市内に互いに近接してしかもそれぞれ単独の神社に祭られている。このような祭られ方は他地域には全くなく、おそらくここがこれらの信仰の発祥地と思われる。そしてこの地域が物部氏本宗氏の故地であるので、いずれも物部系氏族が祭った神々と考えられる。このようなローカルな神々が登場する物語が天孫族の起源の前置きに据えられたのは、これらの神々を祭る人々の連携がその後の日本国家形成に大きな影響を与えたためと思われる。図 4 に宗像神と物部系神の北東部九州での祭られ方を一括して示す。物部系の人々は、おそらくムナカタよりやや西に上陸して見坂峠あたりから筑豊地方に入った後、赤回廊から周防灘に出て東方へ向かったのであろう。ムナカタはすでに出雲族の勢力範囲に入っていたので、同居はせず隣接地に入ったと思われる。このような不即不離の関係は、第 1 報で見たように津軽・印旛・ヤマトなどで見ることができる。



図4 北東部九州における宗像神と物部系神を祭る神社の分布 (google map を利用)

これまで見てきたように、三女神のうちイチキシマを祭る人々は全国的な水運交通を主導してきたと思われるが、特に沖ノ島を経由した朝鮮半島との交流に長い伝統を持っていた。タゴリは出雲を中心とした日本海沿岸交易を象徴する神であり、ムナカタに拠点を置く出雲系の宗像氏の祖神でもある。五男神のうちアマツヒコネとイクツヒコネはいずれも内陸水運に関わった氏族が奉じた神であったと見られる。クスビなどと書かれている神話熊野神は、屈曲した河川の表現が出雲の熊野神や紀伊の熊野神と共通しているので、やはり水運に関する神と思われる。

これら海・水運交通に関与する神々に、政治的な意味を持つ神々が加わる。前報で見たように、タギツは倭国に平和をもたらした卑弥呼への崇敬を象徴する比咩神に由来すると考えられ、物部神とつながりがある。オシホは物部氏の祖神のニギハヤヒと天皇家の祖先ニニギとの共通祖神である。ホヒは、記紀神話によると、天孫族と出雲族との提

携交渉の代表を務め現在に至るまでその子孫が出雲大社の祭祀を司ってきた国造氏族の祖神である。これらの神々が意味するところは、天孫族を含む物部系氏族が主導し出雲に関する氏族と水運交通の実働氏族らとが従った連携を示していると言えよう。

このことは、三女神五男神の「両親」アマテラスとスサノオの像にも示されている。アマテラスは『日本書紀』編纂の最終段階で持統天皇になぞらえて女神とされたと思われるが、本来太陽信仰を持つ天孫族を含む物部系氏族の氏族神の天照御魂<sup>あまてるみたま</sup>などの名を持つ男性神であったと考えられる。これに対してスサノオは、悪業を重ねて天上から追放され、出雲族の天孫族への屈伏を表現する役割を担う。出雲ではそれほど重要神と考えられていなかったスサノオを主役の一人として持ち出したのは、全国的に出雲系の人々の勢力がまだ強かったため、その本宗氏の祖神オオアナムチを悪神とすることがはばかられたためであろう。

ウケイ神話が語る誓約の目的は、この後示すように広域水運交易路の構築あるいは安全確保と考えられる。この交易路は、これまで出雲経由の日本海航路のみが接続していた響灘から沖ノ島経由朝鮮半島に到る国際交易路「海北道中」(ムナカタルート 1) に対し、さらに瀬戸内海を制した天孫+物部系勢力の開拓した瀬戸内経由畿内へのルートを接続するものと考えられる(後出図 12 参照)。

重要な輸出交易品であった出雲を象徴する玉と、主要な輸入品の鉄で作られた物部氏のシンボルである剣が、ウケイ神話において三女神五男神の出生の「物根」<sup>ものざね</sup>として重要な役割を演じることは、この交易路の本質を端的に示すものと言えよう。

### 3. 沖ノ島祭祀の見直し

#### 3.1 祭祀遺跡以前の沖ノ島

沖ノ島には縄文時代前期以来ほぼ継続した人間活動の跡がある。まず祭祀開始以前の時代の沖ノ島の考古遺物を、調査報告[29]-[31]や最近の知見[32]を参考に見ておこう。

**縄文時代：**沖ノ島の最南端、祭祀遺跡に上る途中左側の社務所前遺跡（かつて社務所が置かれていた）で、縄文から弥生時代の遺物が見つまっている。縄文時代では、前期のそばた曾畑式土器が多い。この土器は、前報[3]で述べたように宗像市のさつき松原遺跡や遠賀川河口の山鹿貝塚から出土しているが、特に山口県の響灘沿岸出土の土器に類似しているという。曾畑式土器は壱岐・対馬から韓国南東部の東三洞遺跡などトンサンドンで出土していて、九州海人の広域的な活動を示す（附編 1 図 20 参照）。中期には遠賀川周辺から響灘沿岸に分布する瀬戸内系の船元式土器が多くなる。土器の搬入は後期には途切れるが、晩期中頃には黒川式土器（鹿児島県日置市の黒川洞穴遺跡にちなむ）が多く現れる。

石器では石鏃が多く、特に大型で「かえり」を持つものが多い。より大型の、石銛いしもりと考えられる石器も 10 点近く出ている。この島には大型の陸棲動物はいないので、これらの狩猟具は海獣や大型魚類の捕獲に用いられたものと見られている。解体に用いられたと思われる石匙やスクレーパーと呼ばれる石器も、何点か見つまっている。実際にこの遺跡では、大型のアシカであるニホンアシカの骨が多く出土した。時期は縄文時代前期から後期にわたっていた。そのほかの魚類の骨はあまり多くないので、ここに渡った縄文人はアシカ猟を主な目的にしていたらしい。石器の素材の大半を占める黒曜石は、前期は主に佐賀県の腰岳産または星鹿半島産と見られ、中期は大分県姫島産が主体となっているという。ここには広範囲から海人が集まっていたことが窺われる。

**弥生時代：**最近武末純一[32]が再検討を行っている。社務所前遺跡には弥生時代前期からの遺物が含まれる。注目されるのは、戦時中に兵士によって沖ノ島から持ち去られ現在山形県にある中期前半の細型銅矛である。これと同時代と思われる銅矛が、銅剣・銅戈と一緒に、朝鮮半島南部馬山湾の出口西側の加浦洞祭祀遺跡から出ているという。これらは、岩の隙間に差し込まれた状態で発見された。これは沖ノ島祭祀の遺物の出土状況と似ている。この遺跡は湾口から出て行く船を見下ろす断崖にあり、航海の安全や上首尾を祈った祭祀の跡ではないかと推定されている。そして武末は、沖ノ島出土土器の中に架浦洞で武器型青銅器と同時に出土した朝鮮半島の後期無文土器が含まれていたことを指摘している。馬山湾から対馬への距離は釜山付近からよりは遠いが、その出口にある巨済島から出発すれば渡海距離はほぼ同じである。後に示すように、馬山湾の背後

には、ムナカタへの渡来人の故地と見られる咸安（第3報参照）がある。渡来人が外国への渡海に先立ってここで祈りを捧げ、そして到着地を前にして沖ノ島でまた祈りを捧げたのであろうか。上記沖ノ島出土銅剣は、航海に関する祭祀が弥生時代中期までにすでに行われていたことを示すと考えられる。

弥生時代後半沖ノ島出土土器はまた多くなり、遠賀川流域から瀬戸内地方にかけての影響が見られるという。朝鮮半島無文土器も、架浦洞遺跡に続き<sup>ろくとう</sup>勒島式土器が出土していることが報告されている。この土器は弥生時代中期初頭から前半が中心で、宗像市の田熊石畑遺跡からも出土している。また大島のろくどん遺跡からも、紀元前2世紀頃の朝鮮半島製の土器が出土しているという。このことから弥生時代には、韓国南東部との交渉が沖ノ島一大島経由で継続して行われていたことが推測される。朝鮮半島人が漁業の目的で沖ノ島に渡ることは考えられないので、弥生時代にも沖ノ島ルートが機能していたことが明らかである。

以上のように、沖ノ島には縄文から弥生時代にかけて、広い地域との交流を示す遺物が残されている。そしてムナカタのみではなく、その周辺との強いつながりが窺える。航海の安全を祈る祭祀の始まりも、弥生時代中期前半に遡る可能性がある。

### 3.2 従来の見方による沖ノ島祭祀遺跡

---

遺跡と遺物の内容を簡単に見てみよう。詳細は、前掲の各調査報告書[29]-[31]で見ることができる。概説書や図録も出版されていて[33]-[35]、全体を概観するのに便利である。実物のおもなものは、宗像大社の神宝館で見ることができる。これら報告とその後定着していた見方に基づいて概要を述べる。

沖ノ島で確認されている祭祀遺跡は図5に示すように23箇所あるが、すべてが詳しく調査されているわけではない。これらの遺跡は、祭祀の推定年代により次の4段階に分類されている。



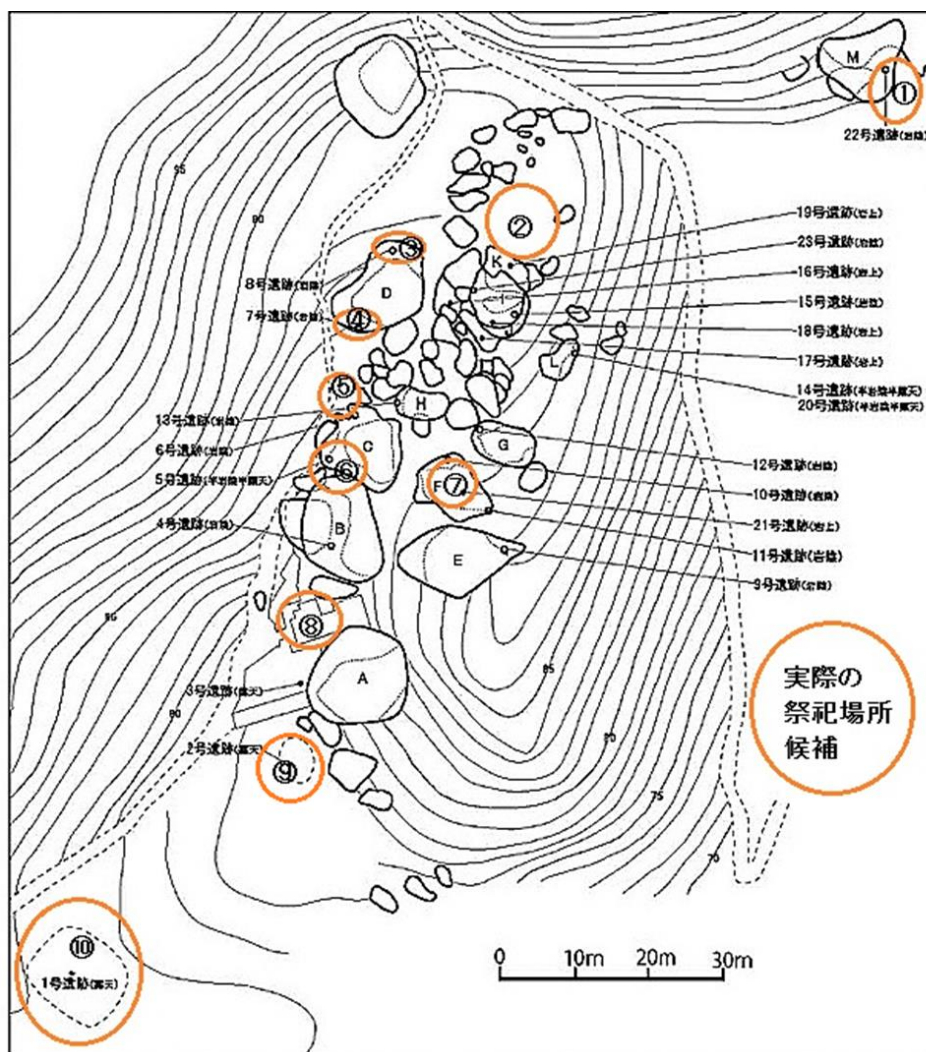


図5 確認されている沖ノ島祭祀遺跡の位置と祭祀場所候補  
(笹生[36]のトレースを用いて作成)

## ① 岩上祭祀

巨岩の上で行われた祭祀の跡であり、5つの遺跡が調査されている。このうち21号遺跡では、はっきりとした祭壇の遺構が発見された。2.2×2.5 mの四角の石組の「磐境」の中に、神の依代（磐座）と考えられる大石が置かれていた。

推定年代が最も古く、そして豪華な出土品が発見されたのは、17号と18号遺跡である。ここからは、三角縁神獣鏡を含む合計31面の青銅鏡や、鉄剣・鉄刀など多くの鉄製品、勾玉・管玉など多くの装飾品が発見された。これらの祭祀の時期は、4世紀の第3四半期とされる。

ヤマト王権が支配していた畿内にもこの頃これほどの遺物を出した祭祀遺跡はなく、比較的大型の前期前方後円墳（全長100～140 m級）からの出土品と品目が似ている。すなわち、この頃のヤマト王権に属する有力氏族の長が持っていたと同等の宝物が捧げられていた。この祭りがヤマト王権にとって大変重要であったことがわかる。



この頃のムナカタにはヤマト地方に匹敵するような大きな古墳はなかったし、これほど豪華な出土品も見つかっていない。したがって、この祭りを主催していたのはヤマト王権であったというのが通説となってきた。その場合でももちろん、この島をわが庭としていた宗像海人族と彼らを率いる首長の参加もしくは協力がなければ、この祭りはできなかったであろう。そして祭りの対象はこの島の神、すなわち宗像神と考えられる。

岩上祭祀でも、5世紀はじめから半ばと考えられている21号遺跡になると、これまでの鉄器などの実用品のほかに、祭祀用に作った雛形品が見られるようになる。ここで注目されるのは、鉄鋌<sup>てつてい</sup>と呼ばれる鉄の薄板が加わったことである。この頃まだ日本では本格的な鉄の生産は始まっていなかった。したがって武器や農耕具に必要な鉄は、基本的に朝鮮半島の南東部、主に現在の釜山から慶州にかけての地方から輸入していた。鉄鋌はその素材の候補と考えられてきた。沖ノ島では、全体で約20枚が出土している。

## ②岩陰祭祀

5世紀後半から6世紀になると、祭祀は空中に張り出している巨岩の陰で行われるようになる（一部は7世紀に下る）。調査された遺跡は11箇所を上り、この頃最も頻繁に祭祀が行われていたらしい。この時期になると、捧げものに珍しい舶来品が目立つようになる。

目玉の一つは、切金の装飾のある純金の指輪である。この頃の日本では指輪をつける風習がなく、ほとんど出土例がない。朝鮮半島の墓からは多く出土するが、このような見事なものはあまり見あたらないという。朝鮮半島の最高級の工芸品が、ここにささげられたのである。

もうひとつの例は、カットガラスの碗（切子碗）の破片で、東アジアではきわめて珍しいものである。この種のガラス容器には二系統あるが、沖ノ島出土品は6世紀後半栄えたササン朝ペルシャ時代のイラン製のもので、シルクロード経由で中国から伝えられたものという[37]。7世紀半ばにイスラム化した後は作られないので、年代が限定される。

この時期に非常に多いのは、金銅製（銅器に金メッキを施したもの）の豪華な飾り馬用馬具である。

騎馬の習慣は、4世紀に朝鮮半島から伝わった。馬具ははじめ実用的で簡素な轡や鐙のみであったが、5世紀後半頃から諸豪族が馬を権力の象徴とする風習が広まり、重くて人が乗れないのではないかとと思われるほど多数の馬具で馬を飾り立てた。このような馬具はこの頃畿内を始め各地の古墳に副葬されているが、ここでは非常に精巧

な細工を施した優品を見ることができる。このなかには朝鮮半島製と考えられるものが多い。

以上前半の祭祀遺物は、当時盛行した古墳のうちでも比較的大型の前方後円墳に奉献されていた遺物によく似ている。そこでこの段階を「葬祭未分離」と呼び、第3段階以降の祭祀専用の奉献物が主体となる「葬祭分離」の時期と区別している。

### ③半岩陰・半露天祭祀

7世紀から8世紀前半になると、祭祀は岩陰から路地にはみ出してくる。これはより広い祭祀の場所が必要になったためと推測されている。祭祀跡は2箇所が調査されている。

この頃の出土品には、沖ノ島でも一二を争う珍品、一對の金銅製竜頭がある。これは全長約20 cm 重さ約1.7 kg という大きなもので、金メッキがかなりよく残った見事なものである。中国西域の敦厚のよく似た竜頭の絵によって、旗や貴人を覆う傘を吊り下げる金具であることがわかり中国製と考えられてきた。その後朝鮮半島でも同様の竜頭が見つかった [38]。

唐三彩の花瓶の破片も特筆に価する。唐三彩とは、中国の唐時代の限定された時期にのみ作られた、赤・緑・白の三色の美しい陶器である。これまで出土したほとんどすべてが、西安と洛陽にある墓の副葬品である。中国以外で唐三彩が出土することはまれで、わが国ではこれが初めての発見例であった。

この頃になると、祭祀専用で作られた雛形祭具が多くなる。金銅製の琴・人形・数々の紡織具など、金銅製または鉄製の刀などの武器や鈴などさまざまである。紡織具のなかには、精巧なミニチュアの機織機「金銅製高機」がある。これらは、伊勢神宮に伝えられてきた律令制下での儀式についての絵図など、古文書の記載とよく一致しているものが多い。しかし日本の国家祭祀の中心伊勢神宮にも、これだけのまとまった遺品は伝えられていない。依然としてヤマト王権が、沖ノ島祭祀を国家的行事と位置づけていたことがわかる。

特に琴は、神功皇后伝説にあるように、指導者が神託を受けるために神を呼び出す重要な役割を担っていた楽器である。また機織機や多数の紡織具は女神への祭祀を示していて、宗像神との関係を思わせる。

### ④露天祭祀

8世紀半ば以降、祭祀は巨岩群から離れた露天で行われるようになる。これ以前の祭場は一回しか使われなかったと考えられてきたが、この時期には同じ場所（1号遺跡）が繰り返し使われている。

遺物にはもはや舶来の貴重品は見られなくなり、他の祭祀遺跡とも共通する品々が

主になってくる。めばしいものとして、奈良三彩の小壺がある。奈良三彩は唐三彩を真似して日本で作られた陶器で、正倉院の御物にも多く、全国のいくつかの祭祀遺跡等から出土している。

このころ多い出土品は、石製（滑石製）の<sup>ひとがた</sup>人形、<sup>うまがた</sup>馬形、<sup>ふながた</sup>舟形などのささげものである。特に舟形が 100 点以上と多く、この地域の漁業または航海関係者がそれぞれ自分の思いを託してささげたと考えられる。国家祭祀から次第に地方氏族または個人中心の祭祀に移ってきていることがわかる。

### 3.3 沖ノ島祭祀の実像

---

#### 3.3.1 沖ノ島祭祀遺跡の特徴

上記調査報告は、沖ノ島祭祀の現在の神社祭祀と大きく異なる特徴を二つ挙げている。

第一は、はっきりとした四つの画期があることである。祭祀の内容や考え方が、画期ごとに大きく移り変わっていったことが出土物から読みとれるとする。

第二は、発見された 23 の祭祀遺跡のうち、最終段階の露天祭祀の 1～3 号遺跡を除く他の場所では、それぞれ一回の祭祀しか行われていないと考えられたことである。そして 14 号遺跡は 20 号遺跡の遺物が落ちてきたものと結論されているので、4 世紀後半から 8 世紀前半までの約 400 年間に、19 回の祭祀が行われたにすぎないことになる。

これは毎年少なくとも 1 回、あるいは複数回同じ場所で定期的に行われる神社の祭りとは大きく異なる点である。約 20 年に 1 回というのは、古代ではほぼ一世代に相当する。文字通り一世一代の祭が、沖ノ島で盛大に行われたのである。一世一代ということは、古墳の造成と同じ感覚である。実際、初期の祭祀遺物は、古墳に副葬または奉献された品々の組み合わせとよく似ていた。よく言われるように、ヤマト王権が主体となってこの祭が行われたという考え方をとると、大王が変わるたびに行われたのではないかと考えることもできる。この間隔は、伊勢神宮の遷宮の間隔とほぼ同じであることも注目される。

#### 3.3.2 沖ノ島祭祀の謎

**なぜ沖ノ島か：**いずれの陸地からも 50 km 以上離れたこの絶海の孤島に、なぜ祭祀遺跡としては他に類のない豪華な遺物が多量に残されていたのか。特に第一段階の岩上祭祀開始の理由が最大の謎と言えよう。朝鮮半島への海上ルートとしては、弥生時代あるいはそれ以前から開発されてきた壱岐-対馬を通る安全な「魏志倭人伝ルート」があるのに、なぜそれから外れた沖ノ島に豪華な品々がささげられたのか。沖ノ島から対馬までは最短 70 km あり、手こぎの一日の行程としては極限に近い。

『書紀』に「海北道中」を護るようというアマテラスの神勅があるが、その他の史料には、沖ノ島が渡海の要地であったことを示す記述は全くない。朝鮮半島との交渉の記録は第 10 代崇神天皇の時期に初めて現れるが、一般に航海の経路は書かれていない。

第 15 代応神天皇の母である神功皇后（実在とすれば 4 世紀後半の人物と考えられる）が「三韓征伐」で朝鮮半島に渡る際には、福岡市東区の香椎の宮殿から出発して糸島半島を経由し、最終的に対馬北端の鰐浦<sup>わにのうら</sup>から朝鮮半島に渡ったと記されている。5 世紀末の人物と推定される第 23 代顕宗天皇の時代にも、任那<sup>みまな</sup>への使が壱岐と対馬に立ち寄ったと記録されている。

このようなことから、多くの歴史家は沖ノ島を通る公式の海の道は存在しなかったと考えている。

でもそれでは、沖ノ島の祭祀跡をどうして説明するのか。最近韓国西海岸の竹幕洞<sup>ちくまくどう</sup>遺跡が、同様な航海路上の祭祀遺跡として注目されている[39]。沖ノ島ほど豪華な遺物は見られないが、沖ノ島露天祭祀と共通する遺物が多数発見されている。この遺跡は、韓国西海岸から山東半島への渡海ルートの途上にある要地である。

国内の他の航海路上の古代祭祀遺跡としては、瀬戸内海中央の大飛島<sup>おおびしま</sup>と伊勢湾出口の神島があるが、これらも航路上の要地にある。いずれからも、沖ノ島の露天祭祀の時期に、沖ノ島と同様の奈良三彩などの遺品が出ている。沖ノ島だけが、航路からはずれた祭祀専門の場所なのであろうか。

**祭祀目的の謎：**発掘のはじめの段階から、この遺跡が一地方豪族の祭祀跡とはとても思われず、また出土品の内容がいわゆる「畿内」の古墳出土品と似ていることなどから、ヤマト王権が主催した祭祀であるとされてきた。ヤマト王権は、この祭祀開始の頃までには日本を代表する政治権力に成長したと一般に考えられている。

そして祭祀の目的として、遣隋使や遣唐使に代表される王権の国際交流に当たって航海安全を祈願した祭祀ではないかとする見解が多い。これには 894 年の遣唐使の廃止と同時期に大規模祭祀が終焉を迎えることがその根拠の一つとなっている。

しかし上述のように、沖ノ島を通るルートの存在を示唆する記事は、史料に全く現れない。遣隋使や遣唐使の行路について最も早い記述は、『隋書倭国伝』が伝える裴世清<sup>はいせいせい</sup>の記録である。裴世清は、遣隋使の小野妹子に随伴して 608 年来日した。これには「魏志倭人伝ルート」が明記されている[40]。このルートは「北路」と呼ばれ、『書紀』にある第 3 回の遣唐使帰国の記事もこのルートを示すと理解されている。さらに 659 年の第 4 回遣唐使（以下派遣回数上田雄[41]による）からはこのルートも通られなくなり、702 年の第 7 回以降は当初から五島列島から東シナ海を横断して直接中国大陸を目指す、「南

路」がもっぱら用いられるようになった。「海北道中」とは、全く関係がなくなったのである。それにもかかわらず、沖ノ島祭祀は中断されることなく続けられた。

**古代ムナカタ史の空白の謎:**沖ノ島祭祀についても一つの大きい謎は、祭祀後半の段階が歴史時代に入るにもかかわらず、ムナカタがほとんど歴史に現れないことである。ムナカタが記紀に登場するのは、神の名としてだけである。朝鮮半島や大陸を含むその他の歴史書にも、全くムナカタは出てこない。

『書紀』には、古墳時代に当たると考えられる時期に、ヤマト王権と北部九州地方との間に起きたきわめて重要な事件が、幾度も出てくる。

いわゆる「神武東征」は別としても、景行天皇の九州遠征、すぐ続いてその子の日本武尊やまとたけるのみことの九州遠征、さらにその子の仲哀天皇と神功皇后の九州遠征と引き続く朝鮮半島遠征、さらに継体天皇治世時の大事件であった「磐井の乱」と続く。これらの記事の中で、ムナカタは全く触れられていない。

なかでも、神功皇后の北部九州からの半島出兵の際には、志賀の海人と住吉の神が出てくるのに、宗像の神または海人が出てこないのは、不思議である。

前記のように、国内外の文献に沖ノ島祭祀開始の頃に倭軍の半島派兵の記録があり、また特に岩陰祭祀の時期に新羅系の出土品が多いことなどから、半島出兵に当たっての戦勝祈願と戦利品の奉獻が沖ノ島祭祀の重要な動機と考える人も多い。上記遣唐使ルートの変更も、7世紀末の新羅の半島統一と、その後の新羅との関係冷却がその背景にあることが指摘されている。そして8世紀の国内記録にも、新羅とその海賊への敵視と、その調伏のため九州などの諸社への遣使がしばしば現れる。しかしそこには宗像社の名は見えない。「神功皇后伝説」に全く宗像神の貢献が見えないことも、宗像神が対半島の「軍神」として評価されていなかったことを裏付ける（ただしこのことは、沖ノ島への奉獻品の中に「戦利品」が入っている可能性を否定するものではない）。

**祭祀遺跡は祭祀場所か:**上記の調査報告中にあるように、23の祭祀遺跡全てが祭祀の行われた場所ではない。たとえば「御金蔵」と呼ばれる4号遺跡は、岩陰遺跡に数えられるが岩陰の高さは1m程度で、とうてい祭祀が行える空間ではなく、その通称からも奉獻品の収納場所と考えられる。また14号遺跡は、後に20号遺跡の奉獻品が流出したものとされ、独立した遺跡とは見なされていない。

これらを除いても、『続沖ノ島』[30]の鏡山猛調査団長による結びでは、I号巨岩上とその周囲の16-19号遺跡について、「(16・17号遺跡では)遺物の所在地は納置だけしか考えられない」とし、実際に祭祀が執行された場所として、(17号遺跡とはI号巨岩の

反対側にある) 19号遺跡は「誠に格好の態勢にある」上に「祭壇前には広場がある」ので、ここが16-19号の一連の遺跡の祭祀の場ではないかという推定を述べている(以上図5参照)。ただし同氏を書くように、草木繁茂する遺跡周辺では、広場が祭祀の場であったことを証明することは困難である。

特に17号遺跡は、祭祀遺物の載る場所はわずか約1.5m<sup>2</sup>ほどの面積で、そこに21枚の青銅鏡をはじめ豊富な遺物が積み重なっていた。上記の供献品から分かるように祭祀には多くの人々が参加したと考えられるが、とてもそれらの人々が参列できる場所ではない。従ってこの部分の執筆者(賀川光夫・原田大六)も、「17号遺跡は、祭祀終了後、その祭器をI号巨岩に供献した姿を積石遺跡として遺存したのではないかと考えられる」と述べている。

また調査員の一人弓場紀知も、21号遺跡以外の17号遺跡などの岩上祭祀遺跡はあまりにも狭くかつ不安定な場所が多く、全体として個々の祭祀遺跡を祭場と考えることは必ずしも適当ではないと考えている[42]。一方他の遺跡から離れたM号巨岩付近の22号遺跡(半岩蔭・半露天)では、明確な祭場の区画が示されていて、祭祀品の主体である金属製祭祀用具は、祭場の造出しというべき位置の石囲いの中に埋められていたことを報告している。

以上のように、1号以外の遺跡についても、1遺跡1祭祀の考えで祭祀の回数とその時期を推定することが難しい場合が多い。

**出土品の多さと類多性の謎:**前記調査報告書で出土品の内容を詳しく見ると、疑問がいろいろ湧いてくる。もっとも理解しにくいのは、同種の奉獻品の数の多さと雑多さである。

『続沖ノ島』で主執筆者の一人原田大六が指摘しているように、一回の祭祀に多種多様な奉獻品があるばかりではなく、品目によってはおびたしい数が捧げられていることである。原田はこれを「類多性」と呼んだ。

たとえば17号遺跡では、21面の青銅鏡が発見された。同じ時期の前期古墳には鏡の副葬が多く、20面以上を出土した例もかなりある。このため有力者を墳丘に葬ると同様の祭祀を行ったと考えられてきた。しかしそのような多数の鏡を出した古墳と比べると、内容はかなり異なる。たとえば『続沖ノ島』が挙げる京都府木津川市の<sup>つばい</sup>椿井大塚山古墳では、36面の鏡のうち鏡種の分かる32面すべてが三角縁神獸鏡であり、うち26面は品質が優れていたため<sup>はくさいきょう</sup>船載鏡(中国からの輸入鏡)と言われている。

これに対して17号遺跡では、最も多いのが<sup>ほうかくきくきょう</sup>方格規矩鏡の7面で、7種類もの鏡が見付かっている。しかも品質がまちまちである。原田は多くの視点から21面の鏡を5段階に分けて評価しているが、最高のAランクはわずか3点である。以下Bが3面、Cが4面、

Dが6面と続き、最低のEランクが5面もある。一体なにを表したのかわからないような文様の鏡が多く、すべて仿製鏡（中国鏡を真似した国産鏡）とされている。

このようなことは、畿内の古墳ではほとんど見られない。ヤマト王権が当初一手に祭祀を行ったのなら、なぜこんなにバラバラで、粗悪品が多いのか。国産鏡であっても、王権所管の工房で作られたのなら、このようなことはあり得ないであろう。

別の例では、7・8号遺跡の金銅製馬具類がある。対応する時期の中・後期古墳では、<sup>あぶみ</sup>鐙、<sup>くつわ</sup>轡、<sup>くら</sup>鞍、装飾の金具類などが、1頭分または2頭分セットで出るのが普通である。ムナカタでも、5世紀後半の勝浦井ノ浦前方後円墳でだいたい2セット分の馬具一式が、6世紀初頭の田久瓜ヶ坂4号墳でも1セットが出土している。これに対して、沖ノ島から出土した馬具は、特定の飾金具が偏って多数出土している。

特に多いのは、雲珠<sup>うず</sup>と呼ばれる馬のお尻の上に置く飾金具である。これが7号遺跡から実に58個、8号遺跡からも19個も発見されている。7号では轡が1個と鞍が2個、8号遺跡では鞍が1個しか出ていないので、雲珠があまりにも多すぎる。飾りにぶら下げる杏葉<sup>ぎょうよう</sup>も、7号遺跡から25枚も出ている。

またそれらの内容を見ると、様々な様式のもものが混在している。原田が指摘しているように、杏葉の一つは装飾古墳の王様と言われる福岡県桂川町の王塚古墳（6世紀後半）出土のものとそっくりで、この古墳の被葬者が生前沖ノ島に渡ったのではないか、という推理まで記している。

この指摘は、きわめて重要なことを示唆していると思われる。出土品の数の多さと内容の雑多さは、多くの人が沖ノ島の祭祀に参加し、それぞれ捧げものをした、と考えなければ説明が難しいのではないか。ヤマト王権または宗像氏単独での、あるいはその両者のみでの祭祀とは考えにくいのである。

沖ノ島の祭祀には、かなり早い段階から王権や宗像氏以外の多くの人が参加し奉獻もしていたのではないか。このことはウケイ神話の神々がムナカタとその周辺に祭られていることとも整合する。

以上のように、沖ノ島祭祀遺跡は従来の定説で十分説明できない多くの特徴をもつ。

### 3.3.3 古代祭祀の新しい見方

福岡県・宗像市・福津市の「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の世界遺産登録へ向けての活動の中で、長い間いわば「放置」されていた沖ノ島祭祀について各分野の専門家による研究が行われ、その研究報告がインターネット上で公開されている[43]。これら報告書に収められた33編の論文の内容には、これまでの定説に新しい光を投げかけるものも多い。



笹生衛[44]は、祭祀考古学の立場から出土品を再整理し、祭祀遺跡の再分類を行っている。その結論では、祭祀遺跡は以下のように再整理できる。

I 類：「岩上祭祀」の 16 号・17 号・18 号・19 号遺跡：実用の武器・工具・珠類が中心で多数の青銅鏡を持つ。（4 世紀後半）

II 類：II-1（21 号遺跡）実用武器・武具・工具に、鉄製模造品、石製模造品、子持勾玉を伴う。青銅鏡は減少するが、鉄製武器が増加し鉄素材の鉄鋌が加わる（5 世紀前半～中頃）。II-2（岩陰祭祀の 6・7・8・9・23 号遺跡）ではこれに金銅製の実用馬具や倭系太刀などが加わる（6 世紀代）。

III 類：岩陰祭祀の 4 号・6 号・20 号・22 号、半岩陰・半露天の 5 号遺跡、露天祭祀の 1・3 号遺跡：金属製・石製模造品と土器類が中心となり、品目が多様化する。（8・9 世紀代中心）

笹生 [45]は、初期祭祀が 5 世紀代に成立し西国から東国まで 20 カ所の祭祀遺跡が発見されていて、そこでは石製・土製・木製の祭祀用模造品と並んで鉄製の武具・農工具が奉獻されていて、21 号遺跡の出土品と共通点が多いことを指摘している。従って 21 号遺跡は、銅鏡や銅釦など前期古墳副葬品と共通する供献品を残しながら、全国的な祭祀形式確立の流れの中に位置づけられる。このような遺跡で最古のものが 5 世紀前半の浜松市の明ヶ島 5 号墳下層であり、21 号遺跡に先行するという。

5 世紀に始まるこのような祭祀様式が、やがて「律令祭祀」へと定格化して行く。伊勢神宮で確立する律令祭祀では、「A.祭祀の準備」「B.祭祀」「C.祭祀後の対応」の場所がそれぞれ分かれている。沖ノ島の 21 号遺跡を除く岩上祭祀と岩陰祭祀の多くは B ではなく、C の祭祀後の幣帛や神宝を納めた場所と考えられるという。これは前記鏡山らの実感を裏付ける。

このことは、これまで「遺跡」としてきた調査箇所が、複数回の祭祀に対応する可能性を示す。これまで各「遺跡」は古墳（埋葬が一回だけの場合）と同じように、そこから出土した遺物は同時に埋葬されたもので、そのなかで最も新しい遺物はその遺跡の時期を示すと考えられてきた。しかしこの後示すように、沖ノ島の各「遺跡」は、上記の 21 号遺跡のようにかなり時間幅の広い遺物が含まれている。これによって祭祀の年代観も大きく変わる可能性がある。

#### 3.3.4 沖ノ島出土青銅鏡の新知見

沖ノ島出土鏡は『宗像沖ノ島』とりまとめの時点で 51 面が記載されていたが、その刊行直前にコレクター所蔵品 10 面が発見され、これも沖ノ島出土と認定された[31]。さらにその後も関係者の努力により推定出土数が増加し、現在は 71 面がほぼ確定している

[46]。森下章司によるこれらの鏡の分類案[47]を、整理して表 2 に示した。

表 2 推定を含む沖ノ島出土鏡の遺跡と鏡種による分類（森下章司の分類[47]に基づく）

	遺跡番号 (ほぼ年代順)	鏡総数		漢鏡	三国鏡			三角縁神獣鏡		同型鏡		仿製鏡・倭鏡 (前期～中期はじめ)						その他仿製鏡・倭鏡								唐式鏡	鏡式不明
		学術調査出土数	推定を含む数		方格規矩四神鏡	方格T字鏡	夔鳳鏡 (八鳳鏡)	双頭龍文鏡 (位至三公鏡)	「舶載」	仿製	盤龍鏡	浮彫式獣帯鏡A*	方格規矩鏡	内行花文鏡	龍鏡	画像鏡	神像鏡	獣文鏡	獣形鏡 (変形獣帯鏡)	珠文鏡	神獣鏡	渦文鏡	変形文鏡	格子目文鏡	乳文鏡		
岩上祭祀	16号	4	4		1				1			1															1
	17号	21	21		1	1			3		6	3	2	2			2				1						
	18号	10	10	1		1		1	3				1			1										2	
	19号	2	2									1														1	
	21号	6	7							2			1										1		1	2	
岩陰祭祀	7号	3	3						1									1								1	
	8号	3	3						1		1									1							
	15号	1	1												1												
	23号	1	1															1									
露天祭祀	1号	1	1																							1	
御金蔵	4号	4	5															1						1		2	
伝沖ノ島			13				1	1	3			1						1	1	2	2			1			
合計		52	71	1	2	2	1	2	10	2	2	8	5	4	2	1	1	3	4	2	2	2	1	2	1	2	9

\*森下章司[47]の獣文縁宜子孫銘獣帯鏡

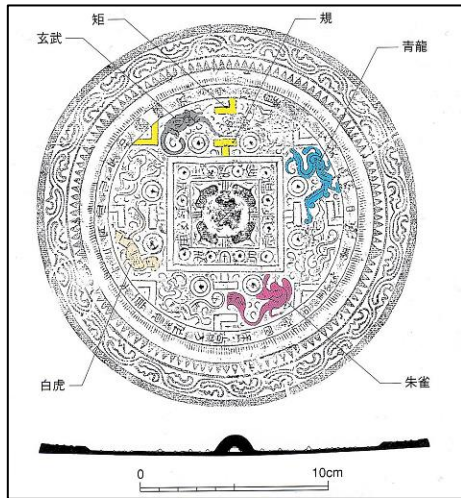
この表に挙げられている鏡種のうち、「同型鏡」は、最近の研究で 5 世紀後半に現れ 6 世紀まで出土が続くことが明らかになっていて[48]、これが 21 号遺跡から出土することは、この「遺跡」が 5 世紀後半以降も使用されたことを示している。沖ノ島出土鏡のうち主なものの国内出土状況を、表 3 に示す。前報の『鏡データ集成』[49][50]を再検討しその後の出土報告を補足した下垣仁志の新集成[51]を中心に集計した。前報では長期間にわたって作られた方格規矩鏡については検討から除外したが、新しい集成では表 2 の四神鏡と方格 T 字鏡が他の方格規矩鏡と区別して集成されている（注 14）。以下沖ノ島祭祀の開始に係わる重要な鏡種について検討する。

表3 沖ノ島出土鏡の全国出土状況

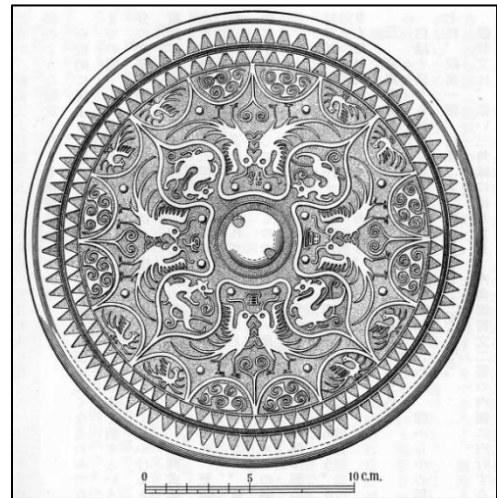
		方格規矩 四神鏡				方格T字 鏡				夔鳳鏡				双頭龍文 鏡				三角縁 神獸鏡				仿製 三角縁 神獸鏡				仿製 方格規 矩鏡＊				仿製 内行花 文鏡				鼉龍鏡				仿製画 像鏡			
		弥生時代	古墳前期	その他	合計	弥生時代	古墳前期	その他	合計	弥生時代	古墳前期	その他	合計	弥生時代	古墳前期	その他	合計	古墳前期	その他	合計	古墳前期	その他	合計	古墳前期	その他	合計	古墳前期	その他	合計	古墳前期	その他	合計	古墳前期	その他	合計						
東北	福島																			1		1																			
	茨城																																								
関東	栃木							1	1			1	1					1	1							2	2			1	1										
	群馬		1		1													8	1	9						4	7	11													
	埼玉							1	1															2	2	7	1	8													
	千葉							1	1									1	1	2					2	2															
	東京																	1		1						1		1		1											
	神奈川												1	1	1	1																2	2								
北陸	新潟							1	1															1	1	1		1		1											
	富山																							1	1																
	石川		2		2			1	1		1	1		1	2	2										1	1														
	福井			1	1										2	1	3									5	5	2		2											
甲信東海	山梨																3	3											2	1	3										
	長野											1	1				2	2	1		1																				
	岐阜	1			1		2		2			1	1				10	2	12				1		1	4	5	9	2		2			1	1						
	静岡							3	3								4	4	8				1	1	2																
	愛知						2		2								10		10	8		8	2	1	3	4	2	6	1	1	2										
	三重			1	1			1	1				1	1	4	6	10	2	2	4	1	3	4	4	7	11				3	3										
近畿	滋賀										1		1				12		12												1		1								
	京都		2	1	3								1		1	44	7	51	10		10	8	5	13	21	9	30	3	5	8											
	大阪	1	1		1	1	1		2			1	1		5	5	14	3	17	20	3	23	3	4	7	17	4	21		2	2										
	兵庫		2		2		2	1	3		2		2				47	1	48								4	5	9			1	1								
	奈良		7		7		2		2		1		1			1	79	11	90	2		2	10	4	14	35	7	42	2	2	4	1	1	2							
	和歌山																2		2																						
中国	鳥取	1		1	2							1	1				4	2	6				2		2	5	8	13													
	島根						1		1					1	1	4		4	1		1	3		3	2	1	3	1			1										
	岡山	1			1		2		2		1		1		1	1	16	9	25				1	6	7	3	17	20		2	2										
	広島	1			1												4		4							3	4	7	1		1										
	山口												1	1	5		5	4		4			1	1	1	3	4			2	2										
四国	徳島							1	1								3		3					1	1																
	香川		2		2									1	1	4	1	5																							
	愛媛			1	1		2		2								5		5											1		1									
	高知	2			2																																				
九州	福岡	59	2	1	62	1	4	7	12	3	4	3	10	3	4	6	13	24	5	29	17	1	18	1	12	13	2	12	14	1	3	4			3	3					
	佐賀	5	1	1	7		2	1	3		1	1	3	1	1	4	6							2	1	3	1	3	4		1	1									
	長崎							1	1			1	1													4	8	12													
	熊本						2	2	4				1	1				1	3	4				1		1				1		2									
	大分					1		2	3									1	1	2	7	2	9																		
	宮崎							1	1									1	1	2	1		1		5	5	4		4		1	1			2	2					
	鹿児島					1			1																	1		1													
全国計		71	20	7	98	4	21	25	50	3	13	9	26	6	7	22	35	325	61	386	67	6	73	36	50	86	128	111	239	20	27	48		1	7	8					

**漢鏡および三国鏡：**漢鏡および三国鏡（三国時代は220-280）とされている4種の鏡は、いずれも九州からその半数以上が出土している。このうち古墳時代前期までの出土が多い方格規矩四神鏡と夔鳳鏡の文様例を図6(a)・(b)に示す。沖ノ島出土の方格規矩四神鏡は、18号遺跡の再調査で発見された破片が、4号遺跡出土と伝えられる破片と接合されたもので欠損が大きいとため、図6(a)は類似する平原1号墓3号鏡の解説図[52]を参考に

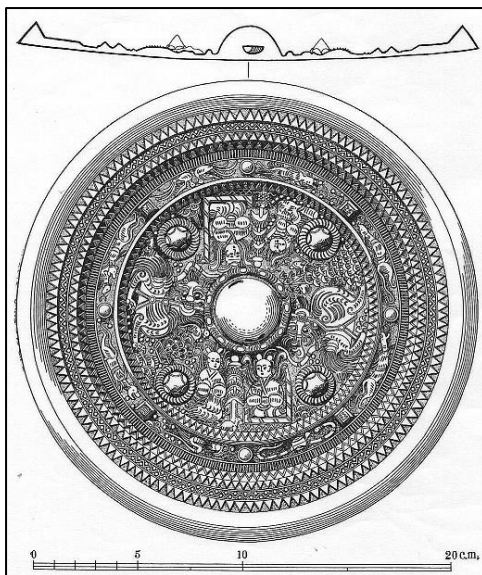
示した。方格規矩四神鏡は、大地を表す中央の方格と天を表す周りの円弧の間の関係を示すT・L・V字状の「規矩」を主文様とし、四方を護る神獣をT・L・Vの間に配したものである。沖ノ島鏡はこの図の鏡と類似した部分が多いが、細かく見るとより新しい部分も古い部分もあるので（注 15）、ほぼ同時期（1 世紀代）の鏡ではないか。



(a) 方格規矩四神鏡（平原 1 号墓出土 3 号鏡）  
（伊都国歴史博物館作製拓影・彩色[52]）



(b) 夔鳳鏡（八鳳鏡、沖ノ島 17 号遺跡出土）  
（原田大六[30]の実測図）



(c) 舶載三角縁神獣鏡（沖ノ島 18 号遺跡出土）  
（原田大六[30]の実測図）

図 6 沖ノ島出土鏡および類似鏡の文様例

図 6 (b) は、『続沖ノ島』に掲載された沖ノ島 17 号遺跡出土<sup>きほう</sup>夔鳳鏡の実測図である。この鏡は、この図を作成した原田大六は類例がないという理由で仿製鏡としていたが、その後同種の文様の舶載鏡（八鳳鏡）が複数発見されている。

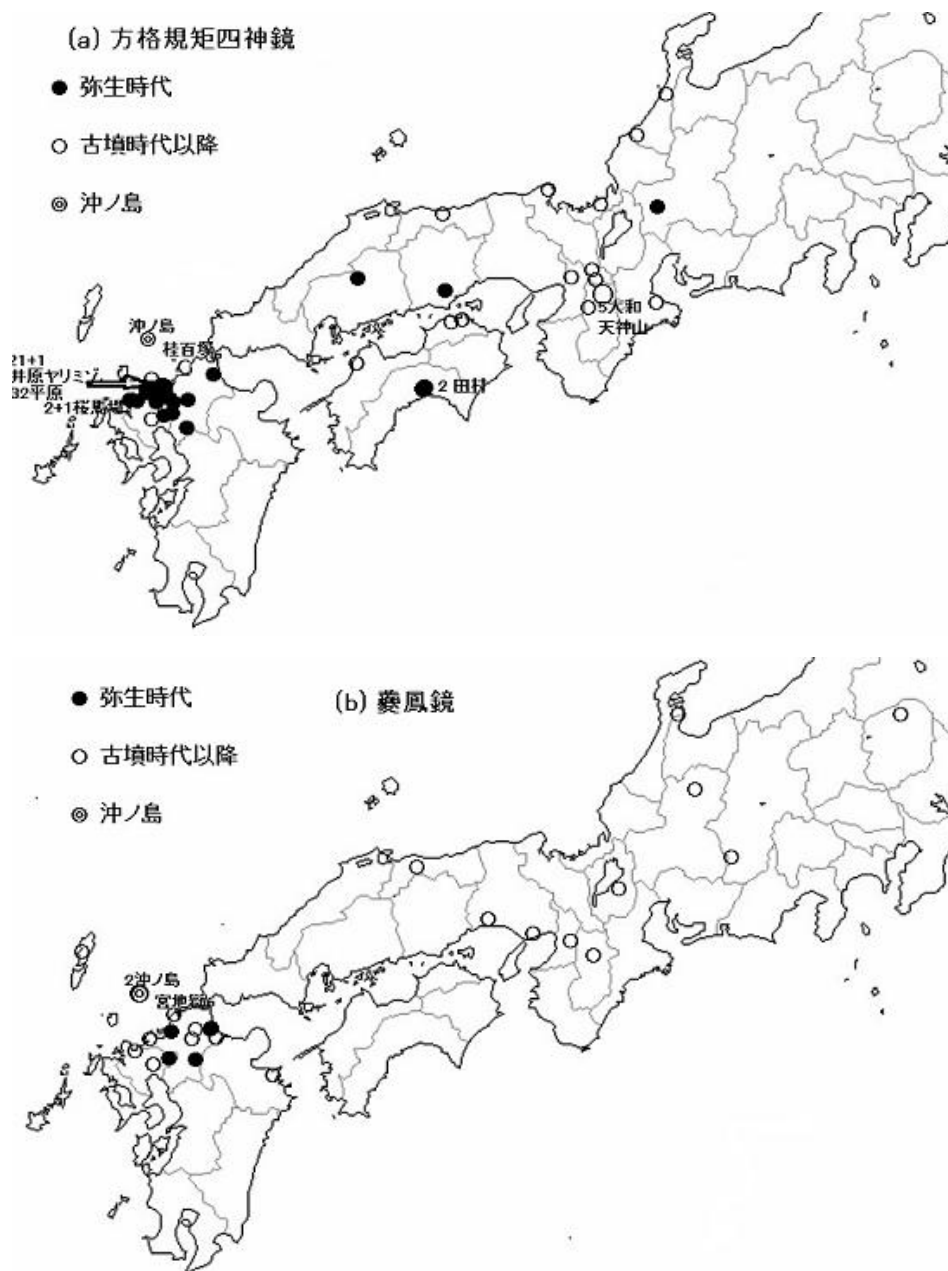


図7 沖ノ島出土中国鏡分布

この2種の鏡の出土状況を図7に示した。方格規矩四神鏡は、弥生時代後期から終末期に糸島市の井原ヤリミズ遺跡で21+1面、平原遺跡に32面と、王墓に多量に副葬される。そのほかに福岡県と佐賀県で計7面が弥生遺跡から出土している。前報で見たように、この時期になると中国鏡が福岡県の東部でも出土するようになる。注目されるのは、高知県の田村遺跡で2面出土していることである。この遺跡は弥生前期から朝鮮半島直輸入の遺物・遺構が出ることで知られていて、松菊里型住居や磨製石鏃など、ムナカタと共通する渡来系文化がいち早く伝わっている。その伝播には宗像海人族の関与が推定されるが、その繋がりがこの時期まで維持されていたと考えられる。広島県と岐阜県との山間部の弥生遺跡出土鏡は、日本海ルートで運ばれたと推定される。古墳時代に入る



と畿内を中心に西日本に拡散するが、沖ノ島への出発地神湊に近い桂百塚から出土していることが注目される。

夔鳳鏡の弥生時代の出土は、福岡県の3面（うち1面は東部の豊前市）と佐賀県の1面のみである。古墳時代に全国に拡散するが、対馬（北部の大將軍山古墳）―沖ノ島（2面）―（伝）宮地嶽附近と、ムナカタルート1に沿って出土するのが注目される。

**三角縁神獸鏡：**沖ノ島では12面の三角縁神獸鏡が出土しているが、上記森下の整理では「舶載鏡」は18号遺跡と伝沖ノ島の各1面のみである（注16）。三角縁神獸鏡については多くの研究があり、様式の変化とその製作時期について詳細な情報が得られる。辻田淳一郎[54]は古墳の編年と三角縁神獸鏡の様式との関係について検討し、古墳時代前期前半Ⅰ期が同氏の舶載三角縁神獸鏡Ⅰ・Ⅱ段階、Ⅱ期が同第Ⅲ段階に当たるとした。18号遺跡出土鏡は舶載Ⅱ段階である。また前期後半Ⅲ期が仿製三角縁神獸鏡Ⅰ～Ⅲ段階、Ⅳ期が同Ⅳ・Ⅴ段階に当たるとした。



図8 初期舶載三角縁神獸鏡が副葬された前期古墳の分布

図6(c)に沖ノ島18号遺跡出土の舶載三角縁神獸鏡の文様を、図8に辻田のリストに他文献を付け加えて舶載Ⅰ・Ⅱ段階の三角縁神獸鏡が出土した前期古墳の分布を示す。辻田はこの図の「舶載」三角縁神獸鏡Ⅰ・Ⅱ段階の製作時期を260年代と推定している。前方後円墳は3世紀後半に築造され始めるので、まさにこの時期と一致している。三角縁神獸鏡は、この頃には関西から九州北部に繋がる広いベルト地帯に出土している。こ

れは前出の瀬戸内交易路に当たり、その終点が博多湾沿岸になっている。三角縁神獸鏡の「配布」目的が何かをよく示す。この図で報告にアクセスできた古墳では例外なく主体部から朱が出土している。朱については後述するが、沖ノ島出土鏡のほとんどに朱が塗られていたこと[30]が思い合わされ興味深い。

最近鈴木勉は、同鏡の三次元計測などによる細密観察と組織的な復元実験研究によって、三角縁神獸鏡が全て国内製であることを、科学的・工学的に立証している[55]。そして鈴木は、三角縁神獸鏡は「移動型工人集団」によって需要地（古墳築造地）の近くで作られた可能性が強いと推定している。伝世が少ないのはこのためと考えられる。

上記 18 号遺跡の「舶載」三角縁神獸鏡については、山口県下松市の宮ノ州古墳（前期前半）から同範鏡（注 17）が出土している。この古墳からは、他に 2 面の「舶載」鏡（三角縁盤龍鏡、三角縁同向式神獸鏡）が出ているが、辻田[54]によるとこれらはいずれも三角縁神獸鏡の技術系譜上にあり、しかも同伴する三角縁神獸鏡に先行する「舶載Ⅰ段階」の鏡である（注 18）。上記鈴木の説によればこれら 3 面はいずれも同古墳の近くで製作されたという推定が成り立ち、18 号遺跡の「舶載」三角縁神獸鏡もそのとき製作された可能性がある。

仿製三角縁神獸鏡では、17 号遺跡出土の三神三獸鏡（重住 17-11、『続沖ノ島』の 18 号、辻田の仿製Ⅰ段階）が大阪府茨木市の紫金山古墳および京都市西京区の百々池古墳出土鏡と同範であることがかねてから指摘され[30]、その後大阪府羽曳野市の御旅山古墳からも出土した。紫金山と御旅山はいずれも前期前半、百々池は前期後半のはじめの築造とされ、3 者で築造時期に幅がある。これらの古墳の所在地はいずれも渡来人が多かったところで、特に母々池古墳は秦氏の本貫地の一つの中にある。渡来人ネットワークで製作させ分け合った鏡が、沖ノ島にも奉献されたという推定ができる。

### 3.3.5 石製品からわかる年代

石製品の研究の進展により、各種石製祭具の石材・形状・製作技術からその系譜を細かく追えることができるようになった。沖ノ島の各遺跡出土の代表的な 9 種の石製品について、篠原祐一[56]がそれぞれどのような時代に製作されたかを検討した結果を、図 9 に転載した。中でも注目されるのが、ここで示した全遺跡で発見されている白玉である。この小さい玉は、最もありふれた石製品であるためいわゆる「伝世」される可能性は小さく、しかも各時期の様式の変化がはっきりしているので、遺構に置かれた時期をほぼ特定できる。



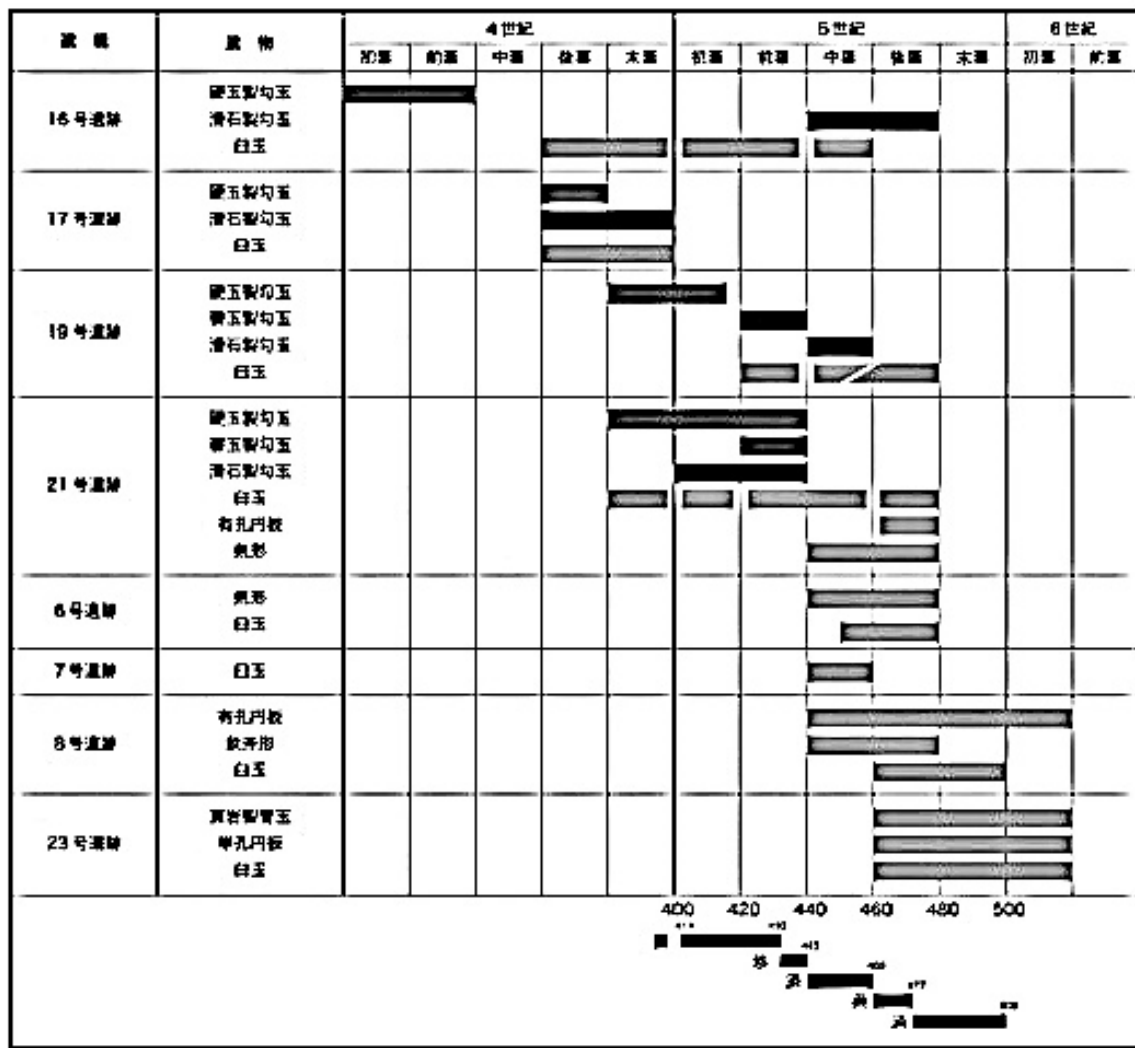


図9 沖ノ島出土石製品の製作時期（篠原祐一[56]より転載）

このため同図で、たとえば16号遺跡の遺品が、白玉だけでも少なくとも3回の祭祀に対応することがわかる。滑石製勾玉は、6世紀中葉の白玉と一部時期が重なるので、もう一つの独立した祭祀があった可能性は小さいであろう。一方硬玉製勾玉は4世紀前葉までに造られたもので、通説の沖ノ島祭祀開始以前となる。貴重品なので伝世していたという可能性はあるが、祭祀開始時期に疑問を投げかける出土品である。

このように主として白玉に注目して各遺跡（遺構）に何回の祭祀品が置かれたかを推定すると、この図で上から順に16号三回以上、17号1回以上、19号3回以上、21号4回以上、6号・7号・8号・23号各1回以上という結果になる。

これらの祭祀回数が独立かどうかについては、さらに検討を行う必要がある。それは、16から19号の遺跡（遺構）は、いずれもI号巨岩上もしくはその周辺にあって、一回の祭祀に用いられた品が複数の収納場所（遺構）に置かれた可能性があるからである。その可能性を考慮すると、16から19号の遺跡（遺構）での祭祀回数は最低3回という

ことになる。同様にB号巨岩周辺の7・8号遺跡（遺構）は、併せて一回のみの祭祀に対応する可能性がある。ただしこれでは約1世紀の範囲に亘る可能性を持つ8号遺跡（遺構）が一回の祭祀にしか対応しないことになり、これだけで決めるのには疑問符が付く。

したがってより多くの遺品について、併せて検討する必要がある。

### 3.3.6 遺物からわかる祭祀の年代とその回数

石製品以外にも、研究の進展によりピンポイント的に時期の特定ができるいくつかの考古遺物がある。表4にそのような遺物の年代を、上記石製品の検討結果と併せて示した。これら遺物の年代は、主に2012年の「九州前方後円墳研究会北九州大会『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』」[57]中の論文から採ったもので、蕨手刀子と铸造鉄斧は李東冠、振り環頭太刀と装飾太刀の金具類は齊藤大輔、馬具は諫早直人、胴丸式小札甲は松崎友理にそれぞれよる（各論文は須恵器編年に基づいて時期を示したものが多いが、これを図9と同じ時期表現に変換して表示した）。また青銅鏡については、前記各報告に上記研究会の辻田淳一郎の論文[58]を総合して示した。

表4 祭祀遺物から推定される沖ノ島祭祀の時期と回数

巨岩	従来分類	遺跡 (遺構)	出土 遺物	2世紀 以前	3世紀					4世紀					5世紀					6世紀					7世紀		8世紀		9世紀		最低祭 祀回数	各岩祭 祀回数
					初葉	前葉	中葉	後葉	末葉	初葉	前葉	中葉	後葉	末葉	初葉	前葉	中葉	後葉	末葉	初葉	前葉	中葉	後葉	末葉	前半	後半	前半	後半	前半	後半		
I +K +J	岩上 祭祀	16号遺跡	石製品 青銅鏡 農工具					硬玉製勾玉		▲	白玉等	●		●	●													3~4	5~7			
		17号遺跡	石製品 青銅鏡 農工具							▲	▲*	●	▲	▲		●														2~3		
		18号遺跡	石製品 青銅鏡	▲					石釧																					2		
		19号遺跡	石製品 青銅鏡 農工具									白玉等	●	●	●															3		
	岩陰 祭祀	23号遺跡	石製品 青銅鏡 武器												白玉等	●														3		
F	岩上 祭祀	21号遺跡	石製品 青銅鏡 武器 農工具							白玉	●	●	●	●													5~6	5~6				
C	岩陰 祭祀	6号遺跡	石製品											白玉 劍形	●													1	1			
	半露天・ 半岩陰	5号遺跡	土器 唐三彩																				●				1	1				
D	岩陰 祭祀	7号遺跡	石製品 青銅鏡 馬具 武器											白玉	●													4	4			
		8号遺跡	石製品 青銅鏡 馬具 武器 農工具												白玉等	●												3				
M	岩陰 祭祀	22号遺跡	土器																				●				1	1				
L	半露天・ 半岩陰	20号遺跡	土器																				●				1	1				
／	露天	1号遺跡	土器																								多数	多数				

■ 特定できる時期の幅 ● その中心時期(白玉の範囲は各々独立) ■ 可能性のある時期の範囲 ▲ 推定製作時期(▲\*は三角縁神獣鏡)

この表では、岩上・岩陰などのこれまでの分類にこだわらず、巨岩ごとに分類して示している（注 19）。これは各「遺跡」が必ずしも祭祀場所ではない可能性を考慮して、場所的に近い遺跡をまとめて示したものである。これら巨岩は互いにかなり離れており、各遺跡（遺構）とその周辺の祭祀遺物を他の巨岩上または附近に収納することは一般にはなく、それぞれが互いに独立した祭場に対応していると考えてよいであろう。これを見ると、同一「遺跡」内で他遺物とかなり異なる時代の遺物がいくつか見られる。

たとえば、16・17・19 号遺跡の蕨手刀子は、福岡市老司古墳（5 世紀初頭）出土品の系譜上にあり、同古墳出土の舶載品から変化したものと見られるという[59]。従って同古墳の時代以前ではあり得ない。16・19 号遺跡はかねてから他時代の祭祀遺物の混入が指摘されているが、17 号遺跡では石製品が 4 世紀代の年代を示しているのに、蕨手刀子だけが 5 世紀の遺物である。この 3 遺跡の蕨手刀子はいずれも同様の特徴を持つが、他に 5 世紀の祭祀遺物のない 17 号遺跡になぜこれが置かれたのだろうか。21 号遺跡の蕨手刀子はさらに時代の下がる形式と位置づけられていて、全体としてこの遺跡が 16－19 号遺跡より時代が下がる傾向と一致している。

ところが 5 世紀後半以降に現れる同型鏡や振り環頭太刀は 7 号岩陰遺跡と共通しており、「岩上祭祀」が「岩陰祭祀」と同時期まで行われていたことを示している。

また 7 号と 8 号遺跡では石製品が 5 世紀中葉からの時代を示しているのに、馬具は 6 世紀後半の年代を示しており、かなり長期間にわたる祭祀遺物が集積されていたことがわかる。従ってこれらの遺跡（遺構）はそれぞれが一つの祭場ではあり得ず、ある程度の幅を持った時期の祭祀の奉獻品の収納場所であったことがより確かになったと言える。前記篠原論文は、これら B 号巨岩周辺の遺跡（遺構）に対応する祭場は、6 号・7 号遺跡（遺構）の前にある小広場と推測する。21 号岩上遺跡の祭場も、同時期にまで並行して使用されたと考えられる。

青銅鏡からの祭祀時期推定は難しい。16-19 号遺跡や伝沖ノ島の「舶載」鏡は、殆どがこれまでの沖ノ島祭祀遺跡の推定年代よりかなり早い時期に作られたものとされてきた。奉獻時期不確定として▲で示した鏡について説明する。最も古い時期の鏡は 18 号遺跡の方格規矩四神鏡であり、これが 1 世紀代の鏡と考えられることを先に述べた。しかしこれについては、柳田康雄が 5 世紀の踏返し鏡（原鏡に押し当てて鋳型を作った鏡）の可能性を指摘している[60]ので、年代決定に用いるには疑問符が付く。また 17・18 号遺跡の夔鳳鏡（八鳳鏡）は、車崎正彦[61]が三国時代の呉の鏡と推定しているので、3 世紀後半となる。

方格 T 字鏡は、舶載・仿製鏡の議論が片づいておらず、出土時期の範囲が広いので時期は特定せず、範囲のみで表記している。

前述のように、18号遺跡の「舶載」三角縁神獣鏡は、辻田編年[54]のⅡ段階で、3世紀末頃という推定になる。これは他の三角縁神獣鏡に比べ特に製作年代が古い。17号遺跡の三角縁神獣鏡3面はすべて仿製鏡で5段階のうちⅠ段階・Ⅳ段階・Ⅴ段階が各1面とされており、18号遺跡の7面は舶載Ⅱ段階が1面、仿製鏡Ⅱ段階とⅢ段階が各1面とⅣ段階が2面で、いずれも時期の範囲がかなり広い。これはおそらく複数回の祭祀に対応していると思われる。表4ではこれを推定絶対年代で示している。特に18号遺跡に対応する祭祀の開始は3世紀末から4世紀初頭に遡る可能性が強く、中国鏡についても同様に考えることができるならばさらに早い開始時期の可能性もある。仿製Ⅳ段階の鏡は、16・17号遺跡からも出土している。

その他の倭鏡は、現在の段階では精度のよい製作時期の推定が困難であるようなので、これからも祭祀回数についての情報は得られない。

21号遺跡からは、古墳時代中期後半以降に現れる「同型鏡」が2枚出土していて、他の岩上遺跡より大幅に降る時期まで使用されたことを示す。ここからは4世紀末葉から4世代にわたる白玉も出土しているので、この「遺跡」が長期間にわたって繰り返し利用されたことがかなり確からしい。

### 3.3.7 祭祀回数と歴代天皇

表4からは後半以降の祭祀回数も推定できる。ただしこれ以外にも遺物調査が十分行われていない遺跡（遺構）もあり、同一巨岩上またはその周辺の遺跡（遺構）でも収納位置が異なれば別の機会の祭祀であった可能性があるので、この回数は最低の数であって、これよりは回数が多かった可能性がある。

時期別に見ると、4世紀（中葉以降）には3ないし4回（Ⅰ岩2～3回、Ⅱ岩1回）、5世紀8～9回（Ⅰ岩2～3回、Ⅱ岩3回、Ⅲ岩1回、Ⅳ岩2回）、6世紀4～5回（Ⅰ岩1～2回、Ⅱ岩1回、Ⅳ岩2回）、7世紀後半3回（Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ岩各1回）となる。もちろん8世紀以降は1号遺跡（遺構）などで多数回の祭祀が想定される。

この祭祀回数が実際に近いとすると、これは多くの時代でほぼ天皇の代数に相当する期間が多いことが指摘できる。あるいは沖ノ島祭祀も、出雲国造による「出雲国造神賀祠」奏上と同様、天皇の継承儀礼の一つとして継続されたのではないか。このことを以下検討してみよう。

4世紀代の天皇ははっきりしないし、これまで述べたように祭祀開始が現在の通説より遡るとすると対応関係の推定は困難である。あるいは皇統が確立していない時代の可能性もあるので、ここでは検討を行わないことにする。

5世紀は宋書の「倭の五王」の時代である。421年から478年にかけて倭国の5代の

王が計 7 回の遣使を行ったことが記録されている。16 代仁徳から 21 代雄略までのうちの 5 人がそれに当たるとというのが、現在有力な説である。これにより 5 世紀の天皇は、仁徳から 25 代武烈までの 10 代としてよいであろうが、暴虐の限りを尽くし男子を遺さなかったという武烈が、沖ノ島祭祀のようなしきたりを守ったとは思えない。この天皇を除くとほぼ祭祀の推定回数 8～9 回と対応する。図 9 に対比して示されているように、石製祭具の時期と各代とがかなりよく対応する。

6 世紀は 26 代継体から 33 代推古までの 8 代であるが、祭祀回数はこれよりかなり少ない。特に 6 世紀初めに空白があるように見える。継体は、507 年即位してからしばらくヤマトに入れなかったとされ、継承儀礼が実施されなかったと考えれば、この間の空白が理解できる。その後加耶救援のため南朝鮮に大軍を送ろうとし、筑紫君磐井に阻まれていわゆる「磐井の乱」が起こるが、この時期には次章で推定するムナカタからの軍馬の航送がすでに実施されていたと考えられ、沖ノ島祭祀の重要性が再びクローズアップされたと見られる。これが 7・8 号遺跡の豪華な馬具等の奉獻品に対応するであろう。継体に続く安閑・宣化は実際の即位が疑われているし、中葉の仏教公伝以降は崇仏派の天皇が多かったため神祭祀の頻度が少なくなったのであろう。特に用命 2 年 (587) 蘇我物部戦争で物部本宗氏が滅び、物部氏とともに仏教を排斥してきた祭祀担当氏族の中臣氏本宗氏も失脚したので、神祭りはしばらく中断したのではないか。それに先立ち物部守屋が仏像の棄却を行った頃一時的に神道が優勢になったことが、6 世紀後葉の祭祀に対応していると見られる。

7 世紀は前半に祭祀の空白期が見られるが、これは仏教を信奉した聖徳太子を摂政とした推古朝にほぼ対応し、しばらく神祭りが中断していたのではないか。後半の「大化の改新」(645) 以降は中臣氏の復権で国家的な神祭りが復活する。このことが、金銅製竜頭や五弦琴など貴重品を伴う 5 号遺跡の祭祀に対応していると見られる。宗像がこのころ「神郡」になったこととも対応する。

以上のように沖ノ島祭祀の各回は、5 世紀以降に限れば原則としてほぼ天皇の各代に対応すると見られるので、祭祀が即位後の継承儀礼の一つとして続けられてきたと見ることも可能であろう。途中いくつかある空白期間は、それぞれ朝廷の事情によるとして説明できそうである。

しかし単なる定例的祭祀では、先に見た膨大な量の祭祀遺物、特に 5 世紀後半から 7 世紀代の豪華な品々は、説明できそうもない。それには他の歴史的イベントがあるはずである。以下にそれを探ろう。

## 4. 総合考察

### 4.1 古代ムナカタの浮き沈み

#### 4.1.1 ムナカタ古代史の不連続性

ムナカタの古代遺跡には顕著な不連続性がある。弥生時代前期前半に田久松ヶ浦遺跡等に国内最先端の先進文化が現れてから、しばらく間をおいて中期前半に1区画墓では全国一の15本の武器形青銅器を出した田熊石畑遺跡が出現する。しかしここには、古墳時代後期になって25棟の堀立柱建物群が作られるまで、ほとんど遺物が見られない。

ムナカタ全体で見ても、弥生時代中期後半以降古墳時代に到るまで顕著な遺跡はほとんど見られない。4世紀には中・小型の前方後円墳数基が釣川中流域に築かれるが、5世紀に入ると100m級の前方後円墳2基を含む80基以上（現存60基）の古墳群が津屋崎地区に連続して築かれる。この中に、世界遺産に登録された新原奴山古墳群が含まれる。この流れは7世紀古墳時代終末期まで続き、巨大石室を持つ宮地嶽古墳に繋がる。巨石で築かれた横穴式石室の長さ23.1mは、橿原市の五条野丸山（見瀬丸山）古墳の石室の28.4mに次ぐ大王級の長さである。

以上のような不連続性は、古代史料中のムナカタの記述にも見ることができる。

ウケイでの三女神出生神話以降しばらく宗像神の活躍場面は見られないが、突然応神紀の41年に「阿知使主らが4人の<sup>ぬいめ</sup>工女をつれて筑紫についたところ、胸形大神が工女を所望したのでそのうちの<sup>えひめ</sup>兄媛を大神に奉ってあとの3人をつれて帰った。ところが応神天皇は直前に亡くなっていた」という記事が出る。これは5世紀はじめ頃のことと考えられ、この頃まで宗像神は朝廷に対して強い発言力を有していたようである。

ところが応神の2代後の履中天皇の5年には、筑紫の三神（宗像神とされる）が宮中に現れて「なぜ我が民を奪うのか。後悔することがあるであろう。」と脅かしたが、宮廷では祈っただけで祭りを行わなかった（「<sup>いの</sup>禱りて<sup>まつ</sup>祠らず」）。古語辞典によると、イノリは神の名を呼んで幸福を求めることで、マツリは物を差し上げることが原義という。沖ノ島祭祀は、まさにマツリの原点である。このようなマツリを、天皇が当然継続的に行わなければならない、とそれまで観念されていたことが分かる。それを天皇が怠ったことは、応神朝と履中朝との間に宗像神の立場の変化があり、王権にとって沖ノ島祭祀の重要度が低下していたことを示している。

そのあとまたしばらく時間を置いて、5世紀末ころの人物と考えられている雄略天皇の9年2月に、変な記事が載る。天皇が、<sup>おおしこうちのあたいかたぶ</sup>凡河内直香賜と<sup>うねめ</sup>采女（宮中で仕える女官）を派遣して胸方神を祭らせたが、香賜は神域で祭りの前にその采女を犯した。天皇がこれを聞いて香賜を殺させた、というものである。そしてこの記事に続く同年3月に、天

皇が新羅に親征しようとして、神に「な征<sup>いま</sup>しそ」と止められたという記述がある。この神も、前後の文脈から宗像神ではないかと考えられている。その後代わりに重臣を派遣したところ、彼らが皆戦死等で亡くなったという。朝鮮半島との関わりのなかで、宗像神がまた重要視されるようになったことを示す。このムナカタの復権は、上述の 5 世紀後半以降の古墳の急増と対応している。その陰には何らかの要因があったと思われる。

#### 4.1.2 海水準変動によるムナカタの地位の変化

気候変動が歴史に及ぼす影響は大きい。日本列島に朝鮮半島から多くの人々が渡来してきて弥生時代が始まったのも、世界的な寒冷化が引き金になったと考えられている。近年も甲元真之が、弥生時代の数次の気候寒冷化が穀物栽培に多大な影響を与え、社会変化を引き起こしたことを指摘している[62]。しかし地層や遺物の痕跡の解析だけでは、その時期の正確な特定は難しい。

人類史に影響を与えてきたこのような最終氷期以降の気候変動を、最近かなり正確に知ることができるようになった。湖沼の堆積物には、生命活動の季節変化により 1 年ごとの縞（年縞<sup>ねんこう</sup>）ができる。この数を数えれば樹木の年輪と同じように経過年数を正確に知ることができ、堆積物の経年変化を知ることによって環境変動をも知ることができる。四季の明確な日本では、年縞がはっきり刻まれる。

環境考古学を提唱してきた安田嘉憲[63]は、流入する河川のない福井県水月湖に注目し、ボーリングを行って 7 万年分の年縞試料を採取した。これを解析した結果が、過去の時間を計る標準時計として 2012 年に世界で認知された[64][65]。

ただしムナカタとその周辺の地域の歴史は、気候変動それ自体よりも、それによって引き起こされる海水準変動の影響をより強く受ける。図 10 にムナカタとその周辺の地域の色別標高図を示す。一般に古代遺跡は標高 5 m 以下には見られないとされるが、これを見ると遠賀川流域などでは標高 5 m 以下の地形は狭く不自然な形をしていて、歴史時代以降の改変を強く受けているようである。標高 10 m の地域は縄文時代の貝塚分布[66]をよく説明するので、以下では潮汐等の海面変動を含めた海進期の最高海面高さを、現在の標高 10 m のわずかに下と想定することにする。これはボーリングなどで推定されたムナカタの縄文時代の地勢図[67]の海岸線とも、ほぼ一致している。



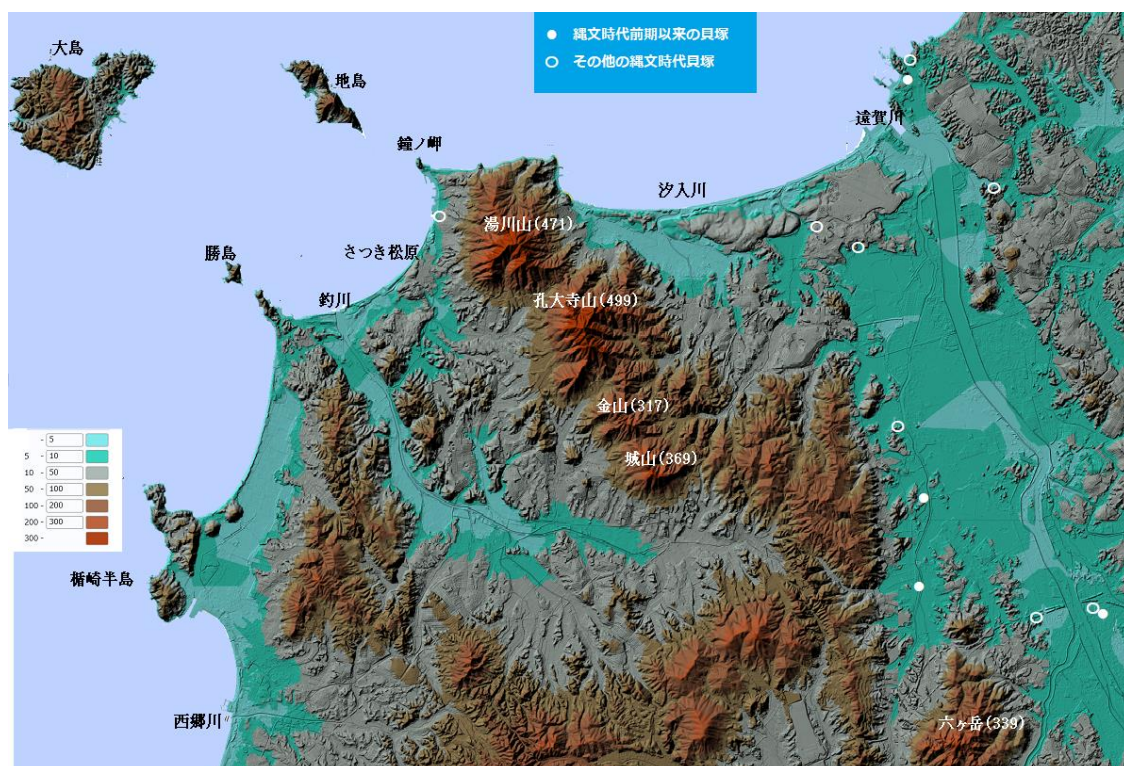


図 10 大ムナカタの色別等高図（国土地理院電子地図 Web により作成）

これに関連してムナカタの古代史に大きな影響を与えたもう一つの要因は、ムナカタ海域の海底地形である。図 11 に、海上保安庁の海図[68]により、鐘崎地区と地島周辺の水深を示した。鐘ノ岬と地島の間で水深 2 m 以上の水路はきわめて狭く、水深 5 m の海域は本土とつながってしまう。この水路は温暖期にはそれほど航海の妨げにはならなかったであろうが、寒冷期には航行が困難であったであろう。これは海に生きるムナカタ海人族にとって死活問題となる。

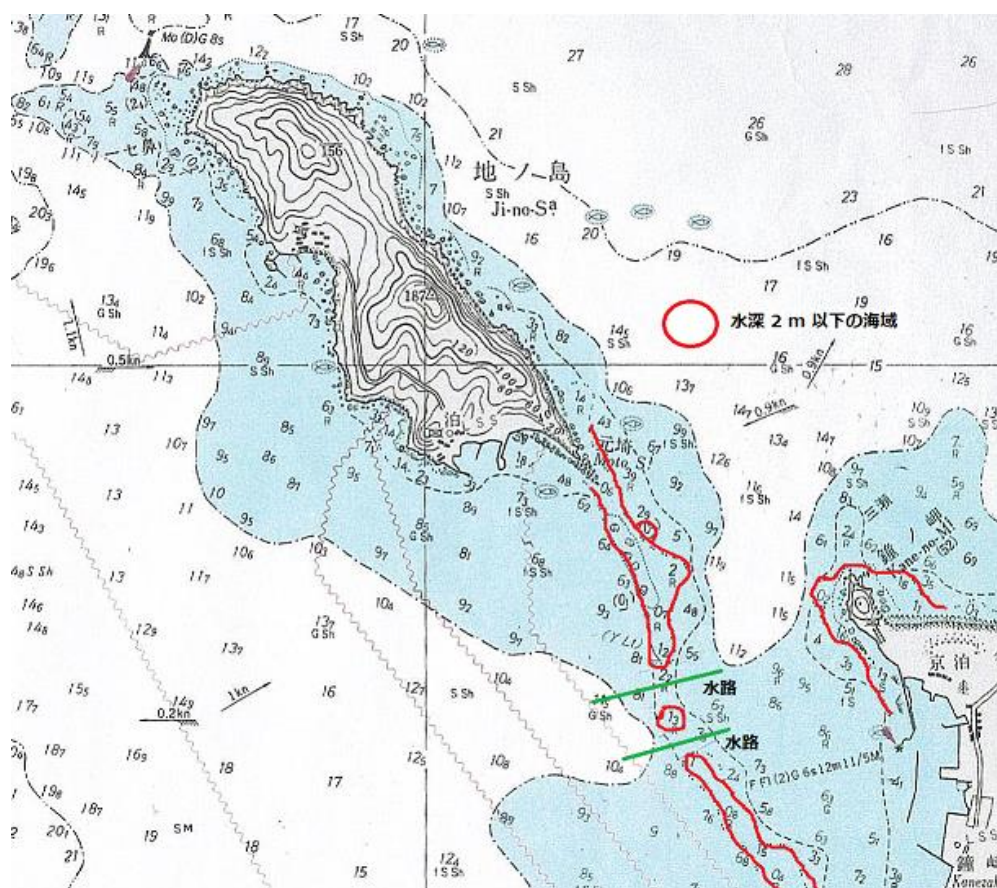


図 11 鐘崎一地島地区の海図（海上保安庁の海図[68]を加工）

安田らは、汽水湖沼の鳥取県の東郷池でも堆積物コアを採取して解析を行っている[69]。この池は、海水準が低い寒冷期には通常の淡水湖であるが、海水準が高くなると海水が流入する。一般に湖水低層では夏期に酸素が欠乏するため海水中の鉄が菱鉄鉱( $\text{Fe}_2\text{CO}_3$ )として沈殿するが、海水が流入すると珪藻に起因する硫黄と結合して黄鉄鉱( $\text{FeS}_2$ )として沈殿する。このため海水準の変化を堆積物中の鉄分の分析によって知ることができる。

表 5 の左欄に、弥生時代の開始から古代までの、東郷池湖底堆積物中の菱鉄鉱生成時期から求めた海退期を示す。これを右方に示すムナカタと北部九州のその他地域の遺跡や考古遺物の藍略とを対比させると、かなりよい相関を見ることができる。

表5 海進・海退とムナカタ・沖ノ島と関連地域の代表的遺跡・遺物・古墳  
(◎は前方後円墳、○は円墳：数字は大きさ(m))

世紀	海退期*	時代区分**		中国正史記録	代表的遺跡・遺物・古墳(時代は従來說で配置)***						備考
		従來說	暦博説		沖ノ島	福津市域	宗像市域	遠賀・鞍手郡	糸島一博多	豊前	
紀元前8世紀			↑ 早期 9-10 C								
7世紀		縄文時代晩期	弥生時代前期		石器 (鎌倉産黒曜石) 黒川式土器						
6世紀											
5世紀		弥生時代早期							板付(夜臼式)		
4世紀		弥生時代前期			弥生土器 継続して出土	今川 (板付I b式・環壕・青銅器・天河石)	田久松ヶ浦 (同上・磨製石器・配石墓) 東郷登り立 (板付I a式-板付I b式)	立屋敷(板付I b式→遠賀川式土器)	板付(板付I a式)		
3世紀			弥生時代中期			福岡香葉(土笛)	大井三倉(環壕) 光岡長尾(環壕・土笛)			吉武高木(青銅器)	
2世紀		弥生時代中期			細形銅矛 勒島式土器	宮司大ヒタイ(鉄器)	田熊石畑(青銅器) 久原(磨製石器) 朝町竹重(青銅器) 大島くどん(楽浪土器)	城ノ越 (城ノ越式土器)			
1世紀					丹塗磨研土器		富地原梅木B(鉄矛)	立岩堀田(前漢鏡) 岡垣町元松原他 (青銅器・同鏡型・鉄器)	三雲南小路(前漢鏡) 須玖岡本D地点(前漢鏡)		
紀元1世紀		弥生時代後期	弥生時代後期	57 倭奴国王に金印	朝鮮半島系土器			馬場山(後漢鏡) 汐井掛(後漢鏡)	井原鍵溝(後漢鏡) 平原王墓(後漢鏡)		
2世紀				107 倭王師升貢獻 147-188 倭国乱る一 卑弥呼を共立	近畿系土器 (後漢鏡)	今川(近畿系土器)	徳重高田(後漢鏡)	岩屋箱式石棺群 他原田等数力所 (後漢鏡・小銅鐸)		探銅所宮原(後漢鏡) 徳永川ノ上(後漢鏡)	原の辻＝三雲貿易
3世紀				239 卑弥呼貢獻 247 狗奴国と争う 卑弥呼死す 266 台与遣使	(三国鏡)				◎75那珂八幡(博多区) ◎81原口(筑紫野市)		卑弥呼 博多湾貿易
4世紀		古墳時代前期			(硬玉勾玉)		◎19徳重本村2 ◎31田久瓜ヶ坂1 ◎64東郷高塚 ◎60河東山崎	◎57島津丸山 ◎60磯辺1 ◎75豊前坊1 ◎72塩屋	◎78端山(糸島市) ◎103一貴山銚子塚(糸島市) ◎62錦崎(福岡市西区) ◎76老司(福岡市南区)	◎134石塚山 (菊田町)	
5世紀		古墳時代中期		421 讚貢献 425 珍貢献 443 済貢献 463 興に授爵 478 武遣使(以上宋書)	岩上祭祀	◎32奴山正園 ◎100勝浦豪ノ畑 ◎50新原奴山1 ◎70勝浦井浦	◎50田久貴船前1	◎85山の神(飯塚市)	◎85丸熊山(福岡市西区)	◎118御所山 (菊田町)	
6世紀		古墳時代後期		527 磐井の乱	岩陰祭祀	◎73生家大塚 ◎80天降天神社 ◎82須多田下ノ口 ◎102在自刺塚	一群集墳 約2000基 須恵窯群・浜宮貝塚 田熊石畑倉庫群 ◎62相原E-1	◎86王塚(桂川町)	◎64今宿大塚(福岡市西区) ◎75東光寺刺塚(福岡市博多区) 前方後円墳終了	◎90床屋塚(みやこ町)	吉岐に大型古墳
7世紀		古墳時代終末期		600・607 多利思比孤 608 裴清を倭に遣使 (以上隋書) 631 唐に遣使(旧唐書)	半岩陰・ 半露天祭祀	◎42船原(高級馬具) ◎35宮地嶽(長大石室・ 金銅製冠・頭椎大刀・高級馬具等)					
8世紀				(以下略)							
9世紀					露天祭祀						
	↓約1260										

\*福沢仁之他『名古屋大学加速度質量分析計業績報告書』9巻(1998), p5 に基づく

(鳥取県東郷池湖底堆積物中の菱鉄鉱生成時期から読みとる)

\*\*今村峯雄他編『弥生時代の実年代』学生社(2004)による

\*\*\*各世紀内の遺跡等の配置は必ずしも絶対年代に対応していない

縄文時代晩期の海退期が終わると、筑前西部にすぐ続いてムナカタに朝鮮半島の松菊里系文化が入り、中期前半の田熊石畑遺跡に見るような繁栄に到る。ところがその後紀元前後の海退期に入ると、顕著な遺構や遺物がほとんど見られなくなる。これは単なる

寒冷化の影響とは考えられない。それは隣接する遠賀・鞍手の両郡では、むしろこの間に青銅鏡など顕著な遺物を出す遺跡が現れるからである。このような傾向は、古墳時代の初めまで続く。

このようにムナカタと遠賀・鞍手郡域との間で顕著な遺跡が相互補完的に現れるのは、図 10・11 に示したこれら地域の水域を含む地形で説明できる。田熊石畑遺跡などの繁栄は、海進期に釣川流域の奥深くまでが海水が入り込み、この奥地の辺りが良港となっていたことによる。実際に、同遺跡には船着き場の跡が認められている。これが宗像市域中心部の繁栄にとって、生命線だったのである。海退期にはこの入海が無くなるばかりではなく、鐘ノ崎と地島間の海峡が通行困難になったと考えられるので、宗像市域の海岸はほとんど港としての機能を失っていたと思われる。ムナカタは単なる農村地帯に過ぎなくなっていたと考えられるが、平野が狭小なので富の蓄積は限られていた。一方遠賀・鞍手郡域は海退期にも十分水運が可能なので、ムナカタの海港機能も全て代替でき、しかも海退で広大な農地が作られたので、大いに繁栄したと考えられる。

このことは、遺跡の状況からも分かる。弥生時代後期に遠賀川河口に近い北九州市若松区の岩屋で石棺墓群から 4 面以上、また下流右岸の馬場山地区から土壌墓から 2 面の後漢鏡が出土している。鏡種は方格 T 字鏡と双頭龍文鏡で、いずれも沖ノ島出土鏡にある。時期も 2-3 世紀と考えられている [70]。第 4 報で紹介した宗像市の南の汐井掛大墳墓群もこの時期が中心の遺跡である。ここからも 4 面分の後漢鏡や素環頭大刀などの鉄器が出土している。そして古墳時代初頭になると、遠賀川河口近くの左岸（当時は島）にまずムナカタに見られない大型の方形墓が作られ、続いて島津丸山前方後円墳(57 m)が築かれる。さらに鐘崎の東方にある波津港を西風から護る波津城に磯辺 1・2 号墳が築かれる [71]。ムナカタ海人族は、この頃響灘沿岸（鐘崎より東の海域）を中心拠点としていたであろう。第 2 報で見たように、この地域がイチキシマ信仰の中心になっていたのは、このためと考えられる。表 5 で沖ノ島の遺物にムナカタのような空白期があまり見られないのは、海退期でも響灘沿岸との往来が可能であったためである。

5 世紀に入ると寒冷化が緩み、6 世紀には海進期を迎える。上記田熊石畑遺跡も 6 世紀に 700 年以上もの眠りから醒めて、25 棟もの倉庫群が現れる。これは、再びここまで船が入るようになったことを示している。これがムナカタの復権をもたらす。しかし表 5 に示す宗像市域だけで 2000 基を超す大古墳王国の出現は、港の復活だけでは説明が困難であろう。それには別の要因があったと思われる。



## 4.2 沖ノ島祭祀の始まり

### 4.2.1 「祭祀遺跡」の年代

前述のように、沖ノ島祭祀の露天祭祀を除く各遺跡には、様々な時期の奉獻物が混在していることがわかってきて、「1 遺跡 1 祭祀」という通説では説明が困難になっている。これらの大部分を占める狭小な「遺跡」は、後の定型祭祀で正殿・宝殿に当たる祭祀後に神宝・幣帛を収納した「遺構」というべき場所であり[44][56]、多くの人が参加する祭祀自体はその近くの比較的広い場所で 行われたと考える他はない。供獻品を収納した各遺構は当然ながら複数回使用されたはずで、こう考えれば各「遺跡」の供獻品が幅広い時期にまたがるということが説明できる。これまで各「遺跡」の年代は、古墳と同様全供獻品のうち最も新しい年代を示すもので推定していたが、遺構にこれより時代が遡る供獻品がある場合はそれらを含めて考えなければならない。

図9で見るように祭祀時期をかなり正確に推定可能な供獻品は滑石製白玉であるが、前出篠原[56]によると軟質石材を用いた葬祭具が現れたのは4世紀に入ってからで、定型化した白玉は4世紀後半の奈良県河合町の佐美田宝塚古墳からであるという。従ってこれはこの時期にヤマトで新しく開発された祭具が加わったことを示すだけで、全体の祭祀の始まりをこれから決めることはできない。

他の供獻品の中で、三角縁神獣鏡については製作時期をかなり絞ることができ、ほとんどが製作からまもなく埋納されたと考えられている。それは三角縁神獣鏡が複数面埋納されている古墳の場合、鏡の年代が相互に大きく異なることがないからである。たとえば福岡県荊田町の石塚山古墳では、出土した7面の三角縁神獣鏡は全て「舶載」で、辻田編年[54]でⅠ段階が3面とⅡ段階が4面となっている。辻田は、舶載三角縁神獣鏡Ⅰ・Ⅱ段階の製作時期を260年代と推定している。従って沖ノ島17号遺跡出土の舶載Ⅱ段階の三角縁神獣鏡は、3世紀末葉から遅くとも4世紀はじめまでに奉獻された可能性が強い。柳田康雄[60]もこのことを示唆している。

これは図9で硬玉製勾玉が4世紀初葉から前葉とされていることとほぼ対応する。さらに、17号遺跡で鉄剣・鉄刀が計12口以上出土している[30]ことと併せると、三種の神器が4世紀はじめまでに揃っていたことになる。三種の神器を木の枝に掛けて祭ることがヤマト王権祭祀の古い形態であることは、仲哀紀2年の岡<sup>おかの</sup>主<sup>あがたぬし</sup>の熊<sup>わ</sup>鰐<sup>に</sup>が仲哀天皇を周<sup>き</sup>芳<sup>ば</sup>の沙<sup>さ</sup>塵<sup>ぼ</sup>の浦（防府市佐波）に迎えに行ったときの叙述から分かる。ヤマト王権による祭祀は、4世紀はじめには始まっていたと思われる。

### 4.2.2 朝鮮半島との交易路の変遷とムナカタ

表5の最右欄に朝鮮半島との交易の中心の時期的変化を、白井克也[72]と久住猛雄

[73]らの提案に基づいて示した。朝鮮半島との交流は縄文時代以来継続しているが、「勒島貿易」と称するのは韓国慶尚南道の泗川市の小島勒島で日本の弥生土器が多量に出土し、弥生人がかなりの期間住んでいたことが分かったからである。出土物には鉄製品が多く鉄鍛冶遺構も見られるので、弥生人は当時日本で生産できなかった鉄の安定供給のため住みついたらしい。第3報で勒島式土器の日本での出土状況を示し、これが弥生時代の鉄器出土と一致する場所が多いことを示した。

その後このような交易の中心拠点は、壱岐の原の辻遺跡と糸島半島の三雲地域に移る。ここでは楽浪系土器（漢が平壤附近に設置した楽浪郡付近で主に出土する土器）が弥生時代後半大量に出土し、朝鮮半島人が住みついて交易に従事していたと考えられる。これは勒島の周辺地域ばかりではなく慶州市などでも鉄を生産するようになったため[74]、交易の中心をより需要地の近くに移したためであろう。魏志倭人伝に倭が「鉄を取る」と書かれた時代で、卑弥呼の在位期間がまさにこの時期に含まれる（表5）。もちろん三雲は伊都国の中心であり、伊都国は邪馬台国連合の重要国である。この「貿易」は、第4報で推定した邪馬台国連合への鉄の流入を意味する。ただし第4報で宇佐のあたりと推定した邪馬台国へは多量の鉄の輸送は難しい。小型の鉄器は、第4報で見たように、阿蘇から大野川経由で邪馬台国に供給されていたのではないか。これは国東半島から大分市にかけて分布の中心がある弥生時代後期の安国寺式土器が大野川上・中流域に多く出土し、破鏡もこの頃多く出土すること[75]や、その安国寺式土器が阿蘇の製鉄集落から出土している（第4報）ことから推定される。阿蘇の鉄の取り合いが、狗奴国との争いの原因であった可能性がある。

やがて楽浪系土器に変わって三韓土器（楽浪郡衰退期の韓国土器）が増加するが、その中心が三雲から福岡市の西新地区や博多区に移動する。この博多湾貿易時代になると博多遺跡群に鉄器生産が集中するとともに高度化し、鉄器はここから全国に流通するようになる。

以上のような大規模貿易活動の変遷に対して、ムナカタと沖ノ島でも貿易への関与が窺える遺物が出土している。舶載青銅器が出土した田熊石畑遺跡で勒島式土器も出土していて、かなり早い時期に勒島交易センターとのつながりがあったことを示す（以下前出の武末[32]による）。また沖ノ島からも勒島式土器が出土しているが、これらは弥生中期後半までのものという。そのほかにも勒島で出土したものと同様の弥生後期と考えられる甕も出ているので、沖ノ島には断続的に交易者が立ち寄っていたらしい。壱岐や糸島を経由する場合沖ノ島に立ち寄る理由がないので、上記勒島貿易や原の辻＝三雲貿易ルートが存在にも拘わらず、第2報で想定した沖ノ島－対馬経由で直接勒島と繋がるムナカタルート1が機能していた可能性が強い（図12、第2報の図14を改変して再掲）。

また表 5 に示すように大島からも紀元前 2 世紀代と見られる三韓系土器が出土している。この種の土器はムナカタ本土と沖ノ島には見られないので、壱岐から海路で直接大島に到るムナカタルート 2 が想定されよう。

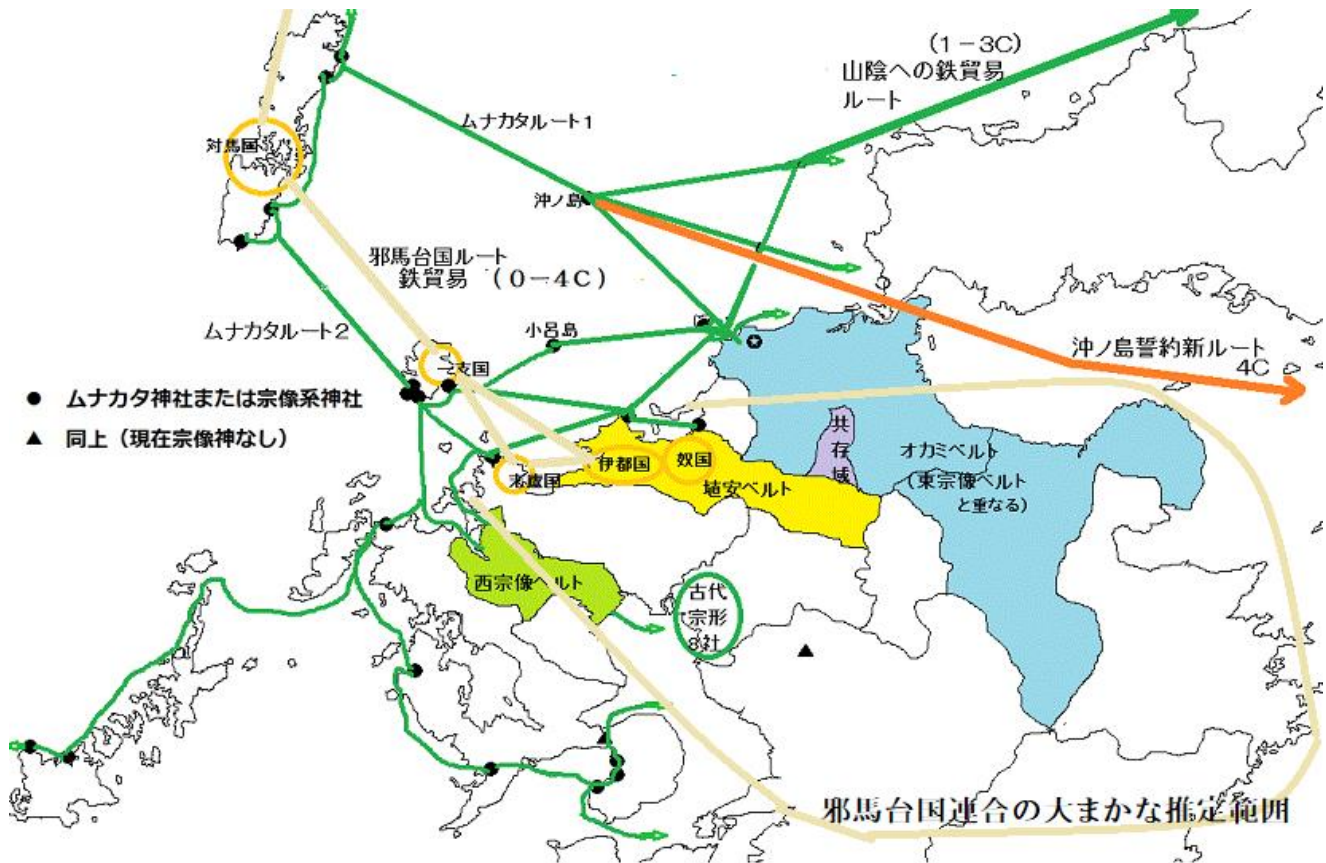


図 12 宗像系神社と海北ルート（第 2 報の図 14 を改変）

#### 4.2.3 鉄の道と玉

上記諸「貿易」における輸入商品は主として朝鮮半島からの鉄素材または鉄器と考えられる。第 3 報で述べたように、原の辻＝三雲貿易や博多湾貿易の盛行期でも、山陰には鉄が多量に流入していた。これは上記ムナカタルート 1 が引き続いて利用されていたと見られる。たとえば妻木晩田遺跡では、200 点以上の鉄製品の加工技術は初歩的なもので、博多湾岸地域に見られるような発達した加工技術を受けたものは全く見あたらないという[76]。鉄は山陰へは北部九州の加工基地を通さずに直接運ばれた可能性が高い。

この時期には、長野県北部や関東地方北部にまで鉄刀等が流通していた[77]（図 13、この図には小規模な鉄器出土地は含まれていない）。これはムナカタルート 1 に接続していた日本海ルートから、第 1 報で見たように大河の水運を利用して運ばれていたものと見られる。しかし大河と直接繋がっていない畿内には、鉄はほとんど入っていなかった。



鉄器が多量に流入していた丹後地方から、第1報で見たような由良川—加古川ルートなどでわずかにもたらされていたようである。

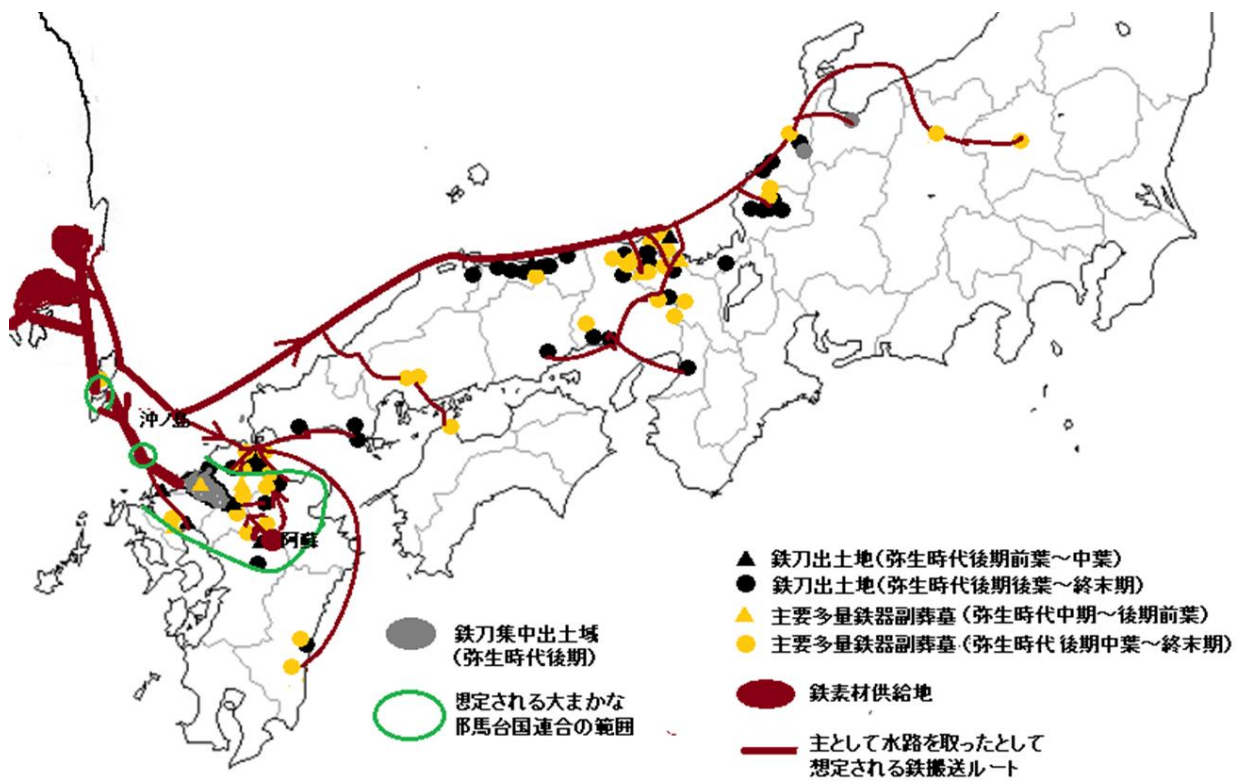


図13 原の辻—三雲貿易と出雲・ムナカタルート

鉄刀・鉄器副葬墓は野島[77]、半島鉄素材供給地は金[74]による  
鉄搬送ルートの推定は第1報等を参考

このような交易を継続するためには、日本側からの対価が必要である。その第1の候補は玉であろう。玉は弥生時代始め朝鮮半島から伝えられたが、すぐに国産化が始まりヒスイの産地の周辺の北陸や緑色凝灰岩（グリーンタフ）が多い山陰で玉作りが盛んになった（以下主として[78]による）。田熊石畑遺跡出土のヒスイ製勾玉と垂飾は北陸産と考えられ、200点を超す管玉は朝鮮半島製と北陸—北近畿製とがある[79]。この頃すでにムナカタは朝鮮半島と日本海航路を繋ぐ結節点になっていたのである。弥生後期に玉作りに鉄器が導入されると、ヒスイと同様に堅い碧玉製の管玉が主力となり、その大産地花仙山のある出雲に玉作りが集中した。原の辻＝三雲貿易時代になると、糸島市の<sup>うるう</sup>地頭給でも出雲の原石と技術を用いた輸出用の玉作りが始まる。

久住は山陰系の搬入土器が原の辻や加耶の東萊貝塚から出土することに注目し、「出雲の勢力ないし交易者は、他地域と比較して対外交易上の特別な通商権や、交易者の通行に関しての北部九州勢力からの保証があった」[73]と考えている。これはもちろん、交

易の主商品である玉とその加工技術の提供があつてのことであろう。

ところがここで情勢を大きく変える出来事が起きる。それはヤマト勢力が宇陀の豊富な水銀資源を獲得したことである。

#### 4.2.4 宇陀の朱

天理市の大和天神山古墳は、前期古墳が密集する奈良盆地東南部の柳本古墳群に属する古墳時代前期の中型前方後円墳で（全長 112 m）、崇神天皇陵（行燈山古墳、墳丘長 242 m）のすぐ隣にあり、この古墳の陪塚ではないかと考えられている。この古墳では木棺内に被葬者が見つからずその代わりに 41 kg の朱が置かれ、それを 20 面の鏡が護っていた[80]。棺外の 3 面と併せ合計 23 面の鏡のうち 17 面が後漢の方格規矩鏡や内行花文鏡などの舶載鏡で、この時期に多い三角縁神獣鏡は 1 面もなかった。

三角縁神獣鏡は、この頃「使い捨て」のような状態で多くの古墳に捧げられていた。このことをよく示すのは、大和天神山の西北 250 m にある黒塚前方後円墳（全長 130 m）である。この古墳は大和天神山古墳よりやや時代が遡るが、棺内の頭部に舶載の画文帯神獣鏡（直径 13.5 cm）が置かれ、棺外に直径 21.8–24.7 cm とほぼ同じ大きさの 33 面の三角縁の大型鏡（31 面が三角縁神獣鏡）が立てかけてあった[81]。小型の舶載鏡と大型の三角縁鏡との扱いにははっきりした差があり、小型でも舶載鏡が大型の三角縁神獣鏡より価値が高いと考えられていたことを示している。これと比較すると、径 200 mm を超す大型鏡 5 面を含む多数の舶載鏡が配されていた大和天神山の埋葬主体の朱は、きわめて重要な存在と考えられていたことが分かる。すなわちヤマトを支配した大王の権力の源が、朱にあると考えられていたのではないか。

推定 81 面もの鏡を副葬した桜井茶臼山古墳（全長約 200 m）では、石室の壁面や石材の全面と石室内から見えない土面にも朱が塗られ、朱の総量が 200 kg にも達すると試算されている。このように、発掘されている大和の前期古墳のほとんどで、大量の朱が発見されている。このような膨大な量の水銀朱は、どこから来たのだろうか。

桜井茶臼山古墳の場所は、伊勢や伊賀につながる初瀬街道が大和盆地から出てゆく地峡部の外山にある。古代のメインルートは初瀬街道より南の忍坂から大宇陀地方へ越える道だったらしいが、外山はこれらの道が合流する地点にある（図 14）。

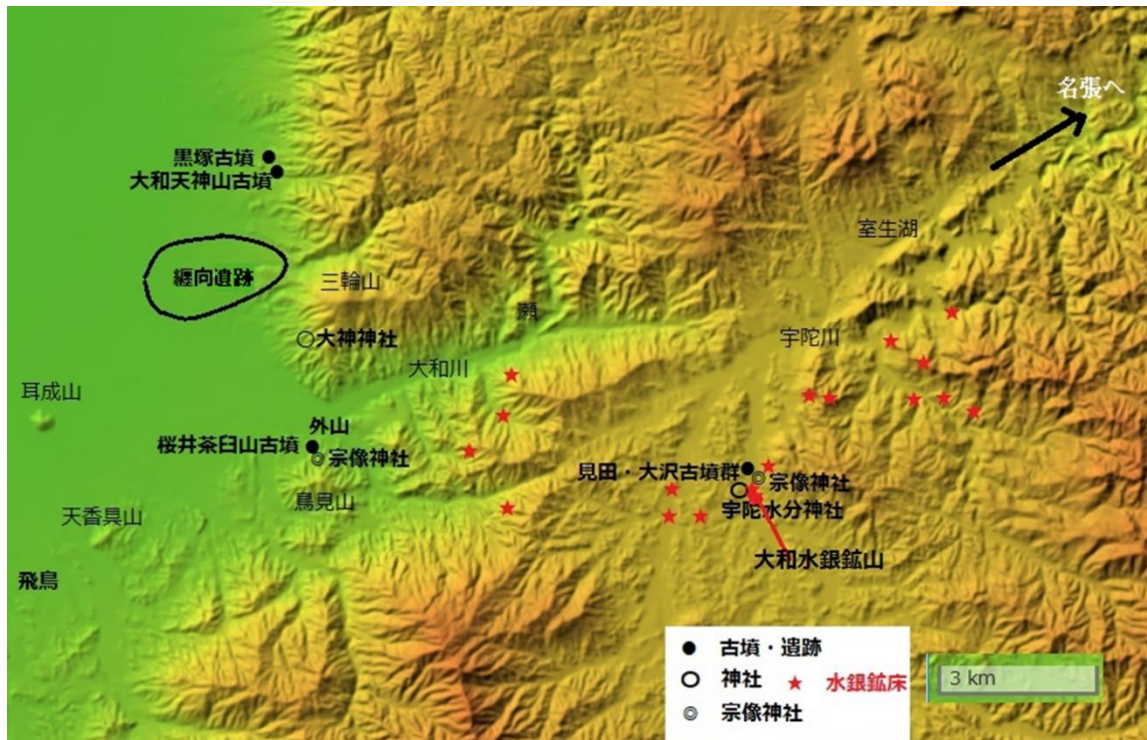


図 14 宇陀の水銀と奈良盆地（国土地理院電子地図 Web により作成）

図 14 に示したように、宇陀地方には古代から知られた多くの水銀鉱床とその跡がある[24]。そのなかでも大和水銀鉱山は最も古い歴史を持つ鉱山の一つで、戦後まで稼働が続けられた。これら水銀鉱床群の真ん中に、弥生時代終末期の見田・大沢古墳群がある[82]。この古墳群は弥生時代出雲を中心とする山陰に多い四方突出型方形墳丘墓と共通する構築技術が用いられていて、出土土器は宇陀川から木津川を下った伊賀地方に近い特徴を持つという。この古墳群の被葬者は、出雲に通じる日本海航路とつながっていたのではないかとと思われる。宇陀の中でも水銀鉱床の集中する<sup>うたの</sup>菟田野と大宇陀では、神社庁に登録されている 63 社のうち 17 社が出雲神を祭ることも、これと整合する。



写真 2 宇陀市菟田野大澤の宗像神社

その古墳群から 400 m の位置に、宗像神社がある（写真 2）。同古墳群に葬られた豪族との関係が考えられる。その東南 600m に崇神天皇直祭と伝えられる式内大社の宇太水分神社があるが、その境内摂社にも立派な宗像神社がある。宇陀水分神社は、もともと丹の女神丹生津姫を祭っていたと考える人が多い。松田寿男[83]は、水銀朱の鉱床が枯渇して忘れられると丹生津姫を祭っていた神社の祭神が水神に置き換えられることを、多くの例で紹介している。佐賀県嬉野市には 7 社もの丹生神社（現在はタンジョウと読まれる）がありかつての辰砂主産地と考えられるが、丹生都比女を祭るのは 2 社だけで、他の 5 社は水神の罔象女（ミズハノメ）を祭る。

朱を求めていた出雲族の人々は、先述の紀ノ川流域と同様、宇陀で朱を探し当てたことに感謝し宗像神を祭ったのではないか。上記宇太水分神社の境内にも、大国主命とその子事代主命が祭られている。

以上のことから、当初水銀朱は大和盆地にではなく、水路で出雲系の需要地に運ばれたのではないかと考えられる。宇陀地方は、大和盆地とは異なり木津川水系に属している。宇陀盆地の小河川は集まって宇陀川となり、東流して三重県名張市で名張川と合流し、さらに北流して木津川と合流する。名張市では、31 社の神社に 49 柱の出雲神が祭られるという異常な集中が見られる。名張が出雲族の集住地となったのは、おそらく水銀朱の集積地としてではないか。三重県南部も、「伊勢水銀」として縄文時代に始まる有名な辰砂の産地である。名張は、宇陀と伊勢の水銀のいずれにもアプローチできる場所であった。

#### 4.2.5 朱の産地から分かるヤマト勢力の急成長

南武志ら[84]-[87]は、辰砂（HgS）の成分のイオウの同位体比が産地によって異なることに着目し、中国を含む各地の水銀鉱山の辰砂、および弥生時代から古墳時代にかけての各地の墳墓の施朱等に用いられた水銀朱について質量分析装置で同位体比を測定し、両者を比較した。その結果、弥生時代後半から終末までの福岡県から出雲西部のほとんどの墳墓の朱の同位体比を持つ辰砂は国内の鉱床ではなく、中国陝西省の鉱山のものに近いことが分かった。前述のように九州にも多くの水銀鉱床があったが、この時期には資源が枯渇していたと考えられる。ただし吉野ヶ里遺跡出土の試料は国内諸鉱山の辰砂の同位体比の範囲内にあり、上記嬉野市にあったと考えられる水銀鉱床を利用していた可能性がある。一方出雲東部や山陽では日本の古代からの主な水銀鉱山（徳島県水井鉱山・奈良県大和水銀鉱山・三重県丹生鉱山）のいずれかに同位体比が近く、当初中国から輸入された朱を用いていたのが国内産に切り替わっていったと考えられると報告している。これはこの時期に出雲族が宇陀の辰砂鉱床を発見したと考えれば説明できる。



古墳時代前期以降は、前記大和天神山古墳を含め全国の古墳のほとんどが国内産に切り替わっている。唯一の例外は糸島市の一貴山銚子塚古墳で、これには中国産と思われる朱が用いられていた。これは前述の原の辻＝三雲貿易の中心地にあるので、中国朱の輸入ルートが存続していたためであろうか。

前述のようにこの時期は、大和盆地の古墳に朱が大量に使用されている。「神武東征」説話のなかの宇陀侵攻に表象されるような事件により、奈良盆地側の勢力が宇陀の辰砂資源の支配に成功したものと思われる。そして朱を渴望する西日本の有力者達に供給することにより、政治的に優位に立つようになったと思われる。

さらに大和盆地の勢力（以下ヤマト勢力）は、九州やその勢力圏の豪族が青銅鏡を愛好ししかも中国の混乱で入手が困難になったことを知り、三角縁神獣鏡などの優れた国産鏡の製作に成功した。図8に見たように、これらの鏡を朱とともに各地の有力者に贈与することにより、鉄輸入ルートの確立に従わせることができたと考えられる。

伊都国の平原王墓の鏡で見ると、弥生時代終末期には中国や楽浪郡の政治的混乱を逃れた鏡工人が渡来していたと考えられる。鏡作を冠する神社が、全国で奈良県磯城郡だけに5社も集中している。このうち3社は延喜式内社であり、なかでも式内大社の鏡作坐天照御魂神社は、先述の太陽信仰の古社で、ホアカリを祭る物部系の神社である。鏡工人を招致したのは、物部族であったと思われる。平原墓以降九州では良質の鏡を生産した痕跡がないことから見て、この鏡工人またはその後継者が、九州出身の物部族によってヤマトに招聘されたのではないか。

三角縁神獣鏡などには中国語や中国の紀年が刻まれていることも多く、渡来工人またはその子孫でなければ製作できなかったと考えられる。ヤマトには、巨大銅鐸に見るように、鑄造技術とともに青銅のリサイクル資源が十分あった。鏡工人の移動はこれもあったであろう。三角縁神獣鏡などが時代とともに技術が劣化しいわゆる「仿製鏡」となっていくのも、倭人には技術の継承が難しかったためであろう。

#### 4.2.6 ヤマト主導の沖ノ島祭祀の動機

ヤマト勢力が開いた沖ノ島経由で瀬戸内海を通る広域通商路には、ルート上の各地の関係者の関与が必須である。出雲勢力からヤマト勢力への覇権交代を関係者に認知させるためには、多くの関係者を集めて周知させ、誓約させる必要がある。それがこのルートの焦点である沖ノ島における祭祀の開始の意味ではないか。ウケイ神話における宗像神の高い位置づけは、このルート運用における宗像海人族の寄与の大きさを示唆する。

「海北道中」は、鉄の道だったのである。

博多湾交易は4世紀半ばに急激に衰退し、これに関わるネットワークも解体するとい

う[73]。これはヤマト王権が交易路を掌握したためと考えられている。しかしこの時期に博多湾勢力が急劇に衰退した理由については、説得力のある説明が与えられていない。博多湾勢力は、ヤマト勢力が3世紀後半から北部九州の有力者へ三角縁神獣鏡などの贈与を続けたにもかかわらず（図8）、4世紀半ばまで覇権を譲らなかったのである。

これを説明できるのは、ヤマト勢力が交易路だけではなく、朝鮮半島における交易の権益を手中にしたというシナリオである。ヤマト勢力は、朱と三角縁神獣鏡の配布で出雲勢力を孤立させ、ムナカタルート1を経由する鉄を、開拓した瀬戸内ルートに載せることに成功したのであろう（図15）。そしてやがて出雲が朝鮮半島に保有していた権益をも奪ったのではないか。出雲の従属は、ウケイ神話からも、神話や記紀の断片的な記述からも明瞭に伝わる。

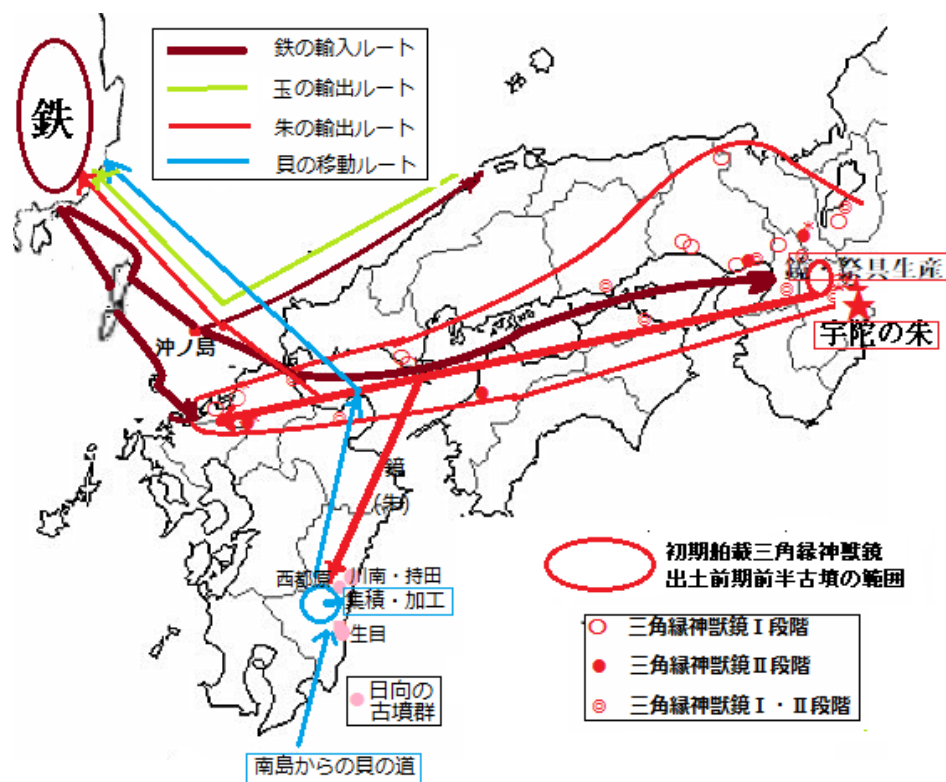


図15 鉄・鏡・朱・祭具・貝の道と博多湾貿易の衰退

#### 4.2.7 鉄の対価となる新しい資源

出雲勢力を従えたヤマト勢力は、鉄の対価として玉を持つことになり、博多湾中心の勢力より交易上有利になる。4世紀になると、金官加耶地域では、九州産の広形銅矛などがなくなり、古墳副葬品に巴形銅器や祭祀用石製品など近畿地方の産物が多くなる[88]。さらに南島の貝も、これに加わったと見られる。

4世紀の金官加耶の古墳から、南島産のイモガイの貝符が出土する[89]。3世紀末か

ら4世紀はじめ頃南九州東岸の各地に、一斉に前方後円墳が造られ始め[90]、調査されている限りではこれらには鏡の副葬もあり、朱も施されている。この贈与の目的は、南島の貝の入手にあったと見られる（図15）。木下尚子は南島産の貝について、大和人が消費者・発注者であり、運搬者である九州人・奄美人との間に長期に亘った遠距離交易があったと総括している[91]。それがこの時期に特に盛んになったのは、やはり鉄輸入の対価としてのニーズによるものであろう。その後も5世紀中葉以降の新羅の古墳から、南島産のイモガイを装飾に用いた馬具が多く出土する[92]。沖ノ島では9号遺跡からイモガイを用いた辻金物雲珠が出ている[29]。同じく南島で産する夜光貝も、貝匙として新羅や大加耶で珍重された[93]。

以上の交換物資の他に、これまでほとんど言及されていないが、重要な日本の産物がある。それは上記の辰砂である。

朝鮮半島では水銀の産出は知られていないので、施朱の習慣は発達しなかった。従って朝鮮半島との交易の当初は、辰砂の商品価値は国内に限られていた。しかしその価値を国際的に高める技術が朝鮮半島に導入された。それは水銀アマルガム法による金メッキ技術である。

朝鮮半島、特に新羅地方は古くから金資源で知られていた。神功皇后説話にも「まかがや眼炎こがねく金・しろがね銀・うるわしきいろさわ彩色多に其の国に在り」（仲哀紀）とし渡海の動機となっている。新羅古墳出土の金冠や垂飾などの装飾品、沖ノ島に伝来した金の指輪などもこのことを裏付ける。しかし金資源には限りがある。5世紀からは飾り馬具などに金銅製品、すなわち金メッキした銅製品が多くなる。

これら金銅製品は、水銀アマルガム法で金メッキされたと考えられている。金箔の貼り付けという技法もあるが[94]、それはアマルガム法より後出の技術で、複雑な形状の製品には適用困難である。アマルガムメッキ技術は中国からの導入と考えられ、水銀も当初は中国産が用いられたであろう。中国では、スキタイ文化の影響を受け戦国時代に金メッキが始められていた[95]。新羅も楽浪郡経由で金メッキを知ったであろうが、中国の主な辰砂産地は遠方にあり、入手が困難であったと思われる。

朴天秀[96]によると、5世紀に入ると日本への文物の移入がそれまでの金官加耶から新羅主体となる。このころ新羅は、日本に豊富な朱資源があることを知ったであろう。5世紀には新羅を中心に金銅製品が急増し日本にも流入するが、これはヤマトからの辰砂供給が盛んになったためであろう。5世紀代の大和の古墳から多量に出土する鉄鋌は、沖ノ島21号遺跡と同様、新羅産と見られている。

ここでヤマト勢力は自らの勢力基盤内に、朝鮮半島の鉄と直接交換できる商品を見出したのである。玉や貝製品、あるいは塩などの、他地域の産物に依存する必要がなくな



った。資源の面で絶対的な優位に立ち始めたのである。豊富な鉄を得て、武力でも他地方に優位に立つことになった。これが「ヤマト王権」の確立につながった。

#### 4.2.8 沖ノ島祭祀開始と覇権交代

前述のように沖ノ島祭祀の開始が遅くとも4世紀はじめに遡る可能性が強く、遅くともこの頃には鉄のヤマトへの直接の流入が始まった。ヤマトの古墳に多量の鉄器が副葬されるようになり、これと軌を一にしてこれまで豊富な鉄を持っていた妻木晩田や青谷上寺地などの山陰の遺跡が衰退する。これまで山陰に流入していた沖ノ島経由の鉄が、瀬戸内方面に向きを変えられたのである。

しかししばらくは博多湾勢力の朝鮮半島での権益は強力であり、ヤマト勢力は出雲勢力が確保していたマイナーな権益を引き継いだに過ぎなかったであろう。このため瀬戸内への一貫ルート確立後もしばらくは、博多湾勢力との軋轢の心配のない沖ノ島経由の海北道中が利用されていたと思われる。この時点では渡海に欠かせない宗像海人族の存在価値が高く、これがウケイ神話での高い評価に繋がったのであろう。

しかしヤマト勢力は、鉄の対価として出雲の玉をまず手中に収め、さらに石製・青銅製祭具などを開発して次第に交易のヘゲモニーを窺うようになったと見られる。それにさらに上記の南島の貝や辰砂も加わって鉄の対価の点では圧倒的に有利になったと見られる（図15）。権益の元を断たれては、博多湾貿易の継続は困難になる。

博多湾勢力が衰えた後は、必ずしも沖ノ島を経由せずとも、より安全な壱岐経由のルートをも占有できる。そうすると沖ノ島、ひいては宗像海人族の重要度は低下する。これが『書紀』の記述に見える祭祀の怠りに繋がったと思われる。

### 4.3 古墳時代後半のムナカタ大爆発

#### 4.3.1 宗像市域の2千基の古墳

表5に示したように、ムナカタには古墳時代後半になると前半とは全く隔絶した規模の多くの古墳が出現し、他地域では大型古墳がほとんど見られなくなる7世紀中頃まで続く。そのうち津屋崎地区に展開した大型古墳群は、その一部新原奴山古墳群が世界遺産になったことでよく知られるようになったが、それが天武紀（下）に高市皇子の岳父として現れる胸形君徳善に繋がる出雲系の一族の奥津城であることは定説となっている。この一族の起源については、第3報で考察した。

ここでは宗像市域に突然展開した多くの古墳群について、それがどのような政治的・経済的基盤に基づくかを検討しよう。宗像市域には、2014年の時点で前方後円墳22基を含む2139基の古墳が確認されている[97]。そのうち約2000基は、古墳時代の後半か

ら終末期に釣川流域の丘陵上に群集墳として築かれる。その状況を、『宗像市遺跡等分布地図』[98]に基づき図 16 に示した。遺跡名は一般にその土地の小字が用いられていて、また調査時期により細分化されているので、全体の傾向が掴みにくい。この図では諸遺跡を地勢によりグループ化して図示した。グループ名はその中の代表的遺跡名または大字地名で代表させた。単独遺跡については原則として 10 基以上の古墳を含む遺跡を示した。

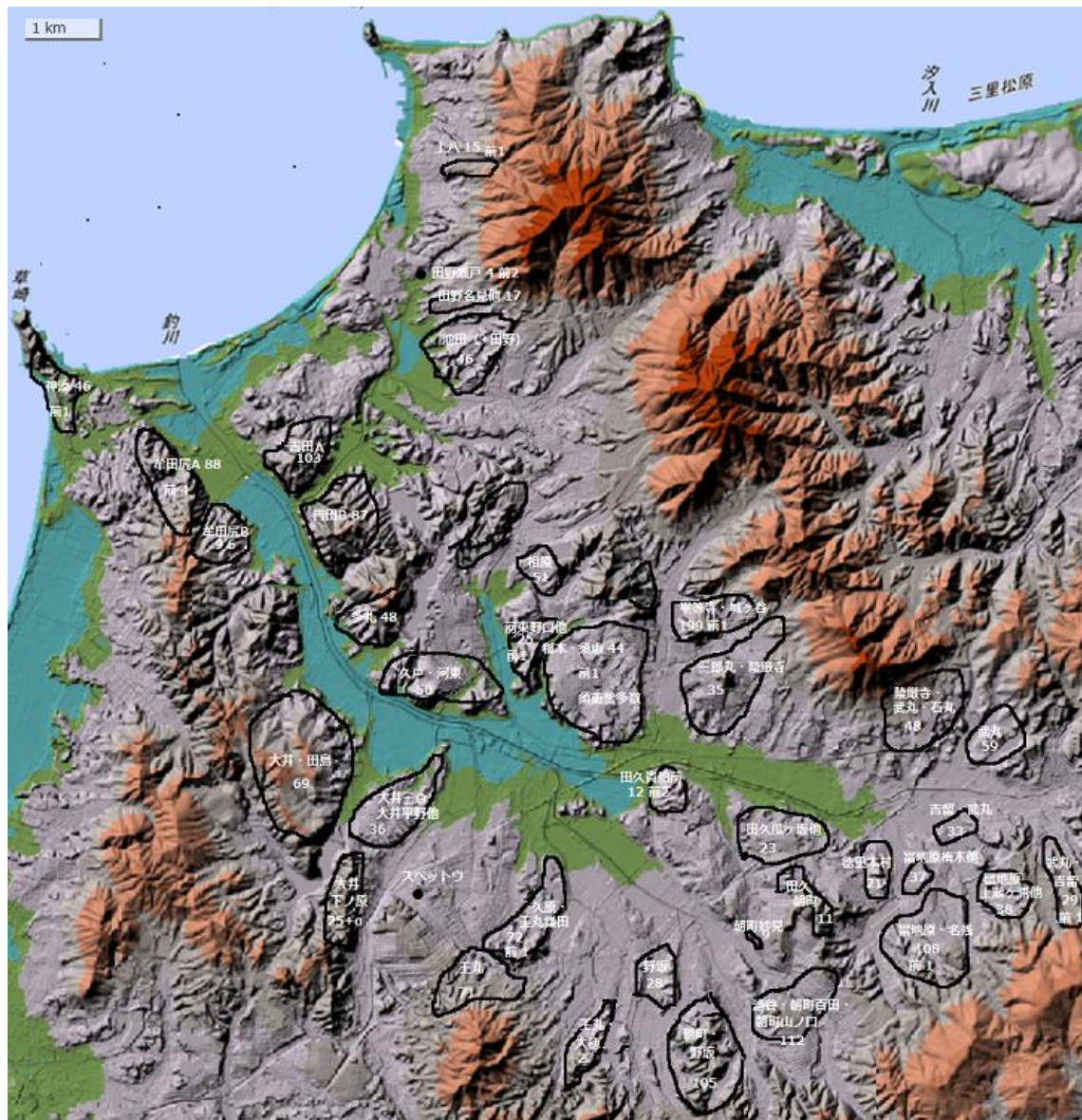


図 16 宗像市域の群集墳（数字は各グループに含まれる古墳の数、「前」は前方後円墳）  
（国土地理院電子地図 Web を用いて作成）

表6 推定築造時期が示されている宗像市内の古墳群と主な遺物（図16に対応）

グループ名	遺跡名	遺跡中古墳数	遺跡の推定時期				備考・主な出土品
			4世紀	5世紀	6世紀	7世紀	
牟田尻A	牟田尻スイラ*	21			●		
	牟田尻桜京*	25		←	●	→	前方後円墳は装飾古墳
	牟田尻中浦*	6			←→		金銅製飾履(3号墳)
相原	相原*	41		←	●	→	新羅土器(2号墳)
久戸・河東	久戸	20	←			→	石棺1・横穴19、銀象嵌三葉環頭・金銅製圭頭柄頭・短甲1・太刀6など
稲元・須恵	須恵須賀浦**	12					窯跡・横穴墓あり(馬鈴2)
	稲元*	16		←→	←→		
	稲元久保*	14					横穴群(土馬)、鏡片・水晶勾玉など
平等寺・城ヶ谷	平等寺原	41			←→		
	平等寺瀬戸	7			←→		鉄地金銅張雲珠・馬鈴(1号墳)
	平等寺向原*	73			←→		馬鈴・金銅製円頭大刀
	城ヶ谷	62		←	●	→	鋸2
	半田	11		←	←→		
三郎丸・陵厳寺	三郎丸堂ノ上*	12			←→		窯跡
大井三倉・大井平野他	大井三倉*	10			←→		蛇行状鉄器・鐙・鋸4・子持勾玉など
久原・王丸鎌田	久原*	52		←	←→		馬鈴2・辻金具・家形埴輪など
徳重本村	徳重本村*	18	●		→		
富地原梅木他	富地原梅木	28		←	←→		
徳重・名残	徳重高田	20			●	→	
	名残高田*	28		←	●	→	
	富地原大原	24			←→		
富地原上瀬ヶ浦他	富地原上瀬ヶ浦	37			←→		
王丸	王丸清瀬*	14		←→	←→		
浦谷・朝町百田・朝町山ノ口	浦谷	47		←	←→	→	鉄滓
	朝町百田	26			←→	→	鋸、鉄滓
	朝町山ノ口*	23			←→		鍛冶具(鉄槌・鉄鉗)、鉄斧など

\*は一部調査 \*\*は未調査 ●は遺跡内にある前方後円墳の推定築造時期

この地図中のグループのうちある程度調査されている遺跡について、宗像市教育委員会の調査報告等に基づきその時代幅と主な副葬品等を表6に示す。古墳群のほとんどは径10m前後の小円墳であるが、その中に同時期の小型前方後円墳が混じる。3報で見た古墳時代前半のムナカタの前方後円墳は、ほとんどがその地域では隔絶した存在で、数基以内の小墳を伴っていただけだった。表6では徳重本村古墳群のうちの前方後円墳のみが前期古墳であるが、同古墳群の他の古墳は時期を置いて作られていて、両者の間には系譜的な関係はないと見られる。同表に示されていない前方後円墳でも、周囲の同時期の小古墳群を含めると群集墳のメンバーの一つと見なすことが可能と思われる。こ

れは独立した大型古墳が時系列的に連なる津屋崎古墳群（奴山の小古墳群を例外として）とは全く異なった特徴である。

副葬品に馬具が多いのが目に付く。金銅製<sup>しよくり</sup>飾履や金銅製円頭大刀のように、小古墳にふさわしからぬ豪華遺品が盗掘を免れて出土するのにも驚かされる。

#### 4.3.2 大爆発の謎を解く牧神社

上述の古墳時代後半の宗像市域での「大爆発」の謎を解く糸口が、ムナカタの牧神社にある。

馬の放牧地は、古くから「牧」と呼ばれてきた。古代の牧は、東国に多い。後代のことになるが、延喜式に宮廷御用達の「勅旨牧」（御牧と呼ばれる）が信濃（16カ所）・甲斐（3カ所）・上野（9カ所）・武蔵（4カ所）と計32カ所が記されており、そのほか多くの諸国牧と、そこから貢進された牛馬を集めておく近都牧などがあった。このような牧のあった場所に古墳群が発見されている例が多く、これら古代の牧は古墳時代からあったものが多いと考えられている。

そして古代の牧があった場所には、牧神社があることが多い。牧神社は全国に16社しかない。うち勅旨牧の多かった長野県に7社と最も多く、同じく勅旨牧のあった山梨県にも2社ある。他は全て九州で、福岡県は宗像市のみに2社、長崎県の壱岐に2社と対馬に1社、宮崎県に2社ある。

宗像市の牧神社は、離島の地島と勝島にある（以下図17参照）。

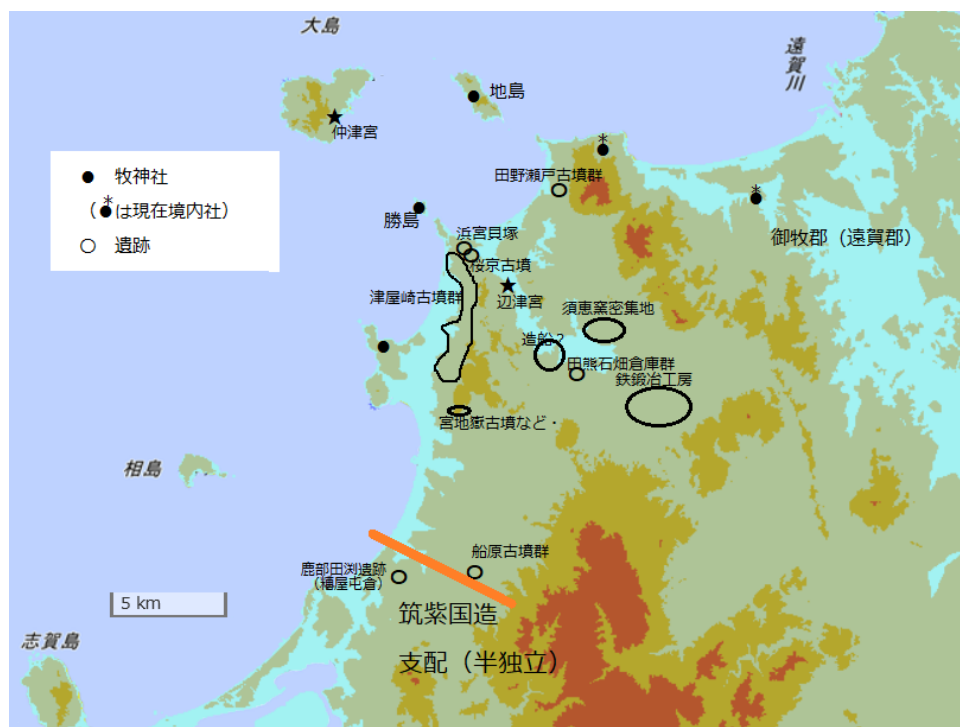


図17 ムナカタの牧神社と筑紫勢力（国土地理院電子地図 Web により作成）



広義のムナカタには、かつてさらに多くの牧神社が祭られていた。『筑前国続風土記』[99]（以下『続風土記』）に津屋崎の渡岬北端部の京泊に牧大明神社があり牧があったことが記されている（現在も社殿がある）。『続風土記』にはまた、遠賀郡初ノ浦（岡垣町波津）の湯川山に「むかしは馬の牧あり。山より西の方に牧大明神の社あり」と記す。またそのあとに、「初浦の上に大なる牧跡あり。めぐりに<sup>ママ</sup>湟あり。何の時に出来たりと云事を知らず。俗説には神代の牧なりと云。」とあり、かつて古代の牧があつて、そこに牧神社が祭られてきたことが分かる。現在でも湯川山登山路の各所に、人工的な地形や遺構らしいところが見られる。この牧大明神は『筑前国続風土記付録』（以下『付録』）[14]にも載っていて、湯川一八戸の産神と書かれている。実際に、イチキシマを祭る湯川の<sup>けいし</sup>景石神社に、「牧神社」と記された石の鳥居が立てられていた（写真3）。近くにあった同社を合祀した時ここに移したらしい。同書は黒山村（岡垣町黒山）にも牧大明神を記す。大正6年編纂の『遠賀郡誌』[100]には、後者に当たると思われる牧神社が黒山の春日神社の境内社として見える。



写真3 岡垣町湯川の景石神社参道に残る牧神社の鳥居  
（後方は景石神社の社殿）

『続風土記』はまた、遠賀郡が中世には御牧郡<sup>みまき</sup>と呼ばれていたと記す。同書によると、戸畑村・井熊村（水巻町<sup>いのかま</sup>猪熊か）にも牧の跡があったという。『筑前国続風土記拾遺』[18]は戸畑の南の枝光村の牧山に「いにしへ馬牧有し址也と云」と記す。

ムナカタで確認される牧神社の場所は、ほとんどが狭小でしかも山地であり、「牧」から想像されるような広大な地形にはない。したがって東国の牧のような、新馬を育成する場所ではないことが明らかである。いずれも海に面していて、近くに港がある。

このようなことから、「ムナカタの牧」は、港から馬を積み出すまでの集結や風待ちなどのための一時的な放牧の場所として用いられたと思われる。現在も古代以来の位置に祭られていると思われる地島の牧神社の社殿は、沖ノ島を向いて祈る方向に設置されている。第3報で記したように、沖ノ島の神を祭るムナカタの神社は、いずれも沖ノ島を向いて祈る向きに建っていた。このことから、騎馬の向かう目的地がまず沖ノ島であり、そこを經由して朝鮮半島に向かったことが推定される。

離島の地島と勝島にあったのは、馬が集めやすく、天候が好転すれば直ちに出航できるためであろう。勝島の場合は、特に理解しやすい。この島は周囲2kmほどの小さな無人島（江戸時代は住人がいた）である。しかし一時的に馬を置いておく場所としては、理想的ではないか。周りが海で馬が逃げられないし、大部分が急峻な山なので、南に一カ所だけある小石の浜に馬が集まったであろう。そこは対岸の草崎半島からよく見え、監視が容易である。地島は周囲6kmとかなり大きく、古くから継続的に人が住んできたが、やはり山勝ちで農耕適地は少ない。その中でも牧神社のある北半分は丘陵地で、馬をある程度の期間置いておくには適していたであろう。このようにこれらの牧はそれぞれ地形に特徴があるので、馬の数や置いておく期間に応じて使い分けられたのではないか。

ある程度の期間馬を置いておくためには、少なくとも水場が必要である。両島は、この条件を充たしていた。いずれも小島の割には山が高く、森林が繁茂している。

#### 4.3.3 半島への騎馬軍団派遣

魏志倭人伝が「牛馬無し」と記すように、日本にはもともと馬は生息していなかった。最古の乗馬文化の遺物は、奈良県の箸墓の周溝から出土した木製の輪鐙である。これは大量の布留式土器と一緒に発見されたため4世紀前半と推定される[101]。5世紀前半には初期の実用的馬具が東日本まで広く分布し、乗馬文化がこの頃各地で一斉に受容されたらしい[102]。

高句麗中興の祖好太王（広開土王）を顕彰した中国集安市の有名な「好太王碑」に、4世紀末から5世紀初めにかけて新羅などに駐留していた倭軍を大いに破ったことが記されている（注20）。騎馬軍団の威力を知った日本は、馬匹の輸入に力を入れ、5世紀末と考えられる<sup>けんどう</sup>顕宗紀2年には「馬、野に<sup>ほどこ</sup>被れり」という状態になる。

継体紀6年（512?）に「百済への使に筑紫の国の馬四〇匹を賜う」とあるのが、馬を渡海させた最初の記事である。欽明紀7年（537?）に「百済の使人<sup>つかいちゅうほう</sup>中<sup>な</sup>部<sup>そ</sup>奈<sup>ぎ</sup>率<sup>そ</sup>己<sup>し</sup>連<sup>れん</sup>罷<sup>ま</sup>り帰る。仍りて良馬七十匹・船一十隻を賜れり。」とあり、半島に対して馬を大量に供給していたことが分かる。馬の下賜はその後も続くが、同14年8月百済の使いが「又復海表の<sup>また</sup>



諸<sup>もろもろ</sup>の国、甚だ弓馬<sup>とも</sup>乏し。古より今に到るまでに、天皇<sup>すめらみこと</sup>に受けたまわりて強敵<sup>こわきあた</sup>を禦<sup>ふせ</sup>げり。」と述べたと記され、かなり以前から日本が百済など南鮮に武器や馬を供給してきたことが窺われる。

欽明紀 15 年には、援軍千人と馬一〇〇匹、船四〇隻を派遣するとある。これ以降半島への出兵はますます大規模になり、同年にも「軍士万人」を派遣すると見え、欽明紀 22 年には大將軍<sup>おおとものむらじさでひこ</sup>大伴連狭手彦が「兵数万」を率いて高麗を討ったとある。

#### 4.3.4 軍馬渡海基地ムナカタと沖ノ島祭祀

沖ノ島とムナカタの古代牧を視中に納めることのできる湯川山麓の砂丘上に、前方後円墳の田野瀬戸 4 号墳 (38 m) が 6 世紀初めに造られている (図 17)。この古墳は盗掘を受けていたが、横穴式石室から胡籙<sup>ころうく</sup> (矢を入れて携帯する武具) と多数の鉄鏃や挂甲など、また墓道からは大型の銀装飾付き鉄製剣菱形杏葉 3 点とこれを繋ぐ鉄製の雲珠などが出土した。調査報告は、「軍事的騎乗部隊を想定させ、海上交通の監視役としての地位にあった」被葬者を考えている [103]。ここには他にも 3 基の古墳の存在が報告されており、消滅した 1 号前方後円墳も 4 号墳に近い時期と考えられている。これらの古墳は、渡海する軍馬管理のために特別に配置された武人一族の墓の可能性が強い。

前記宗像の群集墳グループを、古墳の副葬品やその周辺にある同時期遺跡の遺物などに対応させると、これらの人々の生業が見えてくる。

牟田尻桜京古墳群の一つから鉄製アワビオコシが出ていて、これら古墳群の被葬者が漁撈に係わる人々であることを推測させる [104]。

神湊と牟田尻の間の海岸砂丘上に、古墳時代玄界灘沿岸最大の浜宮貝塚 [105] がある。ごく一部が試掘されたに過ぎないが、出土した土器は 5 世紀末から 7 世紀前半までの土師器が中心で、滑石製有孔円盤などの祭祀遺物もあった。自然遺物には大型魚やアワビなどの外洋性の貝が多く、鉄製の銚・ヤスなどの漁具や刀子があった。この貝塚はあまりにも規模が大きく、海人集団の自家消費を遙かに上回る規模の大海産物加工工場があったと見られている [104]。この近くには他にもほぼ同時期の貝塚が発見され、製塩土器も出ている。

桜京古墳群中の桜京前方後円墳 (全長 39 m) は装飾古墳として著名で、肥後から筑後地方を経て筑豊の王塚古墳や竹原古墳に到る装飾古墳の系譜につながっている [106]。そのやや南方の牟田尻の小円墳の一つから、金銅製飾履<sup>しよくり</sup>が出土している。これは奈良の藤ノ木古墳や熊本県の江田船山古墳から出たもの (いずれも国宝となっている) と同系統のもので、百済製と見られる [107]。飾履<sup>しよくり</sup>の出土は全国で 16 例しかなく、そのうち 9 例が近畿地方で貴人の墓からの出土が殆どである [108]。このように、これらの中小古墳に

葬られていたのは単なる海人ではなく、広域的つながりを持ち、しかも当時上層の権力者しか入手できない貴重品を入手できる立場にいた人々も多かったのである。

宗像市域のあまりにも多くの古墳のなかには、渡海戦争で戦死したり、帰国後ムナカタで亡くなったりした有力者たちの墓も、含まれているのではないかと推測される。桜京装飾古墳は、熊本地方からの出征者の墓ではないかとも想像される。

このような騎馬軍団の渡海におけるムナカタと沖ノ島の役割の重要さは、ムナカタ地域での遺跡や出土品ばかりではなく、時を同じくして豪華になり量も多くなった沖ノ島出土品でも裏付けられる。特に岩陰祭祀遺跡で見られる多くの装飾馬具類などは、寄港地の沖ノ島で航海安全と武運を祈った将兵が、無事帰国できた神恩に感謝し持ち帰った貴重品を捧げたものと思われる。この一部がムナカタにも持ち込まれ、出征前後の協力のお礼として宗像人に贈与されたのであろう。

#### 4.3.5 百基の須恵窯

須恵の古墳群は、図 16 に見るように、須恵窯跡の分布中心域と重なっている。宗像市域には、約 100 基の須恵窯跡が見付かっていて、そのほとんどが孔大寺山山麓<sup>そうばる</sup>の相原から城山山麓<sup>りょうげんじ</sup>の陵厳寺までの間にある。岡田裕之と原俊一[109]は、稲元日焼原<sup>ひやけばる</sup>の 4 基の窯跡が 5 世紀末から操業を始め、次第に東・北方に新しい窯群が開発され、古墳群と同様 6 世紀に最盛期を迎え、一部は 7 世紀まで操業していたと推定している。操業開始は有名な大野城市の牛頸窯跡より古く、それより早く終了する。牛頸窯跡は対外交渉の窓口<sup>なのつのみやけ</sup>那津官家や、それを引き継いだ太宰府政庁の需要に応えたものであるが、宗像のこの多数の須恵窯にはどのような需要があったのか。岡田らはこの時期庶民に須恵器に対する需要がそれほどあったとは考えられないとして、主に古墳への供献用であったと推定し、窯は地域のニーズに応じて非定期的に操業したと想定している。しかし、それだけに 100 基もの窯が必要であったであろうか。もちろん沖ノ島での供献もあったと考えられるが、それも量は限られている。

須恵須賀浦遺跡の約 20 の窯跡についての岡田らの解析では、6 世紀後半の最盛期には 10 基の窯が同時に稼働していたという。他の遺跡でもこの頃最盛期を迎える窯が多かったようなので、大きな需要が集中的にあったと思われる。その需要とは、上述の朝鮮半島出兵関連以外に考えられないであろう。

これら将兵がすべてムナカタから出発したとは限らないが、牧がムナカタに置かれていたことから見て、少なくとも馬を伴う将兵の多くがムナカタに暫時滞在したであろう。これら将兵の食器や食糧備蓄用具あるいは祭具として、大量の土器を短時間で調達する必要であったのではないか。宗像市域ではこの時期の大きな甕が出土している。その一

つ三郎丸堂の上Cの窯跡から出土した甕の容積は 280 l もある。これらは墓への供献用と説明されているが、何でこのような大きな甕を墓に供える必要があったのか。最終的には供献されたとしても、もとは多数の将兵や軍馬のために食糧や水を蓄えておくためのものではなかったのか。

上記の窯跡附近からは、珍しい土馬（馬形の土器）が 3 個見付かっている（うち 2 個は古墳出土）。周囲の群集墳からは、馬具も多く出土している。馬に着けたと思われる銅鈴がムナカタで 25 個も出土しているが、うち 4 個はこの須恵窯地帯から出ている。この地域の馬とのつながりを窺わせる。

平等寺地区に、いまでもこの地域の信仰を集めている産神の白髭神社があるのも注目される。白髭神社はその名が示すように新羅系渡来人の祭った神社とされる。近くの相原古墳群では新羅土器も出ている。この地域の須恵窯に渡来人が関わっていた可能性を示す。白髭神社は東海・関東地方に多いが福岡県では 4 社しかなく、その 1 社が古賀市にもある。

上記以外の地域の群集墳から出土する馬具にも、注目すべきものが多い。久原 I - 1 号墳では日本最古級の輪鐙が出土し、大井三倉 5 号墳（6 世紀末）からは奇妙な形をした蛇行状鉄器が出土している。これは、馬の尻の上に装着してこれをソケットとして旗を立てた埴輪が埼玉県坂巻 14 号墳で出土したので、用途がはっきりした。朝鮮半島ではより古い時期の出土例があるので、半島から持ち込まれたものと考えられる。

#### 4.3.6 造船業を示す 14 本の鋸

全国的にこの時期の鋸の出土は珍しいが、ムナカタからは 14 本も出土し、九州出土 29 本（2013 年時点）のほぼ半数を占める[110]。埋納時期はほぼ 6 世紀に集中している。その中でも最も多数出土したのは、大井三倉古墳群である。ここでは調査されている 9 基の円墳のうち 6 世紀後半から同末までの 4 基から計 5 本出土している[111]。そのうち蛇行状鉄器の出土した 5 号墳出土の鋸は、基部の幅が 45 mm と最も大型であった。これは大木を挽いていたことを意味する。同古墳からは手斧や刀子も出ていて、多様な木工加工が行われていたことを示す。この遺跡は、宗像入江に突き出た細長い微高地上にあるので、被葬者は軍船を造っていた工人ではないか。一緒に出土した蛇行状鉄器などの馬具や装身具は、謝礼として受け取ったものであろうか。これら古墳は全て径 15 m 以下で、室内長さ 3~4 m の単室石室を持つ群集墳の最も一般的なサイズであり、特別の権力者の墓ではない。

ムナカタでは首長墓とされる津屋崎地区の奴山 1 号前方後円墳（5 世紀中葉）から出た鋸がもっとも古いが、その後小墳の奴山 44 号墳で鉋とともに出土しており、津屋崎入

江に近い立地から見て造船との関連を思わせる。その後はほとんどが釣川流域の出土となり、工人の集住を示す。将兵と船には鉄器が欠かせないが、ムナカタには鉄器製造の痕跡も多い。5世紀代に久原滝ヶ下や津屋崎地区の勝浦や奴山で鉄器製造が行われていたことが報告されているが（以下主として大澤正巳[112][113]による）、それ以降は特に野坂・朝町地区に顕著である。5世紀中頃の野坂一丁間遺跡で、一つの住居に2基の鍛冶炉が発見され、他の住居から<sup>たがね</sup>鑿や鉄滓、鉄鏃などが出土した。6世紀の武丸高田遺跡では、2軒の住居から鍛冶炉と鉄滓が出土している。

鉄滓は古墳時代全国で約250の6～7世紀の古墳に副葬されており、供献鉄滓と呼ばれている[114]。ムナカタでは、朝町百田古墳群の2墳と浦谷古墳群、津屋崎地域でも清田ヶ浦古墳群と須多田立石の2墳などから出土している。特に浦谷古墳群の例では、鉄滓が土師器内に納められていて、「供献」の名が付いた所以を理解させる。これらの古墳に葬られていた人々は、鉄器製造を生業としていたと思われる。

朝町山ノ口遺跡では、2基の古墳から2点の<sup>かなはし</sup>鉄鉗と4点の<sup>はる</sup>鉄鎚が出土した[115]。鉄鉗の一つは長さが47cmもあり、国内最大級である。鉄鉗は、平等寺原古墳群や奴山1号墳からも出土している。鉄鍛冶がムナカタの各所で行われていたことが分かる。鉄器製造は、当初勝浦と宗像の入海に沿った地域で行われていたが、次第に奥地に移っていくように見える。これは燃料の森林資源の枯渇のためであろう。この時期のムナカタでの製鉄は確認されていないが、隣の遠賀地域では岡垣町の瀬戸遺跡で鉾石製錬の箱形炉が見付かっており、すぐそばの遠賀町尾崎天神遺跡では130kgを越える鉄滓が出土している[116]。ここで作られた鉄素材が、ムナカタに送られたのではないか。

#### 4.3.7 田熊石畑の倉庫群と「匁形の箭」

紀元前200年頃最盛期を迎えた田熊石畑遺跡に、700年もの空白のあと6世紀に25棟の掘立柱建物が整然と建ち並ぶ[97]。そのうち18棟は2間×2間の<sup>そうばしら</sup>総柱建物（縦横の交点にすべて柱がある）であり、重量物を収めた倉庫ではないかと考えられている。

重量物としてまず考えられるのは鉄製品であり、当時の事情を考えれば武器・武具類であったと思われる。多くの将兵が九州内あるいは東国を含む全国から集合するとき、全ての人が自ら全ての武器・武具を自分で携行していることは困難であったであろう。当然武器庫が必要であったに違いない。ムナカタばかりではなく各所で製造される武器がここに集められて、出征に備えられたのではないか。田熊は、鉄器製造が盛んであった地域の要の位置にあり、水運を利用して集積しまたそれを積み出すのには最適な位置にある。

後年になるが、『<sup>りょうぎのげ</sup>令義解』に律令税制の中の諸国貢納物の武具の例として、「<sup>むなかたのや</sup>匁形箭」

が挙げられている。『宗像市誌 通史 2』中の福原栄太郎の考察によると[117]、これは7世紀代には貢進されていたと見てよいという。ムナカタの後期以降の古墳で、最も頻繁に出土する武具は鉄鏃である。おそらく古墳時代からムナカタ製の矢は有名であったと思われる。矢は将兵が携行するだけでは不十分で、多量に備蓄しておき、戦いに際してコンスタントに補給する必要がある。ムナカタで製作された武器・武具の中でも、最も重要で量も多かったであろう。それが後世にまで名が残っていた所以と考えられる。

田熊石畑と同時期の倉庫と思われる建物群は、他にも釣川上流左岸の2カ所で見付かっている。<sup>ふじわらこうやざき</sup>富地原神屋崎遺跡からは、2x3間2棟と2x2間1棟の総柱建物が検出されたばかりではなく、土坑や住居跡から滑石製白玉や有孔円盤などの祭祀品とその未製品が出土している。前者は古墳時代後期、後者は5世紀後半から6世紀初めということで、これらは同時期であった可能性がある[118]。この総柱建物は、沖ノ島奉獻品などの滑石製祭祀品を収めた倉庫であったのであろうか。さらに1.5 km 上流の<sup>よしどめしたそうぼる</sup>吉留下惣原遺跡でも、2x2間の総柱建物7棟を含む21棟の掘立柱建物からなる6世紀後半から7世紀初頭の倉庫群が検出された[119]。

これらの遺跡はいずれも釣川の河原に面していて、この時期には船がここまで入ったようである。

宗像市域に以上のような群集墳や遺跡を残した人々は、地域の統括や対外交渉などは津屋崎古墳群を残した胸形（宗像）氏に任せたであろうが、特別な権力者でも、その下の隷属民でもないと思われる。おそらく皆それぞれ専門の技能を持った独立生活者であり、血族単位でグループを作って暮らしていたのではないか。墓はそれほど大きくなくとも山の上に石を運ぶには大勢の協力が必要なので、相互扶助の習慣も発達していたようである。群集墳の中に時々前方後円墳が混じるのは、時々優れたリーダーが出て多くの人を束ねていたためと思われる。それが長くは続かないので、世襲制の権力者がいたわけではなかったらしい。このような比較的平等な社会が古代にあったのは不思議とも感じられるが、これも長年自由な活動を続けてきた宗像海人族の伝統が引き継がれてきたためであろうか。

#### 4.3.8 「宗像型」石室から見るムナカタ勢力の広がり

上記古墳のほとんどは横穴式石室を持つ。横穴式石室は、朝鮮半島の影響を受けて、4世紀後葉に九州北西部で築かれ始める。それまでの竪穴式の墓に比べて追葬がしやすいので、すぐに九州を中心に広がって行く。はじめは竪穴式石棺または石室の名残の残る「竪穴系横口式石室」が作られる。

ムナカタに横穴式石室が現れるのはやや遅く5世紀半ば頃であるが、竪穴系の伝統が

遅くまで残る。4世紀後半から7世紀前半まで、長期に亘って古墳が築かれる久戸古墳群[120]について、その変遷を見てみよう。ここでは4世紀末に竪穴式の石棺墓が造られ、5世紀後半には図18(a)に示す竪穴系横口式石室が現れる。6世紀に入ると同図(b)のように斜めに降りる墓道から入るようになる。6世紀後半から7世紀には同図(c)に見るように墓道は完全に水平になるが、依然として竪穴式の伝統を残して、(d)のように石室全体を地山の表面以下に納めるのが普通である。なおこの頃には(c)のように前室がある「複室式」石室が多くなる。

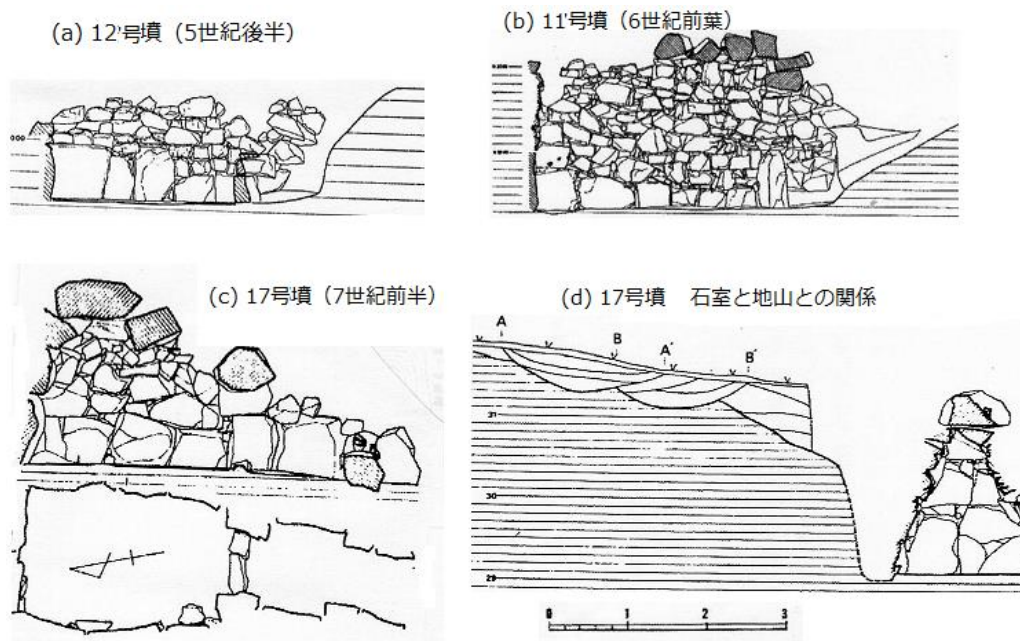


図18 久戸古墳群における横穴式石室の時期による変化（宗像市調査報告[120]により作成）

このような構造のため石室を入れる墓穴が深いことが、ムナカタの古墳の特徴になる[121]。宗像市の遺跡の調査報告書に、農地化で墳丘が削られて古墳の存在が気づかれなかったところに横穴式石室が発見された、という叙述がしばしば現れる。

横穴式石室の特徴をその作り方から分類した小島篤は、このような初期横穴式石室から発展し典型化したムナカタの古墳を、「宗像型」と名付けた[122]。これはまず深い墓穴を掘りその中に石室を構築して行くやり方であり、通常玄室（墓室）の大部分は地下に隠れる。その中で大型の石室には玄室の天井が高く「合掌形」になっているものも多いので、上部が地表に出ることもあり、これを墳丘で覆うことになる。このような特徴のため、石室の大きさの割に墳丘が小さい。6世紀後半からムナカタで一斉にこのタイプが作られて始めるので、小島は専門的な墓作り工人グループの存在を推定した。

6世紀後半から7世紀期前半までの「宗像型」古墳の分布を見たのが、図19である。この時期の北部九州の横穴式石室には大きくは二つのタイプがあって、福岡平野に多い



玄門に縦の大石（立柱石）を立てるタイプとそれがないタイプがある。「宗像型」は主に後者に属する。

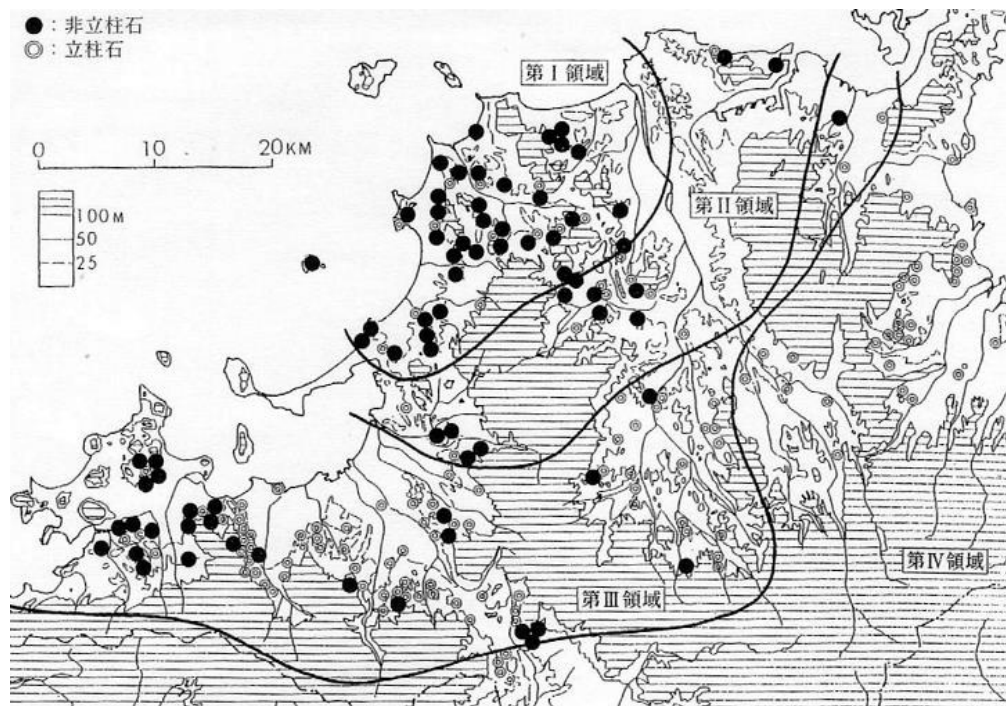


図 19 宗像型石室の分布域（小島篤[122]による）

同図の第 I 領域は「宗像型」が主体となる地域で、立柱石を持つ古墳はほとんどない。ここには宗像郡域だけではなく、広義のムナカタに入る遠賀郡西部や糟屋郡までが含まれる。これまで見てきた「大ムナカタ」の範囲とほぼ一致している。

第 II 領域は宗像系の石室構築技術が用いられる地域で、鞍手郡では宗像型をもとに発展した「竹原タイプ」が見られる。これは装飾古墳として有名な宮若市の竹原古墳の名を取ったものである。第 III 領域は、他系統の石室構築技術（八女型と那珂型）が主体の地域であるが、宗像型の石室構築技術も点的に存在する。その中で糸島地方では、宗像型と親近関係にある「糸島型」が多く見られるという。宗像型を造ってきた工人の一部が移動したものであろうか。

さらに小島は、ムナカタの横穴式古墳に奉献されているものと同様の土師器の高坏<sup>はじき たかつき</sup>が、上記の宗像型あるいは宗像系の技術を用いた横穴式石室の分布とほぼ一致していることに注目する。特に福岡県西区の今津湾沿岸の糸島型の古墳群でも同様の高坏が発見され、宗像とのつながりを示している。さらに壱岐島の双六<sup>そうろく</sup>古墳でも同様の高坏が出土しているという。

このように墓の作り方や葬祭の儀礼を共通にする人々がこの時期洞海湾から糸島地方、さらに壱岐にまで住んでいたらしい。これは、その人々を統括するリーダー達、ムナカ

タでいえば「胸肩君」のような人々が、相互につながりを持って交易など対外活動を行っていたことを示している。その中でも石室構築技術の中心であったムナカタを統括していた「胸肩君」が、リーダーシップを発揮していたことが窺える。

#### 4.3.9 軍港以降のムナカタと関連地域

平成 25 年、ムナカタの西隣の新賀市で驚くべき発見があった。山の手の谷山地区で、すでに調査されていた 7 世紀初頭の船原<sup>ふなばる</sup>3 号墳（以下船原古墳）のすぐそばで、遺物を埋めた三つの土坑が発見された。そのうち同古墳の横 5 m 下段の土坑から、主として馬具からなる 200 点以上の遺物が発見された。大部分の馬具が新羅製と見られているが、その中には、これまで朝鮮半島でも見られないものもあった。

なかでも注目を集めたのは、これまで類例のない複雑な形状の金銅製雲珠である。沖ノ島からは 45 個もの歩揺<sup>ほようかざりうず</sup>飾雲珠が出土しているが、ここで出土したものは金属板中央に 6 本釣手の歩揺飾雲珠があり、周囲 6 カ所に 4 本釣手の歩揺飾雲珠を配した二重構造のもので、「金銅製歩揺<sup>ほようつきかざりかなぐ</sup>付飾金具」と呼ばれている。似た構造のものが新羅で出ているので、古墳の被葬者が新羅と独自のルートを持っていたと推測されている。その他多くの出土品の中には、蛇行鉄器が少なくとも 3 個もあり、国内 3 例目となる馬<sup>ば</sup>胃<sup>ちゅう</sup>（馬のかぶと）も確認された。

桃崎祐輔[123]は、新羅の皇南大塚など王墓の頂上で発見されている箱詰め馬具との類似を指摘し、馬の殉葬の代用か、天界への乗り物としたとする。そしてこの古墳の西 4 km の海浜に近い新賀市鹿部<sup>ししぶ</sup>に糟屋<sup>かすやのみやけ</sup>屯倉<sup>ししぶたぶち</sup>関連施設とされる鹿部田<sup>ししぶたぶち</sup>遺跡があり、そのそばの楠浦中里古墳群に殉葬馬の痕跡のある 4 基の墓が見付かっていることを指摘し、船原古墳の被葬者は百済に送った軍用馬の調教・管理の集団の統括者ではないかと述べている。そして 6 世紀末から 7 世紀初頭新羅に対し大規模出兵を企てていた日本国に対し、それを止めようとして来航した新羅の使節が持参した「新羅の調」がここに納められたと推測する。

図 19 に見るように新賀市も典型的な「宗像型」古墳の範囲内にある。原俊一[124]は、船原古墳の石室も、宗像の相原前方後円墳—池田桜 B-3 号墳の系列に続くものと指摘している。ただしムナカタでは 7 世紀半ばに宮地嶽古墳が、これに引き続いて手光不動尊古墳が築かれ、依然として筑前東部の勢力の中心がムナカタにあったことを示している。この 2 古墳は、巨石で構築された畿内型の横穴石室を持っており、特に石室の長大な前者が娘の尼子娘を天武天皇の妃に納めた胸形君徳善の墓と推定されている[125]。

表 5 に見るように、7 世紀前葉にはまた海退期に入る。7 世紀に入る頃から宗像が軍港として機能しなくなった可能性がある。牧神社が津屋崎の渡半島にも鎮座するのは、

様々な便益を有する宗像市域の海港が使いにくくなったことによるものでないか。古賀市に軍馬の基地ができたのは、このことによる軍馬基地の西進の結果であろう。

以上のことは、528 年筑紫君磐井が敗死し、その子葛子<sup>かすやのみやけ</sup>が糟屋屯倉をヤマト王権に献上して死罪を免れた（継体紀）ことと対応する。糟屋屯倉は、古賀市域の鹿部田渕遺跡とする説がきわめて有力である[126]。この遺跡は 6 世紀後半の 2 棟の倉庫風大型建物であり、その付近に沖ノ島でも出土した鑄造鉄斧を出した遺跡や、金属装太刀の副葬や殉葬馬痕跡のある古墳などが見付かっている。上記桃崎は、このあたりに「馬匹飼育を含めた軍事集団の居住」を推定している。船原古墳はこれら遺跡を見下ろす高地にあり、それを管轄する管理者の墓と見られる。

大小の古墳群が前期から継続して作られたムナカタに対して、糟屋郡東部には 6 世紀始めまでは古墳が少なく大きな古墳は全く見られない。ところが 6 世紀半ば頃から徐々に古墳が増え、上記鹿部田渕遺跡や船原古墳につながる。明らかに 6 世紀前半に大きな変化があり、それは磐井の敗死をきっかけにしているように思われる。この事件以降ムナカタ勢力の領域が古賀にまで広がったのであろう。

ムナカタ勢力の西進は、壱岐島の古墳築造とも連動している。壱岐では、5 世紀後半からやっと古墳が築かれはじめ、他地域で古墳築造が下火になる 6 世紀後半になって突然全長 91m の双六前方後円墳や径 54 m の兵瀬円墳などかなり大きな古墳が陸続と築かれ、津屋崎古墳群と同様 7 世紀まで続く[127]。副葬品にはやはり豪華な馬具が含まれ、騎馬軍団の基地が置かれ統率者が常駐していたことを示す。前述の 2 社の牧神社がこれと対応しているのも、ムナカタと同様である。

以上のように、4 世紀代の鉄輸入ルート上の要地としての沖ノ島の地位が低下したあと、5 世紀になって沖ノ島が騎馬軍団渡海の経由地としてふたたび脚光を浴びる。これにより沖ノ島祭祀は再び盛期を迎えたと見られる。沖ノ島祭祀が長期に亘って続くのは、このような新しい歴史イベントのためと考えられる。

朝鮮半島への出兵は 663 年の白村江の敗戦で終わりを告げ、以降の日本は殻を固めて国内整備に専念する。この頃から国内で鉄の生産が盛んになり、もはや「鉄の道」は必要なくなった。

渡海航路に専念させられていた宗像海人族は活躍の場を失い、やがて玄界灘に向かって漕ぎ出す海人もほとんどいなくなる。

万葉集卷一六に、「大君の 遣わさなくに さかしらに 行きし荒雄ら 沖に袖振る」（三八六〇）で始まる筑前国志賀の白水<sup>あま</sup>郎の歌 10 首がある。その左注（歌の左に付けた詞書き）に、「神龜年間（724－729）に太宰府が宗像郡の百姓<sup>じんき</sup>宗像部津麻呂を対馬に糧を送る船の舵取りに指名したところ、津麻呂は滓屋（糟屋）郡の白水郎荒雄に自分は老齢で

海路に耐えないので代わってくれないかと頼んだ。荒雄は、昔からの船仲間と兄弟より深い仲であるから断れないと言って対馬に向かったところ、暴風に遭って船が沈んでしまった。この歌は荒雄の妻子の歌であるが、筑前国守山上憶良<sup>やまのうえのおくら</sup>が代わって詠んだとも言う。」という趣旨のことが書かれている。

この歌から分かることは、このときムナカタには老齢の津麻呂以外に対馬に渡れる海人さえいなかったということである。そして志賀の海人とは昔から縁が深かったこと、そしてこの頃は海上交通をもっぱら志賀の海人が担っていたらしいことも分かる。このころムナカタは国内の海上交通路からも外されていたらしい（注 21）。これはおそらく、ヤマト王権の権力強化により陸上交通路が整備され、海上交通の重要度が低下したことにもよると思われる。

このように沖に漕ぎ出せる海人がいなくなると、沖ノ島での大規模な祭祀は困難になる。9 世紀末から顕著な祭祀の跡が見られなくなるのは、このような宗像海人族の活動が低調化したためと考えられる。

## 5. 結び

『日本書紀』のウケイ神話は当時の政治的事情が加わって複雑になっているが、本来は沖ノ島祭祀開始時の誓約と祭祀を表したものと考えられる。誓約に参加したのは、主催者であるヤマト勢力の代表とこれに従った出雲勢力の代表、そして海上輸送に携わった宗像海人族およびこれに接続する内陸水運などに関わる氏族の代表であった。誓約の目的は、鉄器時代に入っても鉄の輸入ルート圏外に置かれていたヤマトに、沖ノ島経由で山陰へ流入していた鉄を、瀬戸内海経由でヤマトに引き込むことであったと思われる。

「海北道中」は、「鉄の道」だった。ヤマトでは新開発の宇陀の水銀朱資源（辰砂鉾床）を巡り古代有力氏族によりヤマト勢力が形成され、3世紀末頃までに朱と三角縁神獸鏡などで瀬戸内海周辺の諸豪族を懐柔し傘下に収めていた。

最近の研究の進展により、沖ノ島祭祀の開始は3世紀末から4世紀初頭に遡る可能性が強い。朝鮮半島南部の鉄資源は、弥生時代後期以来主として壱岐経由で糸島半島から博多湾に流入し、博多の鉄器加工基地から主に邪馬台国連合に当たる地域に流通していた。この博多湾中心の鉄貿易は、沖ノ島祭祀開始後4世紀半ばに衰退する。出雲の玉など鉄の対価を揃えたヤマト勢力側に、朝鮮半島の権益と交易路の覇権を奪われたのである。これ以降鉄貿易に必ずしも沖ノ島を経由する必要がなくなり、祭祀も一時怠りがちになる。

5世紀後半から7世紀にかけて、津屋崎地区の大型古墳系列と並行して、釣川流域に約2,000基の群集墳が築かれる。古墳出土物やその他遺跡などから、これらの墓に葬られた人々の生業として、漁業・水産物加工・窯業・鉄鍛冶・造船・造墓・馬飼などが想定され、中心の田熊石畑遺跡に25棟の倉庫群が立ち並ぶ。この繁栄は、沖ノ島岩上祭祀期の豊富な奉獻品と対応し、歴史的には、この時期の頻繁な朝鮮半島出兵の記録と対応している。長い海退期のあと海進でまた良港となったムナカタが、沖ノ島経由の騎馬軍団渡海基地となったと見られる。いくつかの小さい牧に祭られた牧神社が、いまでもムナカタの海岸沿いに残る。「海北道中」が復活し「騎馬の道」になったのである。沖ノ島出土のおびただしい金銅製馬具などは、将兵が寄港地の沖ノ島で航海安全と武運を祈り帰還時に感謝して奉獻したものと考えられる。

528年の筑紫君磐井敗死後は騎馬軍団が古賀市域からも壱岐経由で渡海したが、663年白村江の敗戦で出兵は終わる。沖ノ島祭祀もローカルなものとなり、ムナカタ海人族の活動低下とともに顕著な祭祀は終焉を迎える。

## [附編 1] ムナカタ・ストーリー

### (1) ムナカタのさだめ (図 10・11 参照)

ムナカタの地理的位置と地形は、統一日本の形成に働くべき役割をムナカタに課していた。魏志倭人伝に「山島に依りて国邑をなす」と書かれているように、日本の地形は陸路での地域間交流に適さなかった。古代人の広域交流は、もっぱら水運で行われていた。

しかし縄文時代の始めまで、日本、特に九州島内では、広域交流のニーズは強くなかった。人々は豊かな山の幸に恵まれていた。もしそのような状態がその後も保たれていれば、日本は古代朝鮮のように、小国が乱立する状態が長い間続いていたに違いない。

しかし次節で述べるように、日本列島大地の地質活動はそれを許さなかった。九州南部の人々は北に向かい、その北端でムナカタに遭遇した。

九州島の北の海岸線は、ムナカタで直角に折れ曲がっている。その角<sup>かど</sup>には、2本の角<sup>つの</sup>が生えている。湯川山と孔大寺山は、遠くの海上からよく見え、よい目印になった。しかしそれはツノというよりは優雅に膨らんでいるので、人々はこの2山をムナカタ（胸形）と呼んだ（注 22）。人々がムナカタで発見したのはそれだけではない。2山を含む四つ塚の山並みの左右は住居に適したほぼ平坦な丘陵になっていて、その間に深い入り江が広がっていた。海の幸と山の幸を同時に享受でき、しかも多くの湧水にも恵まれていた。

船でこのカドを廻ると、大きな陸地が見えた。本州の端である。ここからは、東へ、北へ、どこまでも新しい天地が続く。しかしそのカドは、いつもはスムーズに通れなかった。カドの突端の鐘ノ岬と向かい合う地島との間には、危険な浅瀬が広がっていた。ここを避けるには、大きく廻って地島と大島の間を通らねばならない。そこはもう荒波の玄界灘である。ほとんどの船は、鐘崎に立ち寄って浅瀬の状況を聞かねばならない。反対方向から来ても遠賀川河口の山鹿の港か、鐘崎の手前の波津の港に立ち寄ったであろう。こうしてムナカタは、海人の根拠地になった。

九州島の大部分の人々は、中央の山岳地帯で東海岸とそこから広がる東方の新天地と隔離されている。東方に行くためには、海路でムナカタのカドのネックを通らざるを得ない。カドの手前の櫛の歯状の入り海と沼沢地のために、陸路での通行は困難である。

北西九州は弥生時代はじめ朝鮮半島からの文化を真っ先に受容したが、文化がさらに東方へ伝播するには、このネックを通るほかはない。ムナカタは常に文化伝播の起点になった。しかもムナカタのカドは、九州島本土から朝鮮半島への最短距離の地点の一つでもある。当然渡来人や海の彼方の文物が、直接ムナカタにも入ってくる。縄文時代からムナカタの人が訪れていた沖ノ島も、対馬島へ、そして朝鮮半島への航路の中継点と



なる。

後年朝鮮半島に先駆けて日本が共通文化を持つ統一国家になるには、このような交通の扇の要としてのムナカタの役割が大きかった。

これは、地理・地形からの、ムナカタのさだめであった。

## (2) 縄文海人族の広域活動 (図 20 参照)

1 万年前頃から、縄文文化は南九州で花盛りを迎える。7300 年前そこを襲ったのが、南方海上始良カルデラの大噴火であった。火砕流は海を渡って鹿児島県南部に上陸し、火山灰は九州中部まで厚く積もる。降灰は、朝鮮半島や東北地方にまで達した。九州島南部は植物が枯れ、動物も人も住めなくなる。生き残った人々は、北を目指す。有明海ではそれ以前から豊かな海産物を利用していたが、陸上資源の枯渇と南からの人口圧で、海を生活の基盤とする人々が多くなる。九州海人族の誕生である。熊本平野南部の轟貝塚で用いられていた土器が大噴火以来轟 B 式に変化し、人とともに北方へ拡散する。海人族の一部は、北西九州から朝鮮半島南部まで達した。北へ向かった人々は二日市地峡帯の水路を通して玄界灘に出てさらに東へ向かい、「ムナカタのカド」にぶつかる。



図 20 喜界カルデラの大噴火と縄文海人族誕生 (第 2 報図 17 を改変)

噴火の影響は栗畑[128]を、轟式土器は李[129]を、曾畑式土器は木崎[130]を参考

カドの両側に深い入り江を見出した人々は、ここに根拠地を築く。轟 B 式土器が宗像

のさつき松原から、遠賀川の河口から中流にかけて貝塚から見付かっている。人々は、海上遠くからよく見える2本の胸の形のツノを、ムナカタと呼んで自分たちの集団の名前とした。こうして宗像海人族が生まれた。轟B式土器は、中国地方に広く拡散する。宗像海人族が果たした役割が大きかったであろう。

轟B式に続いて、熊本平野からより洗練された曽畑式土器がやってくる[130]。この土器はさつき松原と遠賀川流域のほか、沖ノ島からも多量に出土する。縄文人が海獣の棲む沖ノ島を発見したのである。この土器も朝鮮半島で出土するので、ムナカタから朝鮮半島への海の道が開かれたことになる。

沖ノ島には、ムナカタだけではなく東方からも多くの人が集まる。こうして宗像海人族は東方の人々と広く交流するようになった。縄文時代以来南島や朝鮮半島東部を含む海人たちには、女性が海の安全を祈る慣習があった。大ムナカタではその巫女達が葬られるとき東方から来た慣習により施朱されたが、これがその後の歴史に大きな影響を与える。宗像海人族は、そのような巫女の代表としてイチキシマ(市杵島姫)を祭ってきた。

### (3) 遠賀川土器発祥と弥生文化全国拡散(図21・22・23参照)

戦乱や気候の寒冷化により、大陸の人々が朝鮮半島になだれ込み、玉突き的に朝鮮半島から進んだ水田稲作文化を持った人たちが日本列島に渡ってくる。西北九州や博多湾岸に一步遅れてムナカタにやってきた人たちは、金属器や玉、磨製石器など、かなり進んだ文化を持っていた。はじめ津屋崎海岸の今川遺跡に住みつき、さらに宗像市域に居住範囲を広げる。水田適地の少ないムナカタから人々はさらに東を目指し、宗像海人族に案内されて下関から出雲へ、またはるか土佐から紀州へと移住して行く。イチキシマ信仰も全国に広がる。

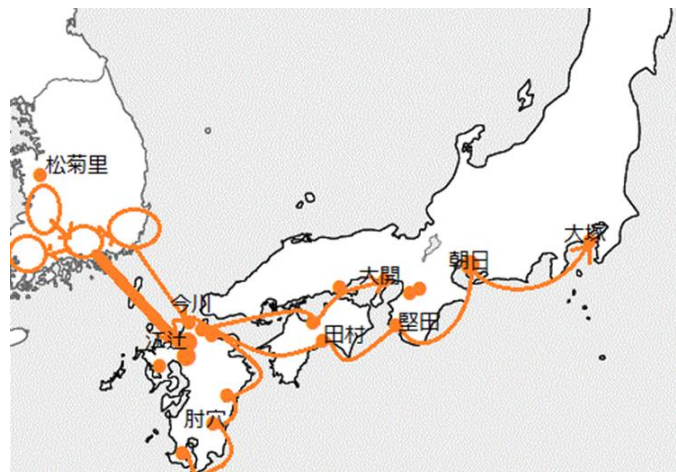


図21 松菊里型住居の弥生時代早・前期の伝播

朝鮮半島内については端野晋平[131]を、列島内は原紘[27]を参考

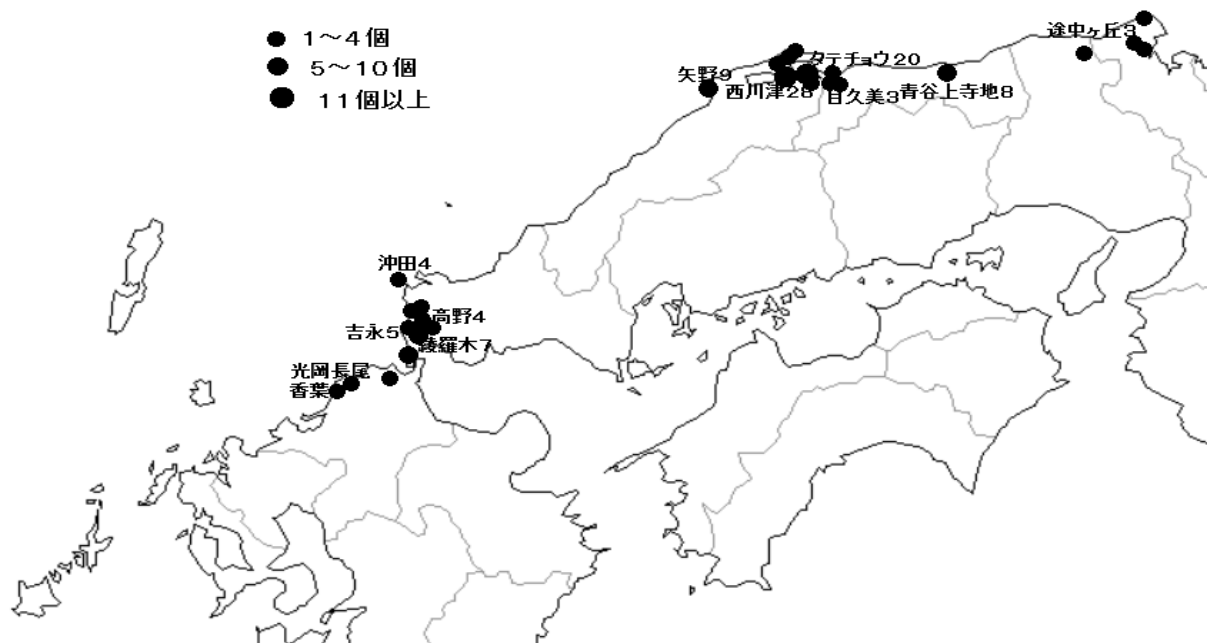


図 22 弥生時代の中国系土笛（陶埴）の出土状況（第 3 報の図 2 を再掲）

博多平野では縄文人と渡来人の共住が進み、最初の弥生土器が生まれた。しかしこの飾り気のない板付Ⅰ式土器は、まだ縄文文化の中にいる人々には馴染めなかった。ところがこの土器が今川遺跡に来ると、東北地方の縄文土器風文様を持った板付Ⅰb式土器に変化し、すぐムナカタに広がる[132]（注）。ここでは渡来人と縄文人との混血が進み、「弥生人」が生まれていたのである。この「遠賀川式土器」は縄文文化の中にいた東方の人々にも圧倒的に支持され、これを真似た土器が水田稲作とともににはるか津軽にまで 普及した（図 23）。



図 23  
遠賀川土器の成立と弥生文化全国普及  
(遠賀川式・遠賀川系土器については佐々木高明[133]を参考)

こうして、地方によって温度差はあるが、異文化へのアレルギーなしに、ほぼ全国が弥生文化に染まっていった。このような現象は、他国ではほとんど見られない。これも縄文時代以来の、海人族を媒介とした全国的文化交流があったからである。特に宗像海人族の果たした役割は大きかった。

異文化受け入れに慣れているムナカタは、その後も有力な渡来人グループの受け入れ先になる。日本を動かす大氏族の1つとなる出雲族も、まずムナカタに入って山陰地方に向かうが、ムナカタには田熊石畑の基地を残していた。その出雲族が、宗像とのつながりを表象する神として祭ったのが、タゴリ（田心姫）であった。タゴリは遠方にも出雲神と共に進出する。

#### （4）邪馬台国連合との関わり（第4報参照）

---

紀元前1・2世紀には唐津湾から博多湾岸地域にかけて、いくつかの「クニ」が成立する。その人達は、亡くなった人を大きな甕に入れて埋葬するという独特の文化を持つ。この「甕棺文化」は、西方長崎県と南方熊本県方面には広がったが、東方は古賀市辺りで止まってしまい、ムナカタには入らなかった。

しかしムナカタには、1墓域では日本最多の15本もの武器型青銅器を出した田熊石畑遺跡に見られるように、甕棺文化地帯に劣らぬ先進文化が入っていた。中国式土笛などで代表されるその文化要素は、ムナカタを起点に主に日本海沿岸を通して次々と東方へ普及する。

弥生時代後期に入ると、甕棺文化地帯の国々が成長し、博多にあった奴国などが中国に遣使するまでになる。甕棺の風習は南東方向へは日田市付近に達した頃終息したが、甕棺文化圏は大型武器型青銅器による祭祀圏に引き継がれ、幅広の銅矛が周防灘から海を越えて四国中部までに及ぶ。しかしムナカタを含む北東九州は、依然として同文化圏とは一線を画していた。これは出雲文化圏とのつながりが強かったためと思われる。

2世紀終わり頃中国混乱の影響を受けて銅矛文化圏内で争いが起き、邪馬台国の女王卑弥呼が北東九州を除く30ヶ国の盟主となった。邪馬台国の位置については多くの議論があるが、「魏志倭人伝」を見る限り豊前南部宇佐の辺りにあったと考えられる（第4報参照）。これまでと同様ムナカタは、邪馬台国連合の東進を阻む壁であり続けたが、同連合と争いを起こすことはなかったようである。これは出雲族と並ぶ古代有力氏族の物部族が両者の中間の筑豊地帯に展開していたためと考えられる。物部族は、出雲族と同様、祖先の渡来以来宗像海人族と縁が深かったようである。

邪馬台国連合有力国の支配者層は中国の銅鏡への嗜好が強かったので、中国事情に詳しい卑弥呼を共立することにより、中国・朝鮮半島の混乱で入手が難しくなっていた銅

鏡などの文物の導入を図ったものと思われる。世はすでに鉄器時代に入り、朝鮮半島南部の鉄を巡って奪い合いの状態になっていた。連合の成立は、対馬―壱岐を通る鉄の輸入ルートを強固にする目的も大きかった。

この時期寒冷化により現在の宗像市域には船が入らなくなり、海人族の本拠は遠賀川河口付近に移ったと思われる。この地域と筑豊・豊前には朝鮮半島との独自の交流ルートにより、鉄器や銅鏡が豊富に流入していた。鉄器はまた、鉄器はまた日本海経由で、山陰から北陸へ、さらには中部地方や関東北部まで到達していた。これには縄文時代以来広域交流の担い手であった宗像海人族の寄与が大きかったものと思われる。

### （５）沖ノ島祭祀と覇権交代（図 12・13・14 参照）

---

壱岐―対馬ルートを支配し朝鮮半島からの鉄輸入の主導権を握った邪馬台国連合に対し、日本海経由の鉄流入は相変わらず続いていた。その輸入ルートは、対馬東岸から沖ノ島経由で響灘方面に向かうものであったと思われる。「海北道中」は、「鉄の道」だった。九州の響灘沿岸からは豊前北部に出て瀬戸内方面に向かうことはできたが、多島海の瀬戸内では群小海人族が割拠していて貴重な物資の運搬に危険であったため関西方面中枢部（後の畿内）は相変わらず鉄欠乏域となっていた。

ムナカタで始まった西日本の施朱は、有力者達の葬儀に欠かせないものになっていた。九州では、はじめ各地で朱が採取できたが、多くの場合河床に溜まった辰砂の採取であったため、資源はすぐ枯渇した。出雲族は伊勢の朱を狙って木津川を遡りヤマトの宇陀に入り豊富な朱を発見し、物部族は中央構造線に沿って東進し紀ノ川沿いにヤマトに入りこれを知った。この朱に対し物部族が、やがてその兄弟氏族の天孫族が主導権を握る。かれらは朱を各地の豪族に提供することにより歓心を獲得する。さらにその富で中国人の鏡工人を招聘し、鏡を作らせる。なかでも三角縁神獣鏡は大ヒットした。

朱と鏡に靡いた各地の豪族の首長は、ヤマトの云うことを聞くようになった。そこで彼らをまとめて安全な瀬戸内航路を開き、出雲が支配していた沖ノ島経由の鉄を瀬戸内に引き込むことに成功した。ここれを周知徹底するため西暦 300 年前後に焦点の沖ノ島で会盟を行い、神に捧げものをして結束を誓った。記紀のウケイ神話はこの誓約を反映したものと考えられる。神話の解析と祭神解析から、この祭祀に直接参加したのはヤマト勢力および出雲勢力の代表と、輸送に直接携わる氏族の代表であったと考えられる。

それでもしばらくは博多湾勢力が鉄貿易の主導権を握っていたが、ヤマトは出雲を従わせて得た玉に加えて、自ら開発した石製や青銅製の祭具や、朱と鏡にものを言わせて得た南島の貝など交易品を取りそろえ、貿易の主導権を奪っていった。

決定的だったのは、朱から得る水銀が朝鮮半島で装飾品の金メッキに使われるように



なったことと思われる。朱をも鉄の対価とすることで、ヤマトは貿易戦争での勝利を確実にし、全国に覇を唱えるようになった。

## (6)「騎馬の道」として復活した「海北道中」(図 16・17 参照)

博多湾勢力が衰退すると、危険を伴う沖ノ島航路より壱岐経由のルートがメインとなり、沖ノ島祭祀も滞りがちになる。しかし 5 世紀になると朝鮮半島北方の高句麗に押されて新羅が南下し、加耶や百済の日本の権益を侵すようになる。このため 5 世紀後半から日本はたびたび半島に出兵するようになった。このころ馬が大いに増殖し、やがて騎馬兵を送り込むようになる。このとき出征の兵站基地になったのが、ムナカタだった。

ムナカタから陸地を西行するのは、沼沢地が多く馬は通りにくい。そればかりではなく、ムナカタの西隣には出兵に消極的な筑紫君磐井の兵站基地がある。それに馬を船に乗せる回数は、少ない方がよい。1 航海の距離は長いが、沖ノ島経由なら回数は少ない。この頃また海進期に入っていたため釣川流域は深くまで入り江となり、絶好の港になっていた。

こうしてムナカタには一時的に馬を置く牧が何カ所もできた。そこで祭られた牧神社が、いまでも海岸沿いに残る。多数の人馬が集結し出航を待つことになるので、水・食糧の供給と航海でそれらを入れる器が要る。船大工も鍛冶屋も必要だ。武具や食糧を保管する倉庫も要る。ムナカタは軍港都市となり、釣川流域の丘陵は 2 千の墓で埋め尽くされた。その中には出兵した人々の墓もあったであろう。優秀な造墓工人団もいた。

527 年磐井が大和朝廷に逆らい翌年殺されると、ムナカタの勢力は古賀市まで広がり、そこからも壱岐経由で半島へ向かうようになったらしい。

## (7) 壬申の乱とそれ以降

663 年の白村江の敗戦で朝鮮出兵は終わりを告げ、日本は国内整備に向かう。鉄の国内生産も盛んになって、輸入の必要はなくなった。渡海航路に専念させられていた宗像海人族は、活躍の場を失う。沖に漕ぎ出せる海人がほとんどいなくなり、沖ノ島祭祀も終焉を迎える。ムナカタを統括していた出雲系の胸肩君も、ヤマトとの交流が多くなった。胸肩君徳善の娘<sup>あまこのいらつめ</sup>尼子<sup>おおあまのみこ</sup>娘が、大海人皇子に見初められ高市皇子<sup>たけちのみこ</sup>を生んだのはそんなときだった。

壬申の 672 年、大海人皇子（後の天武天皇）の兄天智天皇が亡くなりその子大友皇子が継ぐと、大海人皇子は政権に反旗を翻し吉野から東に向かった。このとき近江の朝廷から駆けつけた弱冠 19 才の高市皇子は、総大将となって近江朝廷を滅ぼした。高市がこ



の戦後処理を任され、右大臣の中臣連金<sup>なかとみのむらじかね</sup>を斬らせたことが、後の不幸を招いたようである。金は、大化の改新で大功のあった藤原鎌足の後を継ぐ中臣家の氏上だった。

天武の最年長の皇子で大功があった高市も、皇位継承順位は 8 番目に過ぎなかった。天武の皇后菟野皇女<sup>うののひめみこ</sup>の子の草壁皇子が皇太子となり、天武の死後は若い草壁に代り菟野が政務を執った。ところが草壁が早世したので、菟野が即位して持統天皇になった。持統は草壁の遺子首皇子<sup>おびとのみこ</sup>が 14 才になると譲位したが、太政大臣になっていた高市が都合よくその前に亡くなっていた。毒殺説もある。そののち高市の長男長屋王も、左大臣になっていたにもかかわらず、誣告を受けて藤原不比等（鎌足の子で右大臣、すでに死亡）の子の四兄弟らに死に追いやられた。ところがその後四兄弟は、天然痘で立て続けに死んでしまう。

後年藤原氏を率いていた左大臣藤原冬継は、平安京皇居近くの自邸内に宗像神を守護神として祭り、摂政・関白に昇るその子孫もこれを引き継いだ。高市父子の怨霊を恐れたためであろうか。

ムナカタの地政的価値がすでに失われていたにもかかわらず、京と筑紫の宗像神が急速に昇階し、宗像朝臣が宗像大宮司に補任されるのも、このようないきさつがあったためと考えられる。

このあとも宗像神社と大宮司家は、藤原氏とのつながりを頼りとして中世の動乱に立ち向かう。

## [附編 2] 神々に関する文字史料の評価および神と神話の再検討の方向

祭神解析とこれによる歴史理解には、祭神の正しい認識が必要である。神々が登場する史料には、明らかに後世の修飾が加わったものや、互いに相容れないものもある。

本研究では、上古以来のさまざまな文字史料について、この見地から採用の可否を判断している。このため史料引用に偏りがあるように見られる恐れがあるので、重要な文字資料について評価をまとめておく。

### (1) 金石文

---

文字資料として基も古いものに、石碑や金属器に彫られた文字がある。これらに神名が記されている例は知られていないようであるが、埼玉県稲荷山古墳出土鉄剣や熊本県江田船山古墳銀錯銘大刀の銘文[134]からは、5世紀後半には関東から九州までヤマトの大王の権威が確立していたことや、少なくとも雄略天皇が実在の大王であったことが分かる。また地方においても氏族長が父系で継承されていたことも確認できる。

### (2) 木簡

---

近年木簡の発掘が進んで古代史に新しい光が当てられている。浜松市<sup>かじこ</sup>梶子遺跡では、祝詞の原稿と見られる木簡が発掘された。それには六柱の神の名が列挙されていたが、判読できたのは「耶間祇命」のみであった[135]。これはヤマツミノミコトと読んで神代紀第五段第六の一書に山神山祇<sup>やまのかみやまつみ</sup>として現れる神と考えられる。表記が異なるのは、『書紀』の普及以前から神名が口承で伝えられてきたことを示すものであろう。

### (3) 古代史書

---

#### ①『日本書紀』

天武天皇 10 年（681）編纂開始（注 23）、養老 4 年（720）撰上。

30 巻からなるが、巻 1 と 2 が神代を扱いそれぞれ神代紀上と神代紀下と呼ばれる。以下主としてこの 2 巻について特徴を説明する。

神代紀には一書（異説）が多く記されているのが特徴である。各段ごとに一書の数を示す。

[神代紀上]

第一段 6、第二段 2、第三段 1、第四段 1 1、第五段 1 1、第六段 3、第七段 3、  
第一段 6。

[神代紀下]

第九段8，第十段4，第十一段4。

以上の他にも、時々「一に曰く」として異説が示されているところがある。

一書は本文の全体に対する異説になっている場合と、その一部に対する異説になっている場合とがある。本文同士ではストーリーが繋がるが、ほとんどの異説同士ではストーリーが繋がらない。従って本文だけを見れば混乱なく文脈を辿ることができる。従って本研究では、原則として本文のみを参考にした。ところが、一般に各一書が単独で引用または利用されることが多い。たとえば第五段第六の一書には、イザナミの死と、イザナギがその死体を見て逃げ帰り川でみそぎをしたときにアマテラスなどが生まれることになっている（そのほかにも多くの神が話の過程で生まれる）。これは全く本文の内容と食い違うが、これが神社参拝時の清めの作法などに残っている。

現在伝承されている祭神の多くが『書紀』に記される表記で示されているので、神代紀は神についての最も基本的な文献である。ただしそれらの神の現れる文脈は、必ずしも実際に祭られていた状況に即しているとは思えない。特に古層に属すると思われる神ではひどい例が多い。

たとえば神代紀第五段第四の一書では、イザナミが火神軻遇突智<sup>ひのかみ かぐつち</sup>を生むとき苦しんだ時の嘔吐物が金山彦<sup>かなやまびこ</sup>となり、小便が罔象女<sup>みづはのめ</sup>（以下ミズハノメ）となり、大便が埴山姫<sup>はにやまひめ</sup>となったと書かれている。他にも第五・第六の一書にこれに似たバリエーションが紹介されている（ただし第五段本文にはこのような異常な説話はない）。第2報で考察したように、ミズハノメは日本全国に広く祭られている水神であり、起源はもちろん『書紀』成立より古いと考えられ、金山彦は現在も全国700社以上に祭られる製鉄等に関わる神で、埴山姫（第六の一書に埴安神）も甕棺葬文化に関わる神と推定され弥生文化の発祥地九州北部で集中的に祭られる神である。重要な民間神をこのように異常な説話で紹介するのは、新来の「天神」に対してそれ以前から祭られていた「地祇」を貶める目的があったとしか考えられない。

『書紀』成立については、森博達の綿密な文体解析と考証[10][11]により、その経緯の推定が可能になってきた。森によると同書は、基本的に正調の漢文で書かれた部分（14巻雄略紀～21巻用命・崇峻紀までの $\alpha 1$ および24巻皇極紀～27巻天智紀までの $\alpha 2$ ）と、残りの稚拙な「倭習」の文章で書かれた部分（ $\beta$ ）とにはっきり分かれる。前者は何らかの原資料があって、文章作成を学識のある中国人（該当者が2人『書紀』に見える）に委嘱したと考えられる。天武紀に天武10年（681）に天皇が川嶋皇子以下12名に帝紀および上古の諸事の記定を命じ、そのうち最も下位の中臣連大嶋<sup>なかとみのむらじおおしま</sup>（不比等の従兄弟<sup>へぐりのおみこびと</sup>）と平群臣小首<sup>みず</sup>が親から筆を執ったと記されている。しかし両名は中国語に堪能で

はなかったようで、実際の文章化は中国人が行ったらしい。ところが全資料の提供が間に合わないうちに、2人の中国人は書ける状態ではなくなった（おそらく亡くなった）ようである。本文に述べたように、残りの部分は文武朝（697-707）以降当時最も中国文に堪能と考えられていた2人の下級官吏が担当したが、内容は当時の編纂者のうち最高位（右大臣）の藤原不比等の意向に従って書かれたと考えられる。それは、正調の漢文で書かれた部分にも倭習による加筆がかなりあり、それが天智天皇や不比等の父鎌足を律令国家樹立の英雄とした部分や、その伏線として聖徳太子とその子孫を礼賛する部分に集中しているからである。不比等は文武の舅でもあり、朝廷を実質的に牛耳っていたとされる。

ところが養老4年(720)編纂作業途上で不比等が病に倒れ、不比等はこれまでの努力を無にしないため未完成のままでの撰上を命じたらしい。舎人親王が『日本紀』を奉上げたのが同年5月で、不比等はそれを見届け8月に亡くなっている。このため特に重要と考えられた上記加筆部分以外は、未完成のままになっていると考えられる。

神代紀は、はじめから日本人が担当して書かれているので、改変が加えやすかった。しかも多くの一書から推察されるように、各氏族からその祭る神々の起源談が集まったと思われ、その整理がつかないうちに撰上されたようである。この諸案並立が後に神祇関連者を混乱させ、一貫したストーリーを指向する類書（偽書を含む）を生むことになった。

いずれにせよ上記森の「発見」から出発すれば、『書紀』の内容の解釈が大きく前進し、本来の神話と歴史の姿がより明確になるはずである。多くの一書がその解析の糸口を提供している。しかしそのような試みは現在のところ一般人の目にはほとんど入らない。それは下記の事情のためと思われる。

## ② 『古事記』

（自称）和銅5年（712）撰上。ただし『続日本紀』<sup>しよくにほんぎ</sup>の該当年に記載なし。

第3報で「ウケイ」神話について『書紀』の各節と比較して『古事記』の叙述の問題点を指摘し、古事記が『書紀』より先に書かれたことへの疑義を述べた。また第1報などで、近世に到るまで神名を古事記風に表記した例がほとんど見られないことを見てきた。

そして本報で神代紀のウケイとその前後の神話の解析から、これら神話の主要部分が最終編纂時に改変あるいは創作されたと考えられることを述べてきた。そうすると『書紀』撰上の8年前に提出したと称する『古事記』がほぼ同様のストーリーを記すことの説明がつかない。『古事記』が『書紀』の内容をピックアップしてなぞっているとしか考

えられない。しかしそれは『古事記』が『書紀』より前に書かれたことを否定することになる。

『古事記』が他の文献に現れるのは、<sup>こうにん</sup>弘仁3年(812)の『弘仁私記』の序が初めてとされる。同年に太安万侶の子孫の<sup>おおのひとなが</sup>多人長が日本紀(日本書紀のこと)の勉強会の講師を務めて『古事記』の存在を紹介したことが記されている。ただし、『弘仁私記』の序そのものが、その内容から後から付け加えられたものではないかと疑われており[136]、そうすると『古事記』自体がさらにそれ以降に作られた可能性がある。『古事記』成立に関するこれまでの議論は、大和岩雄氏の『新版 古事記成立考』[137]に詳しく述べられているので詳細は省く。

内容についても、これまで触れてきた神話群のみならず、腑に落ちないことが多い。これまでも多くの指摘があるが、誰もが気づく点を列挙する。

#### (イ) 後年ほど記述が少なくなる疑問

史書は、『書紀』のように、記録が多く残り記憶も鮮明な後代ほど詳細であるのが普通である。ところが『古事記』は神世が最も詳しく、第23代<sup>けんぞう</sup>顕宗天皇までは治績や逸話等の記載があるが、それ以降はおざなりで形式的な記録にとどまる。この間あったはずの蘇我-物部戦争や、崇峻天皇の暗殺事件、聖徳太子の事跡、隋への遣使などの件には、一切触れられていないのである。

そして記述は33代推古天皇で終わってしまい、舒明以降の上宮家の滅亡、大化の改新、壬申の乱などの大事件についても触れていない(序文には壬申の乱が抽象的な表現で出てくる)。

その疑問を説明できる唯一の理由は、この書が『書紀』の後で作られた、ということである。すなわち、『書紀』の記述に対して異論がある箇所については詳しく書いたが、記録に基づいて書かれ特に異論を唱えようのないところは、重複して書く必要がなかったか、あるいは書く気がしなかったのではないか。

#### (ロ) 神と氏族の数が『書紀』より大幅に増加する疑問

『古事記』は『書紀』の約三分の一の長さであるにもかかわらず、登場する神と氏族の数が、前者は後者よりかなり多い。

神の数を見ると、『書紀』本文では66神、別伝を入れても181神であるのに対し、『古事記』では267神である。しかも『書紀』にある神のうち69神は『古事記』にはない。すなわち、『古事記』には『書紀』にない152神が付け加えられていることになる(上田正昭[138]による)。

出自やその由来を明らかにする氏族の数は、『書紀』の 108 氏に対して、古事記は 201 氏である。そのうち両書とも記載する氏は 56 氏で、『書紀』のみが載せる 52 氏に対して、古事記のみに現れる氏族は 145 氏である。

これらは『書紀』以降の増加を補ったものとししか考えられない。

#### (ハ) 追加された神々が平安時代以降にしか文献に現れない疑問

『書紀』に対し追加された神々を見ると、明らかに歴史的に新しいと考えられている神・氏族が目につく。特に渡来系と思われるものが多い。

一例を挙げると、『古事記』にスサノオの子とされている大年神<sup>おおとしのかみ</sup>と、その神裔 24 神は、『書紀』には現れない神々である。子神のはじめに書かれている 5 神のうちに韓神<sup>からのかみ</sup>・曾富理神<sup>そほりのかみ</sup>・白日神<sup>しらひのかみ</sup>がある。これはそれぞれ加耶（加羅）・ソホル（ソ＝鉄の都を表す古代韓国語で、大韓民国の首都ソウルと同語源）・新羅（元もとシラが国名であった）と対応する神名であり、加耶系または新羅系渡来人が祭った神であることは間違いないと思われる。これらの神は、延長 5 年（927）成立の延喜式神名帳<sup>えんぎしきじんみょうちょう</sup>に宮内省坐神三座<sup>くないしょうにいます みようじん</sup>（明神大<sup>だい</sup>）として挙げられている園神<sup>そのかみ</sup>と韓神（二座）に当たる。

これらの神々は、いずれも民間にはほとんど祭られることのない神である。全国では主に渡来人の多い東日本に韓神が 7 社（1 社は園韓神）、園神が 2 社で祭られているに過ぎない。日本古来の神ではない事は明白である。

これらの神が古事記以外の文献に現れるのは、『日本文徳天皇実録』（後出）の嘉祥 3 年（850）以降である。この時点では神階を持っていなかったが、その後急速に昇格し貞観元年（859）正三位に昇っている。

これらの神が宮中に祭られたのは、平安時代百済系渡来人の女性高野新笠<sup>たかののにいがさ</sup>が光仁天皇の側妾になって生んだ桓武天皇（在位 801－806）以降と考えられる。宮中神のうちでも神産日<sup>かみむすび</sup>・高御産日<sup>たかみむすび</sup>など他の主な神々は、『書紀』にあるほとんどが『令集解<sup>りょうしゅうのげ</sup>』（757）や『続日本紀』の 730 年代の記録などにすでに現れている。

比叡山の日吉大社の地主神とされる大山咋神<sup>おおやまくいのかみ</sup>も、大年神の子とされている。これも『書紀』にはない神である。平安京遷都後比叡山が京の鬼門に当たるとして崇敬されるようになり、さらに最澄の比叡山延暦寺開創以来この神の重要性が増したため、『古事記』で追加したものと思われる。出雲系としたのは、オオアナムチが西本宮の神として三輪山から勧請されていたことが背景にあるためであろう。この神は京都の松尾大社<sup>まつのお</sup>の主神でもあり、おそらくこの社を氏神とする秦氏の影響があると思われる。同社が公式文書に見えるのは、『続日本紀』の天平 17 年（745）が最初である。



## (二) 序と本文のミスマッチの疑問

これは古来多くの研究者が指摘されているところで、ここではそれを繰り返さないが、文体も内容もあまりにも違うことに誰もが驚かされる。

### (ホ) 序の文章の疑問

序は一応まともな漢文で書かれている。しかし 8 世紀初めの時点で、このようなまともな漢文を書ける日本人はいなかったようである。古代の漢詩を集めた『懷風藻』に納められている、養老以前 (717 以前) の当時最高の知識人の作でも、中国詩の文句のつぎはぎの程度であった (小島憲之[139]による)。

前述のように、当初『書紀』の文章化を担当した中国知識人のあとを継いだ日本人官僚の中国語文章力は、ひどいものであった。当時最高の知識人を集めた国家的事業でも、このような状態であった。ましてや、文筆を専門としていない中級官僚 (最後は租税や地券を扱う民部省の長に昇進した) の太安万侶に、こんな漢文が書けたはずはないのである。もし彼にそのような能力があったのなら、一も二もなく『書紀』の編纂に引っ張り出されたであろう。

### (ヘ) 万葉仮名の疑問

本文は変体漢文で書かれているが、固有名詞や歌謡などはいわゆる万葉仮名で書かれている。ところが万葉仮名は 8 世紀初めの時点では確立してはいなかった。序を信じると、太安万侶は、新しい表記法を独力で「創造」したことになる (小林芳規[140]による)。

国語史の専門家も、『古事記』の表記が多くの点で進歩しすぎていることに疑問を持っている。たとえば、「ト」にたいして登または等を当てているが、これは中国の音の変化に応じて平安時代に用いられた字で、8 世紀初めでは止が一般的であるという (犬飼隆[141]による)。

このような超人的な仕事を、太安万侶は単独で完成したというのである。民部省の役人の仕事とは、そんなに暇があるものではないであろう。

### (ト) 連濁の疑問

『古事記』には、宗像三女神が<sup>たぎりびめ</sup>多紀理毘賣、<sup>いちきしまひめ</sup>市寸島比賣 (またの名<sup>さよりびめ</sup>狭依毘賣)、<sup>たぎつひめ</sup>多寸津比賣と書かれている。他にも<sup>たまよりびめ</sup>玉依毘賣という例もあるので、前の音がラ行の時に連濁するようである。この連濁は、現在の日本でも違和感がある。日本語は本来連濁をしない言葉であったというが、現在は連濁をする場合が多くなった。しかしタギリビメ (タゴリ)

のようなケースを濁る人は少ないであろう。

周知のように現在の韓国語では、語のはじめに置かれると清音の字も、語中ではすべて濁音になる。そのため釜山<sup>ぶさん</sup>を buzan と表記する。中世以前の韓国語の歴史はよくわかっていないようであるが、古代は日本語と同様連濁は少なく、常に連濁するようになったのは中世であるという。

いずれにしても上古の日本人が書いたものとは考えにくい。

### (チ) 祭神解析からの裏付け

祭神解析の結果も、『古事記』独自の神名が伝統的に採用されてこなかったことを示す。『古事記』形の表記は江戸時代以前の文献にはほとんど見られない。これは『古事記』の普及が遅かったからだけではない。たとえば江戸時代初期の貝原益軒著の『筑前国続風土記』には宗像神の説明で『古事記』の表記も紹介されているが、この表記がそれ以外の神社の紹介で出てくることはない。その後の筑前の2地誌でも同様である。『拾遺』を撰した青柳種信は国学派の学者であったが、それでも『古事記』形の表記を記すことはない。

現在神社の祭神名にある『古事記』形の多くは、明治の神祇制度改革時にその担当となっていた国学派の役人が押しつけたものであるらしい。それがよく分かるのは八王子神の表記である。第1報で述べたように、この神は近世まで非常にポピュラーであった祇園信仰の主神牛頭天王<sup>ごず</sup>の8人の子を意味する。これがすべて神仏混淆の排除により、宗像三女神と同時に生まれた五男神とを併せた8神にすり替えられた。たとえば『書紀』に天穗日命<sup>あまのほひのみこと</sup>、『古事記』は天之菩卑能命と書かれる五男神の一柱を見ると、後者を祭神の名に持つ130社のうち96%の125社が八王子系社である。

なお『古事記』には『書紀』にない神話（特に出雲神話）や歌謡が付け加えられており、それにもある程度の歴史的価値があるであろうが、それも実際に記述された年代を考えて適正な評価を行うべきであろう。これらの多くは、むしろ文学的に評価されるべきかもしれない。このような文学的な味わいが、多くの「古代のロマン」好きな人々を『古事記』に引きつけてきたと思われる。本居宣長もその一人と言えるのではないか。しかし歴史は、単なるロマンであってはならない。あくまでも史実再現の努力を結集したものでなければならないのではないか。

『古事記』は、藤原氏中心史観の日本書紀の記述に不満を持ち、自分の祖先の歴史的な重要性をアピールするために後年作られた修正史書の一つと考えられる。そのなかでも『古事記』は、これに加えて、身近にいた渡来系の人々や、比較的由緒の新しい神を信

ずる人や、由緒の新しい氏族の希望を大幅に取り入れたのが特徴となっている。

同様な史書には、後述の『先代旧事本紀』と『古語拾遺』がある。『旧事本紀』の序文に蘇我馬子が聖徳太子の意を受けて編纂したとあり、これが近世に疑われて偽書とされていたが、最近また内容に歴史的価値があることが認められて来たようである[142]。

ところが『古事記』の場合は、その序文が実在した太安万侶を使って巧妙に仕組まれているため、近世になって本居宣長らが完全にだまされてしまい、今でも日本の学界はそれをほとんどそのまま受け継いでいるようである。特に、戦前迫害を受けたため戦後になって多くの歴史家が信奉するところとなった津田左右吉の『日本古典の研究』（岩波書店）が、『書紀』の記述は『古事記』を模倣し、敷衍・改竄したものであると断定したため、日本書紀をまともに取り上げない歴史家が大勢を占めているようである。

『古事記』の成立が『書紀』よりかなり後であることがわかってしまうと、これまで歴史家が積み重ねてきた多くの業績が深刻な修正を迫られ、価値を失うものも多いと考えられる。そればかりでない。教科書も、中学校から改訂が必要になる。これらが、強力な「古事記タブー」が定着している理由であろう。

しかし、これを放置しておいては、古代史の解明は進まない。『古事記』の712年成立を盲信することの最大の罪は、『古事記』の記述との食い違いから『書紀』の内容を曲解することにある。『古事記』の歴史的事実記述の部分は、『書紀』のきわめて簡略で不十分なダイジェストになっている。そして『書紀』の内容に関する思い違いも多い。

『書紀』が政治的目的で大きく修飾されていることは事実であろう。しかし古代の史書のほとんどは、多少の修飾を受けている。史料批判でそれを明らかにするのが歴史家の仕事であろう。その手がかりになるのが、先に述べた森博達の言語学的解析ではないか。中国人の記した部分に日本人の修正があると文体ですぐわかるという。森も、『日本書紀』そのものが、さらに広くしかも深奥に達するまで読解されるのを待っているように思われる」と述べている[143]。

しかしこのような手法で『書紀』を解析したまとまった業績は、それから30年以上たっても、我々一般人の目に触れていない。

### ③日本書紀以外の六国史（『続日本紀』、『日本後記』、『続日本後記』、『日本文徳天皇実録』、『日本三代実録』）

第42代文武天皇元年(697)から第58代光孝天皇の仁和3年(887)までの国家の正史であり、いずれもほぼ同時代史であるからおおむね事実に基づいて書かれていることは間違いないようである[144]。第3報で紹介したように、神と神社に関する記事は、『書紀』も含め岡田莊司ら作成のデータベース[145]で検索できる。

#### ④『古語拾遺』

（自称）大同2年（807）撰上。ただし関連記事が『続日本紀』・『日本後記』などに載るので[146]、この撰上年はおおむね信用されている。

同書は、平城天皇の朝儀についての詔問に答えて、祭祀関連氏族の斎部広成が、忌部氏の古来の役割について撰上したものである。祭祀における中臣氏の専横に対しての憤懣をぶちまけた内容である。ここに天地開闢から始まる歴史が簡潔に述べられているが、記紀神話とかなり異なる点がある。アマテラスとスサノオとのウケイ（約誓）はあるが、生まれた子として吾勝尊（オシホに当たる）のみしか書かれていない。三女神は見えない。『書紀』に書かれたウケイ神話は、必ずしも当時一般に伝えられていた内容ではないことが分かる。

#### ⑤『先代舊事本紀』（以下『旧事本紀』）

成立時期は、序を除いて、平安初期と見られている（以下鎌田純一[147]による）。編者は明らかではない。物部氏関係の記事が詳しいことから物部氏関係者との説が多いが、必ずしも当たらない点もあるという。神話の概要や登場する神々は『書紀』を承けているところが多い。物部氏と出雲氏の系譜が詳細に記されているのが独自の点の一つで、この系譜は後に挙げる古系図とよく一致している。なかでもニギハヤヒとニニギが兄弟であり、ニギハヤヒがホアカリと同一神と記されていることは他の伝承にもあり、『書紀』本文等における改竄を示唆する。

他書にない「ニギハヤヒ東遷」が詳細に記されていることも重要で、ここにニギハヤヒに従った32神が見える。これらの神はそれぞれ各地で祭られていて、信仰の実体がある。32神すべてを祭る神社も秋田県と香川県に各1社ある。また神代紀第七段第1の一書に載る和歌山市の日前・国懸神宮は、32神のうち30神を末社に祭る。

また全国の国造<sup>くにのみやつこ</sup>の由緒が記されているのは、他史料に見られない貴重なものである。宗像神関連では、関東地方に「思国造」が記されているが、これは「田心」がつづまって書かれたための誤りであることは、近辺に三女神の一にタゴリに代えて「思姫」を記す神社があることから分かる。これが栃木県を流れる思川の語源になっている。このことは、栃木県に強く残るタゴリ信仰（第1報）が古代に遡ることの証明になる。

#### (4) 古代の公式文書とこれに準ずるもの

##### ①<sup>しんせんしやうじろく</sup>新撰姓氏録

弘仁6年(815)に嵯峨天皇によって編纂された古代氏族名鑑で、京と五畿内に住む姓氏に限られているが、古代人の神への意識を知ることのできる重要な史料である。天皇家から分かれた「皇別」の335氏は別として、最大の「神別」には404氏が示され、全てその先祖の神名が記されている。比較的来日の新しい渡来人は「諸蕃」326氏としてその本国での祖先が記されている。『書紀』などで確認されない117氏は「未定雑姓」とされているが、おおむね上のいずれかに分類される祖先が記されている。

神別はアマテラスの住む高天原の神である天神265氏、アマテラスの子孫の天孫109氏、土着の神の地祇30氏に分類されている[148]。神別のなかで最大の系統はニギハヤヒを祖とする物部系であることは本文に記したが、『書紀』でニギハヤヒとホアカリが別神と書かれているため前者は天神、後者は天孫となっている。そのほか以下のような点が指摘できる。

- ・本来日本に多かったと思われる地祇を祭る氏族が少ないのは、自らが祭る神を祖先として考えていなかった人たちが多かったからであろう。畿内にも多く祭られているイチキシマなど宗像神が見えないし、本研究で見てきたハニヤス神、ミズハノメ、オカミ神なども見えない。『新撰姓氏録』自体が記すように住民の過半数が申告していないのは、祖先神を奉じる慣習のない人々が多数を占めていることを示唆する。『書紀』で地祇に属する神々が非常に貶められた記述されていることとも影響しているであろう。
- ・地祇のなかでもオオナムチ（大国主）系は堂々と名乗っており、宗像氏も大国主の六世孫阿田片隅命の後として右京に宗形朝臣、河内国に宗形君が出ている。そのほかに神武のヤマト入りに協力した椎根津彦や日向神話に出る綿積神も地祇の祖先として出る。
- ・上記宗形氏で見るように、本来地方に住む氏族でもその代表または枝族が畿内に住んでいることが多い。畿内はある程度まで古代社会の縮図になっていたと言えよう。

##### ②延喜式神名帳

<sup>えんぎ</sup>延喜5年(905)編纂が開始され延長5年(927)に完成した格式(律令の施行細則)「延喜式」の中に、官社に指定された全国の神社2861社(祭神3132座)の一覧である<sup>じんみやうちやう</sup>神名帳がある。これには祭神は記されていないが、社名から祭神が分かるかあるいは推測できる神社が多く、古代に祭られていた神を知る目安になる。本文に記したように、

この時点でアマテラスを祭っていた神社は伊勢神宮以外に無かったらしく、現在最多の八幡神を祭る神社も豊前・筑前の2社以外には見えない。

式内社は、その性格上五畿内とその周辺に多く、地方には少ない。東北は南部に限られるが、その中にも陸奥国に安積郡<sup>おいつしま</sup>隠津島神社がある。これは論社が3社あっていずれとも決めかねるが、いずれも福島県内にある。延喜式神名帳にはこのようなオキツシマまたはオイツシマを含めて宗像系神社が11社あり（第1報）、これに現在宗像神を祭る神社を加えると25府県に56社となる。古くから全国的に祭られてきた神であることが分かる。

### ③<sup>のりと</sup>祝詞

榎村寛之の要約によると[149]、「7世紀後半に成立したらしい宣命体を用いて、祭りのときに神に捧げる言葉を綴ったもの」で、基本史料は、『延喜式』の『神祇式』に含まれる28編の祝詞（延喜式祝詞）である。その成立時期は、①令制以前（記紀以前）②大宝令制定以前（記紀神話対応）③平安初期の3段階が想定されるという。

興味深いのは、記紀神話とは異なる神伝承が記された古い起源を持つと思われる祝詞である。その代表は『<sup>みなつきのつごもりのおおほらえ</sup>六月晦大祓』（以下大祓詞）で、登場する神は、いずれも記紀にない、「<sup>すめむつかむろき</sup>皇親神漏伎・<sup>かみろみのみこと</sup>神漏美命」（以下カムロキ・カムロミ）と「<sup>すめみま</sup>皇御孫之命」（歴代の天皇）、そして「<sup>はやあきつ</sup>瀬織津比咩」以下「<sup>いふきとぬし</sup>速開津比咩」「<sup>はやさすら</sup>気吹戸主」「<sup>は</sup>速佐須良比咩」の祓戸四神だけである。祝詞が『書紀』に出るのは、天智紀の9年に、「中臣連金が祝詞を宣る」と書かれているだけであるが、続く10年にもやはり中臣連金が「<sup>みことのり</sup>命にして<sup>かむごと</sup>神事を宣る」と書かれ、これもこの祝詞を読んだことを意味すると思われる。そして大祓詞の文言中に大<sup>あまつかなき</sup>中臣天金木の言葉があるので、中臣氏の代表中臣連金が大祓詞を述べたのではないか。

ここにはイザナギ・イザナミも、アマテラスも見えない。これが記紀神話以前の伝承であつたらしい。

カムロキ・カムロミは他にも6祝詞が皇祖神とする。うち6月の<sup>むつき</sup>月次の祝詞ではそのあとに<sup>かみむすび</sup>神魂・<sup>たかむすび</sup>高御魂以下の宮中八神とアマテラスも出てきて、過渡的な様相を示す。この部分はおそらく記紀以降付け加えたものであろう。

延喜式祝詞には、本来の祝詞ではない『<sup>いづもくにのみやつこのかんよごと</sup>出雲国造神賀詞』も含まれている。これにも記紀とやや異なる神の記述がある。詳細は省くが、ここにもアマテラスとスサノオが見えない。



#### ④ 古風土記

和銅5年(713)元明天皇の詔により各国庁が編纂した地誌であるが、一部の国しか残っていない。ほぼ完本で残るのは『出雲国風土記』のみである。

- ・『出雲国風土記』：奥付に天平5年(733)出雲国造編纂とある。

出雲国内の神と神社に関する貴重な記録となっている。神々については、『書紀』にとらわれない独自の神話を載せている(本文2. 2. 2参照)。

国内全神社399社をリストアップしているのが特に重要である。森浩一[150]が指摘したように、これは荒神谷遺跡出土銅剣の358本に近い。そして銅剣の各グループの数は、『出雲国風土記』の郡ごとの神社数に近い[150]。両者の数の差は、国府が置かれた意宇郡に中央から入った人々の祭る神社が加わったことでほぼ説明できる[151]。このことはきわめて重要なことを意味する。少なくとも出雲に関する限り、神と神信仰の体系が、弥生時代にほぼ出来上がっていたのである。旧出雲国に祭られる神社は、『平成データ』では641社である。詳細な解析は省くが、約半数が中世以降の追加と見られる。弥生時代の神信仰の姿が、現在の祭神解析でかなり推定できる可能性を示す。これはもちろん中世以降の人の移動が少ない地域にしか適用できないが、ムナカタもそのような地域に属すると思われる。

- ・他風土記はこじつけ的な地名の由緒説明が多くあまり信頼性が感じられないが、『播磨国風土記』に宗像の神が出るなど有用な情報が局部的に見られる。
- ・筑前の宗像神については、『宗像神社史』に記すように、風土記逸文として3種の伝承が知られている。そのうちの2種は宗像の語源に関するもので、第2報に記した。他の1つは胸肩の神体が玉であるというもので、上記の1と関連する。いずれも出雲との強い結びつきを示した伝承である。

#### ⑤ 諸国神名帳

各令制国の国司が整備し、国衙に備えていた各国の神社の表である(以下三橋健[152]による)。『延喜式神名帳』に載るのが中央政府が奉幣する神社であり畿内が中心であるのに対し、諸国の神社を知る上で貴重である。ただしそれが残っている国は少なく、ほぼ完全なのは『筑後国神名帳』だけである。これに現在は存在しない「宗形神」を祭る神社が8社記されていることを、第2報で述べた。このことから、宗像神は古代に諸国で現在よりかなり多く祭られていたと推測される。そのほか残る史料に載る社名から宗像神を祭ると判断される神社は、伊勢1社、尾張2社、上野<sup>こうずけ</sup>3社、美濃2社、丹後2社、備前2社、安芸3社の計15社である(これは神階が四位以上の神社であり、筑後国が記す五位以下の社は記載されていない)。これらはおおむね『平成データ』にある神社で、

ないものもほとんど各地の地誌で存在したことが確認できる。すなわち現在存在している宗像系神社の多くが古代から祭られてきたことが分かる。

## (5) 古系図

---

### ①<sup>あまべ</sup>海部氏系図・<sup>このじんじゃ</sup>海部氏勘注系図[153]

京都府宮津市鎮座の<sup>このじんじゃ</sup>籠神社の社家海部氏に伝わる系図で、貞観年中(859-877)成立と言われる。最古の部分は推古朝に遡るとされ、国宝となっている。

始祖は彦火明命で、以下物部氏の系譜が続き、途中から海部氏になる。物部氏の系譜は『旧事本紀』とほぼ一致する。

### ②<sup>おおみわあそん</sup>大神朝臣本系牒略・三輪高宮家系[154]

奈良県櫻井市の大神神社を祭る大神氏に伝えられてきた系図。編纂は寛政 3-11 年(1791-1799)であるが、延暦から延長年間に作成された本系図の内容が伝えられているという。大神氏は太田田根子を始祖とするが、この系図ではその祖先スサノオから記されている。おおむね『旧事本紀』にある出雲氏の系譜と一致する。

## (6) 中世以降の文書

---

これまでの報告で断片的に述べているので詳述を避けるが、本文に記した『神道五部書』について触れておく。

これは伊勢神道(度会神道)の根本経典とされ、鎌倉時代に度会行忠ら外宮の司官が書いたものと言われる。おおむね『書紀』の記述を援用しつつ、外宮の神を神代紀第一段第四の一書に「また曰く」として登場する天御中主尊とするのが特徴で、外宮の立場を内宮と同等以上と主張するのが狙いの書である。しかしその中にはアマテラスの荒魂をセオリツとするなどの古くからの伝承と思われる内容を含むことは本文に述べた。

宗像神とムナカタの神信仰については、幸いかなりよい史料が残っている。『宗像大菩薩御縁起』などの宗像大社文書[155]をはじめ、本文で示した江戸時代の3風土記などである。戦前の地方史には、明治初期の詳細な官製記録である「神社明細帳」の内容が転載されていると思われるものが多く、宗像に『宗像郡誌』[156]が編まれていたのは、きわめて幸いである。

戦後公表された史料では、『宗像神社史』上・下[157]が宗像大社と宗像神についての基本的史料であり、詳細な考証は大いに参考になる。第3報で宗像神社の祭神の鎮座地

についての同書の結論に疑念を述べたが、同書の立場では社伝との整合性を図るためやむを得なかったものであろう。

神と神信仰全体としては、『神道大系』の各書[158]がほぼあらゆる史料を網羅しており、本研究でも大いに助けられた。収められている史料は各方面の権威により校訂され、解題が付されている。この膨大なシリーズの刊行は松下幸之助の援助によるもので、この業績は出光佐三のそれに並ぶものと言えよう。

## (7) 神と神話の再検討の方向

---

本研究で見てきたように、記紀神話とそれに登場する神々については、根本的な見直しが必要である。これまでの神と神話の研究は、2つの似通った神話体系とその相違点に惑わされてきたように感じられる。『古事記』を捨象し、『書紀』の詳細な解析で意図的な改変を取り除くことができれば、原神話と神々の姿が見えてくることが期待される。その中で重要な項目を2点挙げる。

### (イ)『書紀』の王権に関わる諸神について

『書紀』が、おそらく本報で考察した事情のために、皇室の祖先神を夫神のいないアマテラスとし、化生によって生じたオシホを皇統の祖先としたことは、当時の人々にとっても衝撃的な内容であったであろう。『続日本紀』が養老4年の「日本紀」撰上をきわめて簡単に付けたりのような形で記しているだけなのにも、そのような戸惑いが窺われる。しかし『大祓詞』のような口承による史料が残っているおかげで、本来の皇祖がカムロキ・カムロミの夫婦神であることが分かり、われわれも皇統についての安堵感を覚える。

カムロキ・カムロミと記紀神話の神々との関係や、これらから神武天皇に到る系譜については今後の研究に待つところが多いが、神武の祖神オシホがニニギとニギハヤヒとの親であり、従って皇室と物部氏の共通祖神であることは、3つの独立した史料(『書紀』の一書も含めて)が記すのでおそらく史実であろう。

皇統と物部氏とのつながりは、神武紀東征の段で神武が東によい国があり天の磐船に乗って飛び降りた者があることを聞いて、「その飛び<sup>くだ</sup>下るとい<sup>これにぎはやひ</sup>う者は、是饒速日<sup>い</sup>と謂うか」と言<sup>い</sup>ったと記すことでも分かる。ニギハヤヒが神武と同祖であることは神武の大和入りの段にも記され、ニギハヤヒは神武に大和を譲りその下に仕えることになる。しかしニギハヤヒの東遷と神武の東征には似通った点が多く、同一の史実を反映しているのではないかと考える人も多い。おそらく物部氏の勢力が蘇我氏に敗れて以降衰えていたことを反映して、前者を換骨奪胎して後者としたのではないか。

『大祓詞』の作成者と考えられる中臣氏の祖先については、神武即位前紀に遠祖のあまのたねのみこと天種子命が神武に随伴して宇佐に到り地元の菟狭津媛を娶ったと記されているが、一方『舊事本紀』にはニギハヤヒの東遷時に供奉した32神のうちのあまのこやねのみこと天児屋命（コヤネ）が中臣連の祖と書かれている。中臣氏の氏神として大阪市の枚岡神社に祭られるのは後者であり、現在まで多くの枚岡系・春日系社にこの神名で祭られているので、これが本来の伝承であり、天種子命説話は上記の理由で物部色を消して天皇家に直接仕えてきたことをアピールするためのものではないか。『新撰姓氏録』でも中臣を名乗る氏族の祖神はみなコヤネになっている。ここにも『書紀』における不比等の作為の跡が感じられる。このようなことは他にも多く、これが『舊事本紀』が編まれた理由であろう。

## (ロ) 現在も生き残っている古層の神々について

本研究で見てきたように、現在も一般的に祭られている日本古来の神々は、特に『書紀』では異常に貶められた由緒が記されているものが多い。幸い日本では一度祭られた神を故意に捨て去ることをしない伝統があり、社名が変わったりあるいは他社と統合されても、神名は原則として引き継がれている。このため祭神解析で古代人の信仰世界、ひいてはその神を祭っていた人間集団の動向の推測がある程度可能であり、本研究では宗像神を中心に解析し文献資料や発掘された遺品・遺跡についての考古学的研究成果と併せて歴史事象の推定を試みてきた。しかしこれには現在利用できるデータに制約があり、精度が十分ではないという問題がある。精度向上のために検討すべきことを以下に挙げる。

### ①「神社明細帳」の復元

明治初期、政府は全国の神社について詳細な調査を行った。統計が残っている最も古い神社数は明治12年の176,844社であり[159]、ほぼこの数の神社のデータが集まったものと思われる。本研究で利用した『平成データ』に収められているのが78,960社であるのに比べれば、その価値がよく分かる。しかも『平成データ』の調査は任意のアンケート調査であるので、十分調査せずに回答している場合も多いように感じられる。明治の調査は官命によるもので内容も詳細を極めており、閲覧できた範囲では、由緒に境内社を含めて江戸時代以前からの経緯まで書かれているものがあるのが特筆される。前述の『宗像郡誌』はこのデータに基づいたものと思われる。しかしこのデータが、全国的に現在どの程度残っているかは、部外者には分からない。学術機関が正式な手続きを踏んで調査すれば、おそらく全体像がつかめるのではないか。

## ②中近世の神仏混淆と流行神の影響の分離

古代までの信仰世界を探ろうと思えば、中近世の神仏混淆と流行神の影響を分離する必要がある。第1報で述べたが、青森県津軽地方に残る12社の胸肩神社とその他の県社を含む宗像系神社は、江戸期のほとんどの史料には辨天宮または辨才天堂などと書かれていた。ただしその一部の社に、ある時期に胸肩宮などと書かれたものがあつたので、これら神社がもともと胸肩神社と称されていて、弁天信仰が流行した時期に辨才天などが通称になったと推測することができた。このことは、江戸期の文人菅江真澄が、現在宗像三女神を祭る元県社の善知鳥神社を「うとうのみやしる」が「棟方明神」を祭るとし、また宗像の神を祭るとも書いていることから補強された。ただしこれらの神社の多くが現在三女神を祭るのは、神仏分離で胸肩神社に戻るとき祭神の記憶が失われていたため、役人に示唆されてムナカタの名から現存の宗像神社の祭神とした可能性が強い。同名の一部の社ではイチキシマのみを祭るからである。

個々の神社について本来の祭神を推定するのは、この例のように僥倖に恵まれないかぎり、一般にはかなり難しい。膨大な努力が必要で、個人での探求には限界がある。

以上のように祭神解析から古代以前の信仰世界の全貌に迫るには、組織的努力が必要である。しかしその先には古代の神とそれを祭る氏族、そして古代日本の本来の姿が見えてくるものと思われる。

## あとがき

4年に亘って連載してきた本研究は、これで完結とする。第3報を「宗像三女神と沖ノ島祭祀の始まり（上）」と題したので本報はその（下」とする予定であったが、その次に予定した「沖ノ島祭祀はなぜ続いたか」とかなり内容の重複が生ずるためにこれを一つにまとめ、また別報の予定であった「ムナカタ・ストーリー」をも含めたため、このように長くなった。

終わりにあたり、本研究の投稿を歓迎していただいた伊津信之介むなかた電子博物館運営委員長と、ミスの多い原稿を丁寧に見ていただき適切な助言もいただき、再三の改稿にも丁寧に対処していただいた宮川幹平編集長、そして再三の改訂に対処していただきました各論文に適切なイラストを入れていただいたレイアウト担当のむなかた電子博物館西高志氏に深く感謝する。

また宗像を中心とする考古学的知見について懇切な指導をいただいた宗像市の文化財関係者に感謝の意を表する。なかでも白木英敏氏は貴重な資料を提供していただき、本報告の長大な粗稿の分割公表を勧められた。また原俊一氏には様々な質問にお答えいただいた。

また宗像の考古研究で先駆的な業績があり、多くの総説（たとえば[125]）を発表され、『続宗像郡誌』『宗像地誌集成』などを編集しお送りいただいた野洲市教育委員会の花田勝広氏に感謝し、その業績に敬意を表明する。

最後に本研究のための十数年に亘った調査に協力し執筆を激励した妻の矢田公美に深く感謝する。



- (注1) 宗像神社（現宗像大社）が昭和19年に編纂した『宗像三神奉齋神社調』[7]には6100社以上が記されている。この資料は神社明細帳（附編2参照）に基づくとしており貴重であるが、田心の表記をほとんど落としているなどの欠陥がある。これを補えば明治初期には6200社以上の神社が宗像神を祭っていたと推定される。
- (注2) 東海地方などで多く祭られていた八王子神は、祇園信仰の祭神牛頭天王の8人の王子の意味であった。明治神祇制度下で神仏の分離が強制され、牛頭天王も殆どがそれと習合していたスサノオに名を変えられ、その子神の八王子も誓約で生まれた三女神五男神にすり替えられた。従って三女神を祭り八王子または八柱を名前に持つ神社は、本来の宗像神信仰社ではないことが明らかである。異なる名を持つ神社でも、三女神五男神がセットで祭られている場合は、牛頭天王の子神の八王子であった場合が殆どと考えられる。このような八王子信仰と考えられる社として約600社が抽出された（八王子神を含む場合でも、これとは別に宗像神を含む場合は除外した）。
- (注3) 延喜5年（905）編纂が開始され延長5年（927）に完成した律令の施行細則の延喜式に、官社に指定された全国の神社2861社（祭神3132座）の一覧である神名帳があり、「延喜式神名帳」と呼ばれる（社名のみが残る）。これに含まれる神社は「式内社」と呼ばれる。大小の区別があり、大社の中には神験が高いとされて名神祭を受ける社があつて、これを名神大社（略して名神大）と呼ぶ。ムナカタの式内社は宗像神社と織幡神社（いずれも名神大）である。式内社は、その性格上五畿内とその周辺に多く、地方には少ない。東北は南部に限られる。現在祭神数1位の八幡系社はまだ2社のみで、2位の天照大神を祭る神社はまだ現れていない（伊勢神宮は別格）。
- (注4) 宗像神、特にイチキシマは近世に弁才天（弁財天・弁天）と習合した神社が多いが、他神と習合した場合もあり、一般にそれ以前から祭られていた神（主に女神）に習合したものと考えられる。青森県などでは江戸期に弁財天と呼ばれた神社がもともと胸肩神社の名を持っていたことが記録されている（第1報）。明治初頭に習合が外されたとき、宗像神の場合多くが三女神を祭る神社となったようである。
- (注5) アマテラスは、神代紀第5段では最初に日神と書かれている。しかしこの日神も、夫婦である伊奘諾尊（以下イザナギ）と伊奘冉尊（以下イザナギ）との間の子とされているのであるから、自然物の太陽ではなく太陽になぞらえられた人格的な存在である。これはそのあとその名を「大日靈貴と号す」とすることからも分かる。これは一般に「太陽神を祭る、位の高い巫女」と解釈されている。
- (注6) 有力な毒殺説がある[9]。
- (注7) さらに詳しく見ると、同書の系譜でニギハヤヒの子カゴヤマから一三世の孫尾綱根命までの13代の名は、『海部氏勘注系図』で始祖ホアカリの子カゴヤマ以下の13代の名と、やや異なる表記もあるが全く一致する。これは両者の伝承の正確さを示すとともに、ニギハヤヒがホアカリと同一神であることを明示している。そのほかにも、前章までに見たように、ホアカリがニギハヤヒと同一神であることの傍証は多い。ヤマトでは、入植時のリーダーのニギハヤヒが尊崇され、物部族が太陽信仰の祭祀権を握ったためニギハヤヒは次第に神格化したと考えられる。これが鏡作坐と新屋坐の祭神のホアカリとなった理由であろう。
- (注8) 天武紀上によると、天武は壬申の乱の際、吉野を脱出後三重県四日市市の朝明川のほとりで天照大神を拝んだが、この神名が出るのは神功皇后摂政元年以来である。天武はその2年に長女の大来皇女を斎宮として伊勢神宮に派遣している。
- (注9) この神社は他に豊受大神を祭るが、社名が生子神社と同じ読みであるから本来イクツヒコネのみを祭った神社と思われる。『若宮町誌』[16]によると、久寿3年（1156）に社殿が建てられたという記録があるので、豊受大神は後に伊勢信仰がポピュラーになってから祭ったものであろう。なお同書にはこの社が宗像神社の末社であったことを記すが、このことは『宗像神社史』では確認できない。
- (注10) 第五段第三の一書と第七段第三の一書では5番目に熯之速日命または熯速日命が入り熊野神は6番目となっている。この件については第3報に記した。
- (注11) 十市部→鞍手郡十市郷、筑紫弦田物部→鞍手郡粥田郷鶴田、二田造・二田物部→鞍手郡二田郷、馬見物部→嘉穂郡馬見郷、嶋戸物部→遠賀郡島門、赤間物部→宗像郡赤間、筑紫間物部→豊前規矩郡、筑紫贄田物部→

鞍手郡新分郷など[20]。

- (注 12) 春日大社とその系列の神社に祭られる<sup>ふつぬし</sup>経津主も布都主とも書かれるが、これはもともと千葉県の香取大社の主祭神であり本来の物部氏のフツ・フル信仰とは独立した拡がりを示すのでここでは除外する。
- (注 13) これには空海弘法大師が高野山にニウツを祭った（丹生官省符神社）ことの影響もある。しかしこれは地元神としてなので、それ以前からこの地方に多く祭られていたことには間違いない。
- (注 14) 方格T字鏡は『鏡データ集成』調査以降に明確になった概念であるので、同調査の方格規矩鏡および仿製方格規矩鏡と部分的に重複している。しかしここでは他鏡種との整合性を保つため重複の削除は行っていない。
- (注 15) 岡村秀典[53]の分類によれば、鈕座（中央の鏡を吊す穴のある半円形の突起の回りの文様）の形は平原鏡の方がより古い鏡に多いが、一方その周りの十二支の銘文の字体は沖ノ島鏡の方が古い鏡に多い。
- (注 16) 『宗像沖ノ島』p.521 [Table 29]には表作成者のミスと思われる重大な誤りがある。
- (注 17) 同じ鋳型で作られたと考えられる鏡。鈴木勤による復元実験[55]でも同一鋳型から複数の鏡が鋳造可能であることが証明されている。
- (注 18) これらの鏡は、いずれも三角縁神獸鏡創作の原型となったと考えられている。これは鋳造後の仕上げ加工痕が、鏡種によらず古墳毎によく似ているからである。
- (注 19) K・J 岩は図に示したように I 岩を支えている岩なので I 岩で代表させる。
- (注 20) このことは倭軍が実際に渡海していたことの証拠とされる。
- (注 21) 応神の 3 年に、<sup>あずみのむらじ</sup>処処の海人が命に従わないので、阿 曇 連の祖大浜宿弥を遣わしてそのソバメキを平らげ、<sup>あま みこともち</sup>海人の 宰 としたと書く。これまで広く国内航路で活躍していた宗像海人族を外し、安曇族に海人の統括<sup>のりごと</sup>を委ねたと考えられる。このあと応神の 5 年に、「諸国に 令 して海人及び山守部を定む」とあるので、明らかに全国の海人を、諸国の国造を介して中央の統制下に置いたのである。
- (注 22) ムナは胸の古音。第 2 報参照。
- (注 23) 『書紀』天武天皇 10 年に川島皇子以下 6 人の皇族と 6 人の高官に帝紀及び上古諸事を記定するよう命じたと記す。これが編纂開始を意味するかどうかは確定していないが、撰上時も皇子が行っているものでこれで問題ないのではないか。

## 【参考文献】

- [1] 宗像大社,『「海の正倉院」沖ノ島』, p.6, 2003.
- [2] 神社本庁,『全国神社祭祀祭礼総合調査(平成七年)』WINDOWS版,(2005).
- [3] 矢田浩,『宗像神を祭る神社の全国分布とその解析ー宗像神信仰の研究(1)ー』,むなかた電子博物館紀要第7号,2016.
- [4] 矢田浩,『北部九州の宗像神と関連神を祭る神社の解析ー宗像神信仰の研究(2)ー』,むなかた電子博物館紀要第8号増刊,2017.
- [5] 矢田浩,『宗像三女神と沖ノ島祭祀の始まり(上)ー宗像神信仰の研究(3)ー』,むなかた電子博物館紀要第8号増刊,2017.
- [6] 矢田浩,『宗像と宇佐の女神、そして卑弥呼[付編]魏使の邪馬台国への行程ー宗像神信仰の研究(4)ー』,むなかた電子博物館紀要第9号,2018.
- [7] 宗像神社,宗像神社史料第二輯『宗像三神奉齋神社調』,1944.
- [8] 坂本太郎他校注,『日本書紀(一)～(五)』,岩波文庫,1994-2005.
- [9] たとえば、土淵正一郎,『高松塚は高市皇子の墓』,新人物往来社,1991.
- [10] 森博達,『日本書紀の謎を解く』,中公新書,1999.
- [11] 森博達,『日本書紀成立の真実』,中央公論新社,2011.
- [12] 大和岩雄,『神社と古代王権祭祀』,白水社,1989.
- [13] 高田吉近,『豊前国志一』,1865.
- [14] 加藤一純他,『筑前国統風土記付録 中巻』,文献出版, pp.110, 128, 1977.
- [15] 宗像神社復興期成会,『宗像神社史 上』, p.626, 1961.
- [16] 若宮町,『若宮町誌下』, p.1081, 2005.
- [17] 鞍手郡教育会,『鞍手郡誌』, p.1456, 1934.
- [18] 青柳種信(広渡正利他校訂),『筑前国統風土記拾遺(中)』,文献出版, p.572, 1993.
- [19] 伊東尾四郎,『宗像郡誌 上編』,秀巧社, p.97, 1944.
- [20] 谷川健一,『白鳥伝説』,集英社, pp.105-107, 1986.
- [21] 田中卓,『新撰姓氏録の研究』,国書刊行会, p.103-111, 1996.
- [22] 柴田昌兄,『集落からよむ弥生社会[弥生時代の考古学8]』,同成社, pp.224-239, 2008.
- [23] 矢島澄策,『日本水銀鋳床の史的考察』,『日本民族文化資料集成第10巻金属の文化史』,三一書房, pp.28-38, 1991.
- [24] 山田敬一,『地質ニュース』第162号, pp.7-13, 1968..
- [25] 御坊市ホームページ,『堅田遺跡』,2000.11.19.[http://kodaiken.sub.jp/old\\_siryou/ronbun/kouza\\_pdf/hara2018.pdf#search=%27%E6%9D%BE%E8%8F%8A%E9%87%8C%E4%BD%8F%E5%B1%85%E5%BC%A5%E7%94%9F%27](http://kodaiken.sub.jp/old_siryou/ronbun/kouza_pdf/hara2018.pdf#search=%27%E6%9D%BE%E8%8F%8A%E9%87%8C%E4%BD%8F%E5%B1%85%E5%BC%A5%E7%94%9F%27)(2018年11月閲覧).
- [26] 出原恵三,『南国土佐から問う弥生時代像 田村遺跡』,新泉社,2009.
- [27] 原 紘,『松菊里住居について』,[http://kodaiken.sub.jp/old\\_siryou/ronbun/kouza\\_pdf/hara2018.pdf#search=%27%E5%8E%9F+%E7%B4%98+%E6%9D%BE%E8%8F%8A%E9%87%8C%27](http://kodaiken.sub.jp/old_siryou/ronbun/kouza_pdf/hara2018.pdf#search=%27%E5%8E%9F+%E7%B4%98+%E6%9D%BE%E8%8F%8A%E9%87%8C%27)(2018年11月閲覧).
- [28] 津屋崎市教育委員会,『今川遺跡』,1981.
- [29] 宗像大社復興期成会,『沖ノ島』,1958.
- [30] 宗像大社復興期成会,『続沖ノ島』,1961.
- [31] 宗像大社復興期成会,『宗像沖ノ島』,1979.
- [32] 武末純一,「沖ノ島祭祀の成立前史」『沖ノ島研究報告Ⅰ』,①-1, pp.1-37, 2011.
- [33] 小田富士雄編,『沖ノ島と古代祭祀』,吉川弘文館,1988.
- [34] 宗像大社文化財管理事務局,『「海の正倉院」沖ノ島』,宗像大社,2003.
- [35] 弓場紀知,『古代祭祀とシルクロードの終着と沖ノ島』,新泉社,2005.
- [36] 笹生衛,「日本における古代祭祀研究と沖ノ島祭祀」『沖ノ島研究報告Ⅱ』②-1, pp.43-61, 2012.
- [37] 小田富士雄,『沖ノ島祭祀遺跡の再検討2』,『宗像・沖ノ島と関連遺産群研究報告Ⅱ-1』, pp. ①-1-41, 2012.
- [38] 九州国立博物館『特別展図録 宗像沖ノ島と大和朝廷』, p.138, 2017.

- [39] 禹在柄,『竹幕洞祭祀遺跡と沖ノ島祭祀遺跡』『沖ノ島研究報告Ⅰ』, ⑪, pp.1-16, 2011.
- [40] 石原道博編訳,『魏志倭人伝他3編』, 岩波文庫, p.71, 1985.
- [41] 上田雄,『遣唐使全航海』, 草思社, 2006.
- [42] 弓場紀知,『住吉と宗像の神』, 筑摩書房, pp.390-419, 2005.
- [43] 「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議,『宗像・沖ノ島と関連遺産群研究報告Ⅰ』(以下『沖ノ島研究報告Ⅰ』), 2011,『宗像・沖ノ島と関連遺産群研究報告Ⅱ-1、Ⅱ-2』(以下『沖ノ島研究報告Ⅱ』), 2012,『宗像・沖ノ島と関連遺産群研究報告Ⅲ』(以下『沖ノ島研究報告Ⅲ』), 2013.
- [44] 笹生衛,「沖ノ島祭祀遺跡における遺物構成と祭祀構造」,『沖ノ島研究報告Ⅰ』g1, pp.1-32, 2011.
- [45] 笹生衛,『古墳時代における祭具の再検討』, 学習院大学伝統文化リサーチセンター研究紀要, 第2号, pp.91-112, 2010.
- [46] 重住真貴子ほか,『沖ノ島出土鏡の再検討』, 奈良県立橿原考古学研究『考古資料における3次元デジタルアーカイブの活用と展開』, pp.16-136, 2010.
- [47] 森下章司, 文献[46], pp.32-34.
- [48] 辻田淳一郎, 第15回九州前方後円墳研究会『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉(北九州大会発表要旨・資料集)』, pp.75-88, 2012.
- [49] 国立歴史民俗博物館,『共同研究「日本出土鏡データ集成」2/ ー弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成』, 国立歴史民俗博物館研究報告第56集, 1994.
- [50] 白石太一郎・設楽博己,『弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成 補遺1』, 国立歴史民俗博物館研究報告第97集, 2002.
- [51] 下垣仁志,『日本列島出土鏡集成』, 同成社, 2016.
- [52] 伊都国歴史博物館,『銅鏡観察への招待』, p.2, 2004.
- [53] 岡村秀典,『共同研究「日本出土鏡データ集成」-Ⅰ』, 国立歴史民俗博物館研究報告第55集, pp.39-84, 1994.
- [54] 辻田淳一郎,『鏡と初期大和政権』, すいれん社, 2007.
- [55] 鈴木勉,『三角縁神獣鏡・同范(型)鏡論の向こうに』, 雄山閣, 2016.
- [56] 篠原祐一,「五世紀における石製祭具と沖ノ島の石材」『沖ノ島研究報告Ⅰ』g2, pp.1-39, 2011.
- [57] 第15回九州前方後円墳研究会,『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉(北九州大会発表要旨・資料集)』, 2012.
- [58] 辻田淳一郎, 文献[57], pp.75-85.
- [59] 李東冠, 文献[57], pp.139-167.
- [60] 柳田康雄,『沖ノ島研究報告Ⅰ』, g1, pp.1-28, 2011.
- [61] 車崎正彦,『考古資料大観 第5巻 弥生・古墳時代鏡』, 小学館, pp.182-183, 2002.
- [62] 甲元真之,『講座日本の考古学 6 弥生時代(下)』, 青木書店, pp.483-513, 2011.
- [63] たとえば. 安田嘉憲,『生命文明の世紀へ』, 第三文明社, 2008.
- [64] 中川毅,『時を刻む湖』, 岩波書店, 2015.
- [65] 中川毅,『人類と気候の10万年史』, 講談社, 2017.
- [66] 渡辺正気,『日本の古代遺跡 34 福岡県』, 保育社, p.139, 1987.
- [67] 宗像市史編纂委員会,『宗像市史 通史編第一巻』, 付図1, 1997.
- [68] 海上保安庁,『倉良瀬戸』, 1998.
- [69] 福沢仁之ほか,『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』, vol.9, pp.5-17, 1998.
- [70] 北九州市,『北九州市史 総論 先史・原始』, pp.592-602, 1985.
- [71] 重藤輝行,『沖ノ島研究報告Ⅰ』, ③-1, pp.71-104, 2011.
- [72] 白井克也,『弥生時代の交易—ものの動きとその担い手—』, 第49回埋蔵文化財研究集会, 2001.
- [73] 久住猛雄,『考古学研究』, 53巻第4号, pp.20-36, 2007.
- [74] 金想民,『季刊考古学 第113号』, 雄山閣, pp.70-74, 2010.
- [75] 小柳和宏,『大分県地方史(200)』, 大分県地方史研究会, pp.33-49, 2007.
- [76] 高田健一,『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報』, 島根県教育委員会, pp.56-62, 2004.
- [77] 野島永,『河瀬正利先生退官記念論文集 考古論集』, 河瀬正利先生退官記念事業会, pp.1-12, 2004.
- [78] 島根県立古代出雲歴史博物館,『展示図録 輝く出雲の玉』, 2009.
- [79] 大賀克彦,『国史跡 田熊石畑遺跡』, 宗像市教育委員会, pp.178-186, 2014.

- [80] 奈良県教育委員会, 『大和天神山古墳』, 吉川弘文館, 1963.
- [81] 河上邦彦他, 『黒塚古墳の発掘調査』日本考古学 6 卷, pp.95-104, 1999.
- [82] 奈良県立橿原考古学研究所, 『見沢・大沢古墳群: 菟田野町』, 1982.
- [83] 松田寿男, 『古代の朱』, ちくま学芸文庫, 2005.
- [84] T. Minami et al, 『近畿大学総合理工学研究所紀要』, vol.20, pp. 41-48, 2008.
- [85] 南武志ほか, 『考古学と自然科学』, 日本文化財科学会, 第 62 号, pp.65-72, 2011.
- [86] 河野摩耶ほか, 『古代学研究』, 第 196 号, pp.33-36, 2012.
- [87] 河野摩耶, 『福岡金属遺物談話会試料』, April 11, 2014.
- [88] 朴天秀, 『加耶と倭』, 講談社, p.32, 2007.
- [89] 朴天秀, 文献[88], 口絵写真 p.3.
- [90] 橋本達也『古墳時代の考古学 2 古墳出現と展開の地域相』, 同成社, pp.107-117, 2012.
- [91] 木下尚子, 『考古学研究』, 52 巻第 2 号, pp.25-41, 2005.
- [92] 諫早直人, 第 15 回九州前方後円墳研究会『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉(北九州大会発表要旨・資料集)』, pp.89-121, 2012.
- [93] 神谷正弘, 『古文化談叢』66 集, pp.129-143, 2011.
- [94] 塚本敏夫, 『古墳時代の考古学 5 時代を支えた生産と技術』, 同成社, pp.154-169, 2012.
- [95] 東京都鍍金工業組合 HP, [http://www.tmk.or.jp/history\\_03.html](http://www.tmk.or.jp/history_03.html) (2018 年 12 月閲覧)
- [96] 朴天秀, 文献[88], p.145.
- [97] 宗像市教育委員会, 『国史跡 田熊石畑遺跡』, 2014.
- [98] 宗像市教育委員会, 『宗像市遺跡等分布地図 2011 年版』, 2011.
- [99] 貝原益軒(伊東尾四郎校訂), 『筑前国続風土記』, 文献出版, 1987.
- [100] 遠賀郡教育会, 『遠賀郡誌』, 臨川書店, 1986 復刻.
- [101] 九州国立博物館, 特別展図録『馬 アジアを駆けた二千年』, p.167, 2010.
- [102] 桃崎祐輔, 『古墳時代の考古学 5 時代を支えた生産と技術』, 同成社, pp.204-213, 2012.
- [103] 宗像教育委員会, 『田野瀬戸古墳』, 2007.
- [104] 白木英敏, 『古墳時代の海人集団を再検討する』, 第 56 回埋蔵文化財研究集会, pp.79-87, 2007.
- [105] 筑紫野史学研究会, 『浜宮貝塚調査概報』, 1971.
- [106] 宗像市教育委員会, 『桜京古墳』, 2007.
- [107] 宗像市郷土文化学習交流館, 『海の道むなかた 展示図録』, p.8, 2012.
- [108] 松田真一, 『金の輝き、ガラスの煌めきー藤ノ木古墳の全貌』, 橿原考古学研究所附属博物館, pp.91-92, 2007.
- [109] 岡田裕之・原俊一『日本考古学 17 号』, pp.25-41, 2004.
- [110] 阿南祥悟, 『福岡大学考古学論集 2 考古学教室開設 25 周年記念』, pp.265-271, 2013.
- [111] 宗像市教育委員会, 『大井三倉』, 1987.
- [112] 大澤正巳, 『宗像市史 通史編第 1 巻』, pp.837-857. 1997.
- [113] 大澤正巳, 『勝浦北部丘陵遺跡群』, 津屋崎教育委員会, pp.102-115. 1998.
- [114] 大澤正巳, 『日本製鉄史論集』, たたら研究会, pp.85-146, 1983.
- [115] 宗像市教育委員会, 『朝町山ノ口Ⅱ』, 1991.
- [116] 大澤正巳, 『尾崎天神遺跡Ⅲ』, 遠賀町教育委員会, pp.102-114. 1995.
- [117] 福原栄太郎, 『宗像市史 通史編第 2 巻』, 宗像市史編纂委員会, pp.97-102, 1999.
- [118] 宗像教育委員会, 『冨地原神屋崎』, 1996.
- [119] 宗像教育委員会, 『埋蔵文化財発掘調査報告書-1986 年度-』, 1986.
- [120] 宗像市教育委員会, 『久戸古墳群』, 1974, 『久戸古墳群Ⅱ』, 1980.
- [121] 原俊一, 『福岡考古』, 13 号, pp.1-17, 1986.
- [122] 小島篤, 『九州歴史資料館 研究論集 37』, pp.1-25. 2009,
- [123] 桃崎祐輔, 『西日本新聞 平成二五年六月六日号』, 2013.
- [124] 原俊一, 『歴史を学ぼう会資料(平成 26 年 8 月 29 日)』, 2014.
- [125] 花田勝広, 『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉(北九州大会発表要旨・資料集)』, 第 15 回九州前方後円墳研究会, pp.1-61, 2012.

- [126] 桃崎祐輔,『日本考古学協会 2012 年福岡大会研究発表資料集』, pp.499-527, 2012.
- [127] 壱岐市教育委員会,『壱岐史誌』, 2014.
- [128] 栗畑光博,『火山噴火が狩猟採集社会に与えた影響』九州大学学位論文, 2014.
- [129] 李 相均,『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』, vol.12, pp.113-168, 1994.
- [130] 木崎康弘,『豊饒の海の縄文文化 曾畑貝塚』, 新泉社, p.36, 2004.
- [131] 端野晋平,『松菊里型住居の伝播とその背景』九州と東アジアの考古学, 九州大学考古学教室, pp.45-70, 2008.
- [132] 松尾奈緒子,『九州考古学』, 第 87 号, pp.23-44, 2012.
- [133] 佐々木高明,『日本史誕生』, 集英社, p.333, 1991.
- [134] 佐藤長門,『文字と古代日本 1 支配と文字』, 吉川弘文館, pp.25-42, 2004.
- [135] 榎村寛之,『文字と古代日本 4 神仏と文字』, 吉川弘文館, p.111, 2005.
- [136] 大和岩雄,『古事記成立考』, 大和書房, pp.118-121, 1975.
- [137] 大和岩雄,『新版 古事記成立考』, 大和書房, 2009.
- [138] 上田正昭,『日本の神話を考える』, p.32, 小学館. 1991.
- [139] 小島憲之,『日本古典文学大系 69 懐風藻ほか』, 岩波書店, pp.12-14, 1964.
- [140] 小林芳規,『日本の古代 14 言葉と文字』, 中央公論社, pp.265-324, 1988.
- [141] 犬飼隆,『列島の古代史 6 言語と文字』, 岩波書店, pp.11-44, 2006.
- [142] 鎌田純一・上田正昭,『日本の神々』, 大和書房,
- [143] 森博達,『日本の古代 14 言葉と文字』, 中央公論社, pp.111-172, 1988.
- [144] 遠藤慶太,『六国史』, 中公新書, 2016.
- [145] 岡田莊司,『神社史料集成(神社史料データベース)』<http://21coe.kokugakuin.ac.jp/db/jinja/jinjaindex.html/>. (2019 年 3 月閲覧)
- [146] 西宮一民校注,『古語拾遺』岩波文庫, 1985.
- [147] 鎌田純一,『先代舊事本紀の研究 研究の部』, 吉川弘文館, 2013.
- [148] 田中卓,『新撰姓氏録の研究』, 図書刊行会, 1996.
- [149] 榎村寛之,『文字と古代日本 4 神仏と文字』, p.111, 2005.
- [150] 森浩一,『海と列島文化 2 日本海と出雲世界』, 小学館, pp.47-53, 1991.
- [151] 武光誠,『邪馬台国が見えてきた』, 筑摩新書, pp.68-70, 2000.
- [152] 三橋健,『国内神名帳の研究 論考編および資料編』, おうふう, 1999.
- [153] 神道大系編纂会,『海部氏系図他 古典編 13』, 神道大系編纂会, pp.5-57, 1992.
- [154] 鈴木正信,『日本古代氏族系譜の基礎的研究』, 東京堂出版, pp.400-445, 2012.
- [155] 宗像大社文書編纂刊行委員会,『宗像大社文書』, 第 1-4 巻, 1993-2015.
- [156] 伊東尾四郎,『宗像郡誌 上編』, 秀巧社, 1944.
- [157] 宗像神社復興期成会,『宗像神社史(上)』, 1961, および『宗像神社史(下)』, 1966.
- [158] 神道大系編纂会,『神道大系』全 120 巻, 1977-1994, および『続神道大系』全 50 巻, 1995-2007.
- [159] 藺田稔ほか,『神道史大辞典』, 吉川弘文館, p.1201, 2004.